

639

186



2

0053570-000

639-186

山村民俗誌

田中喜多見・著

一誠社

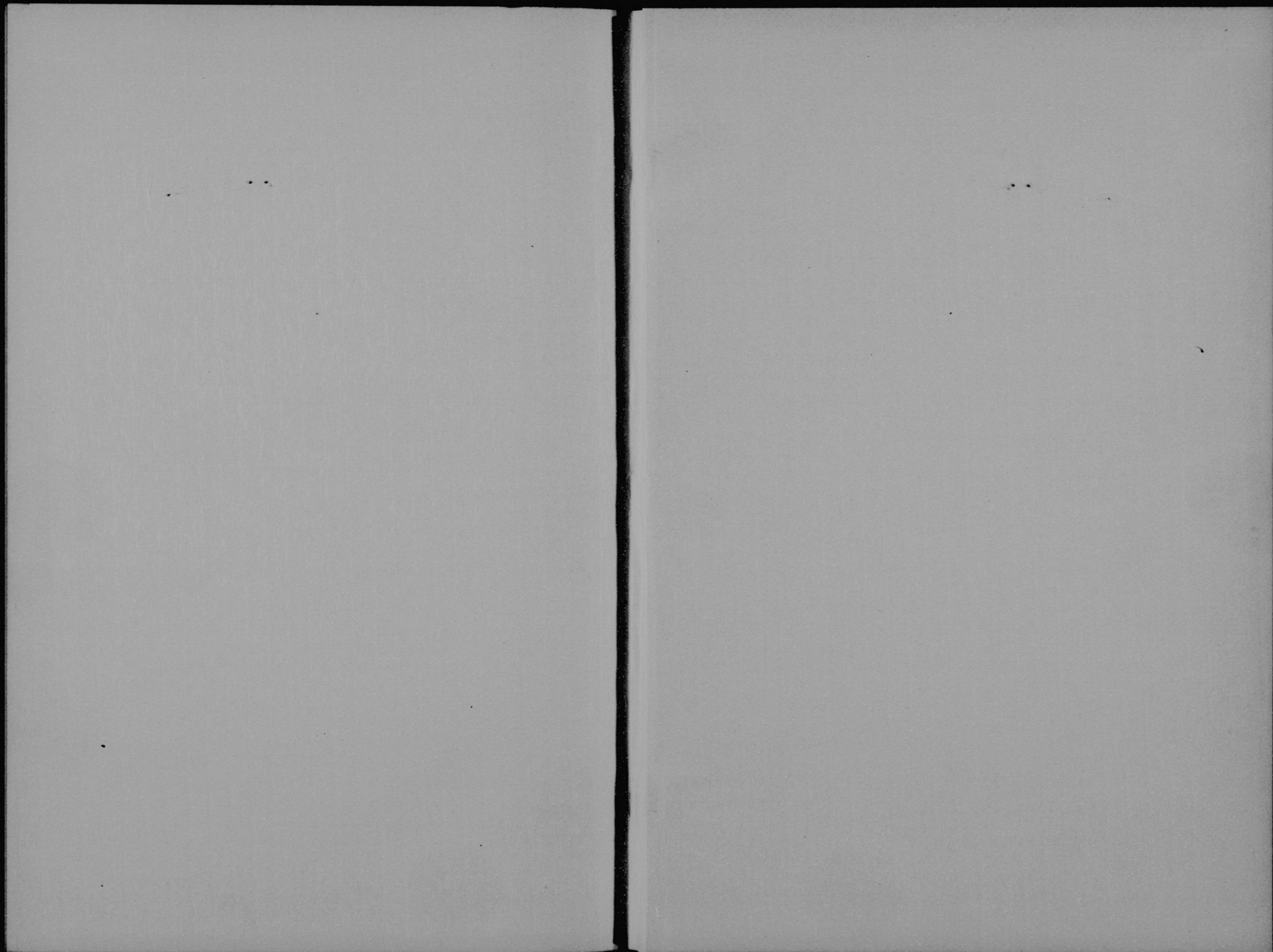
山の生活篇

昭和8

AIA

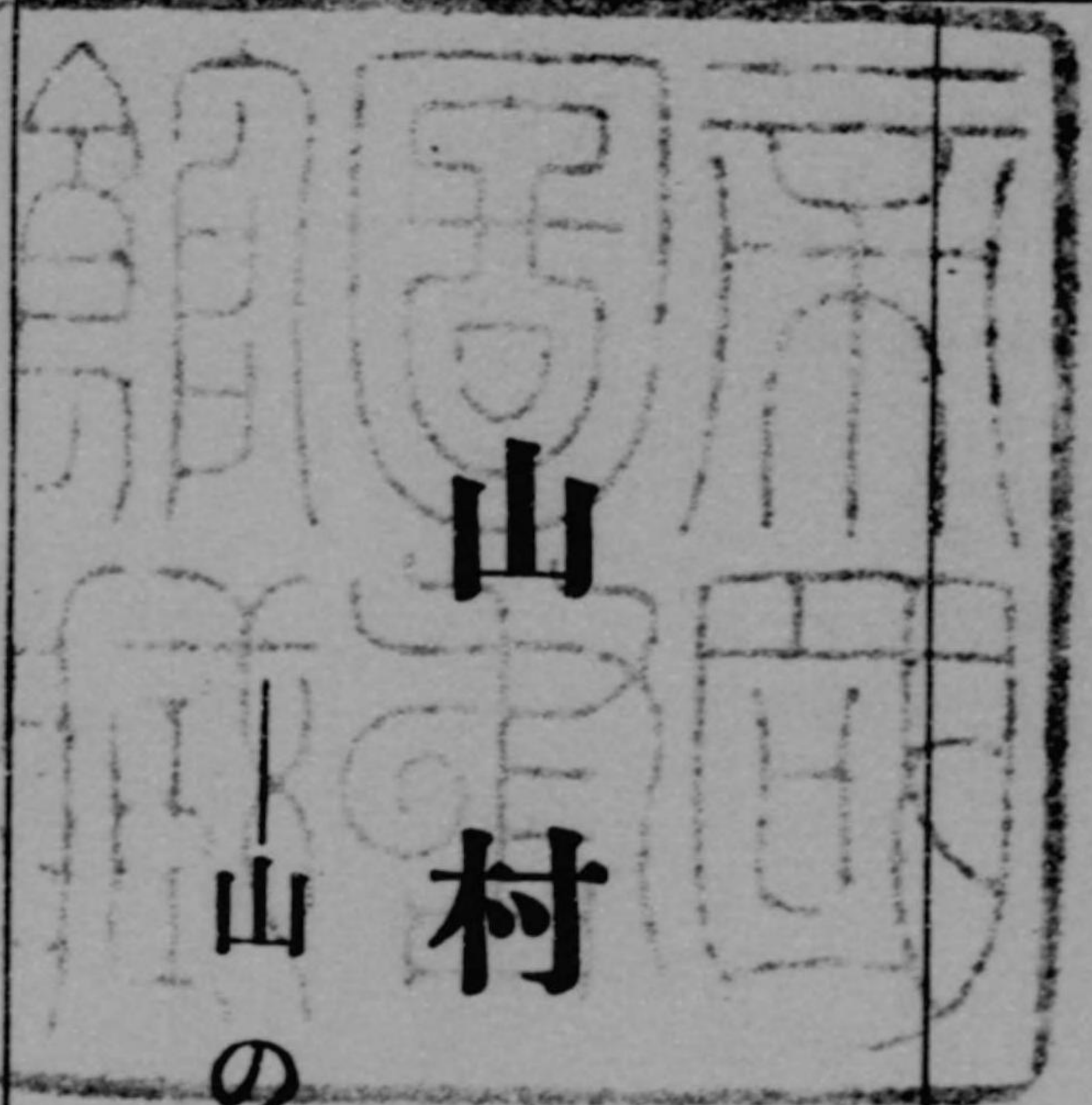
この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年3月23  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので







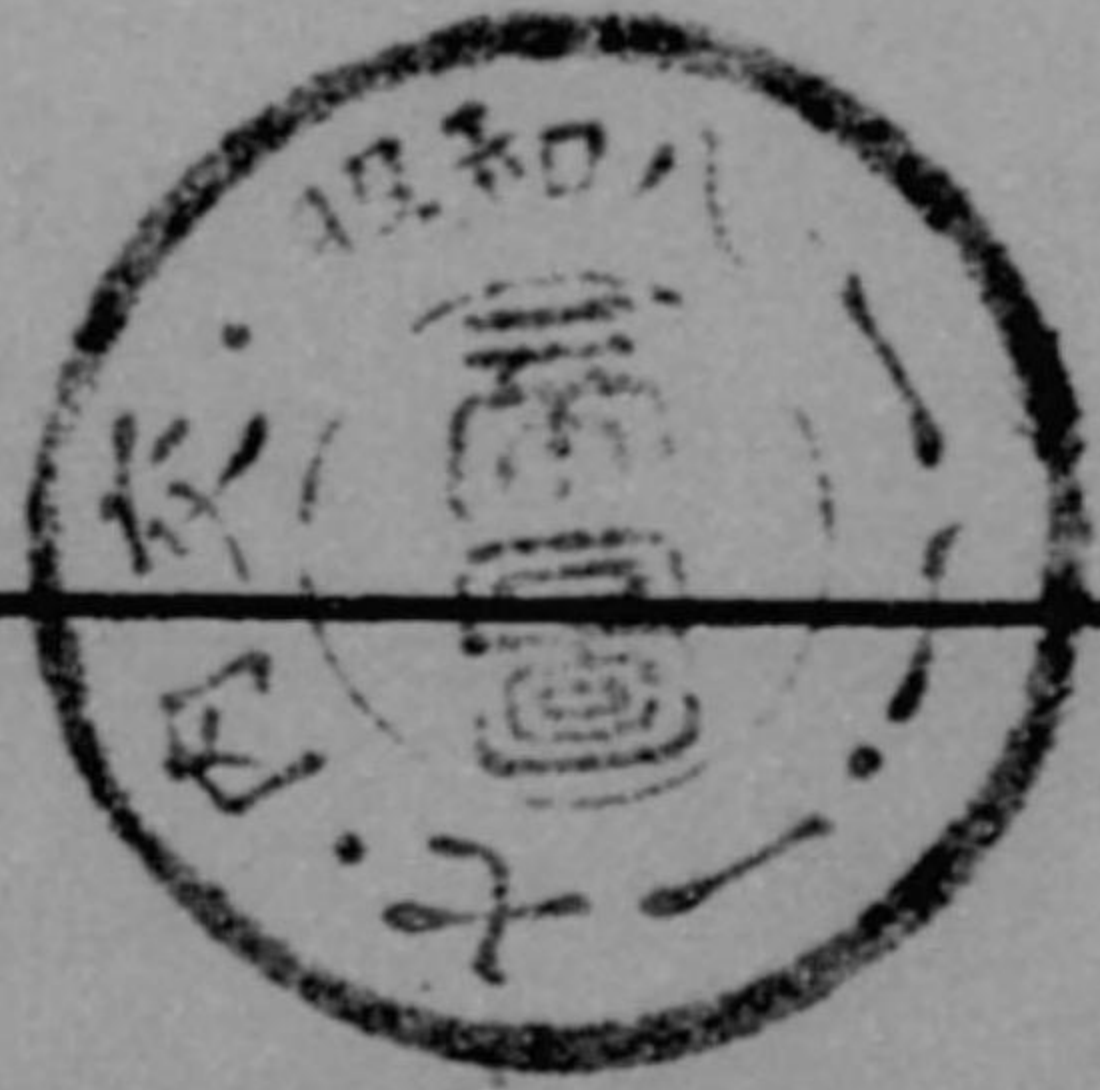
田中喜多見著



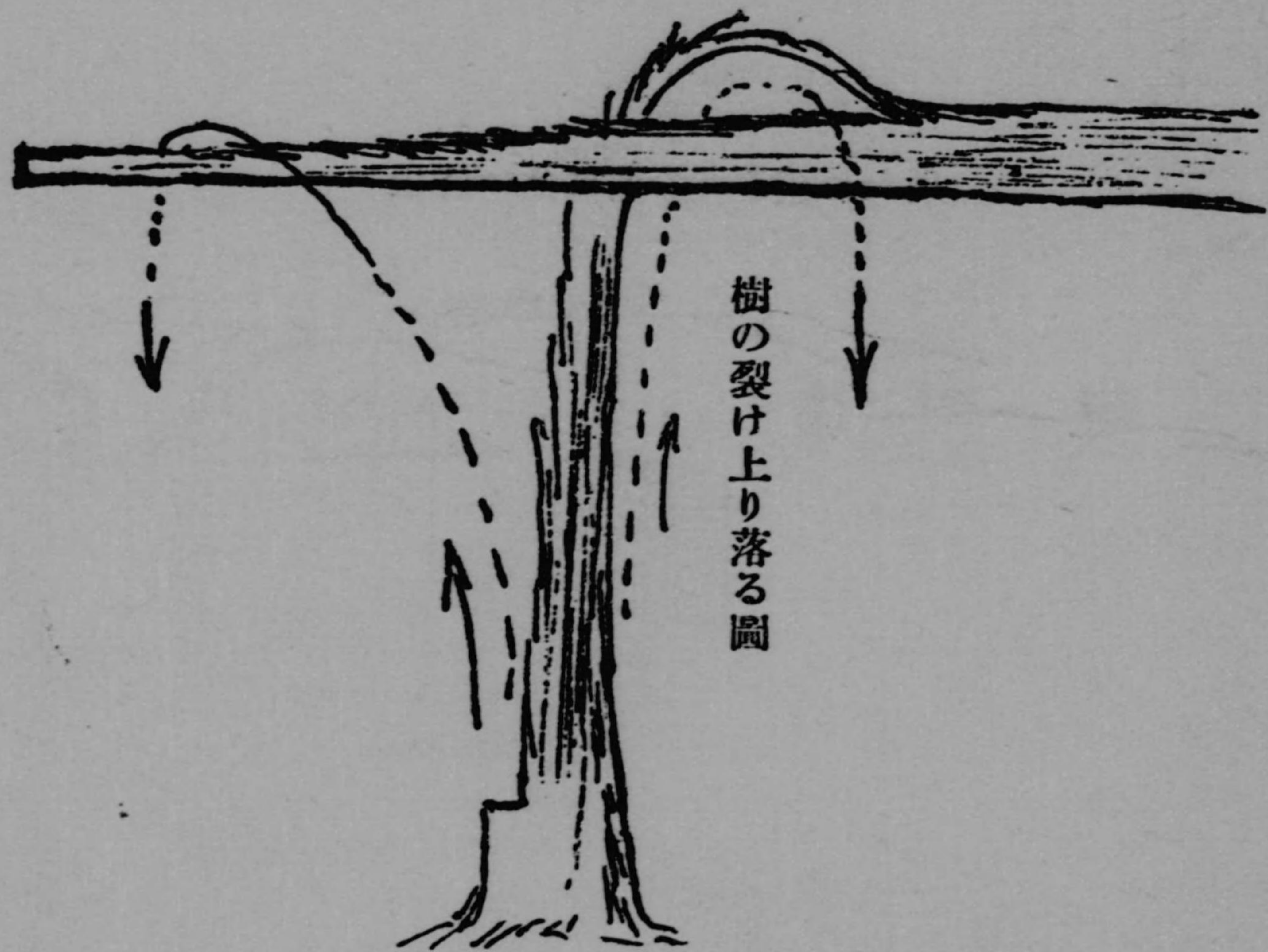
山村民俗誌

山の生活篇

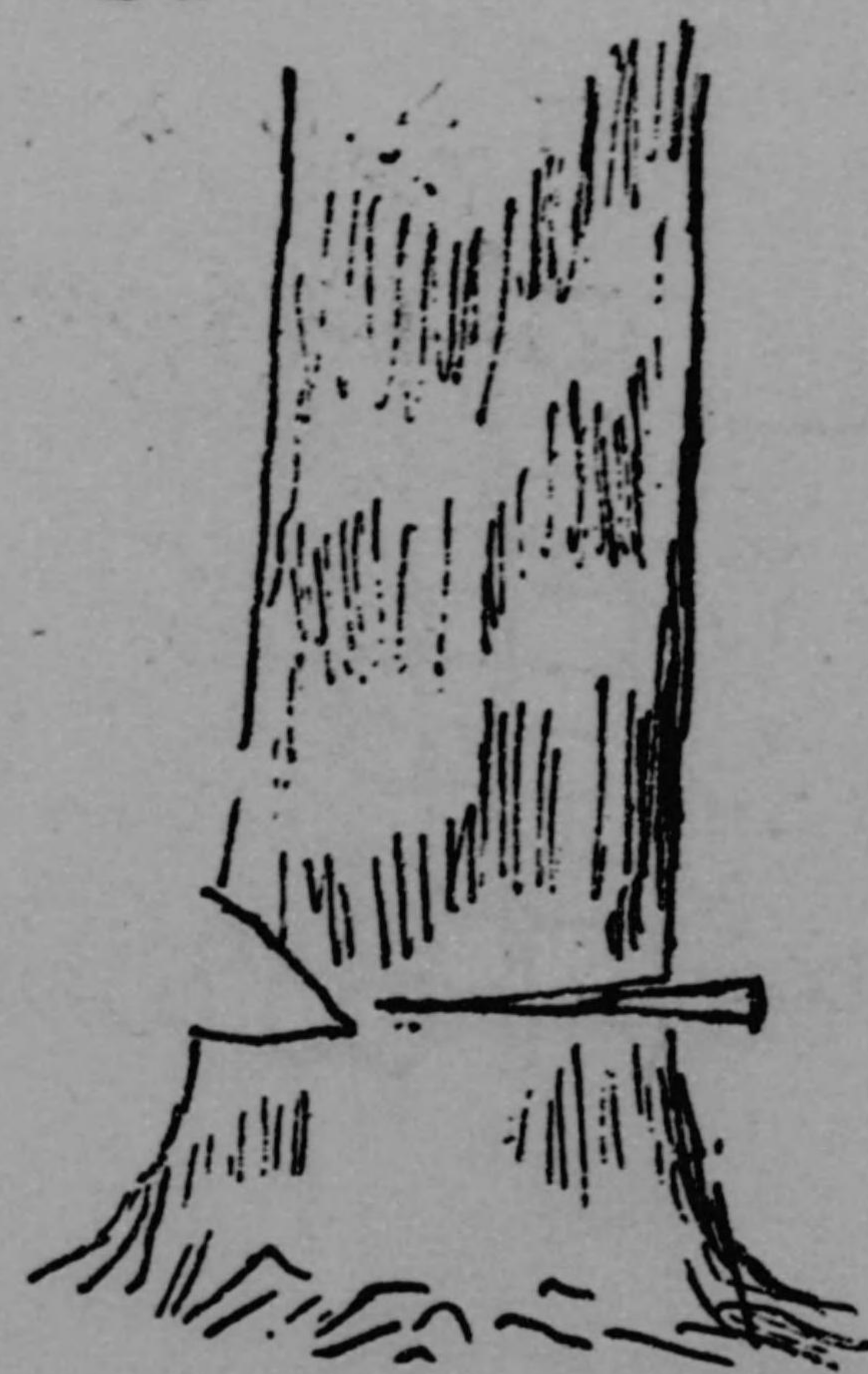
一誠社版





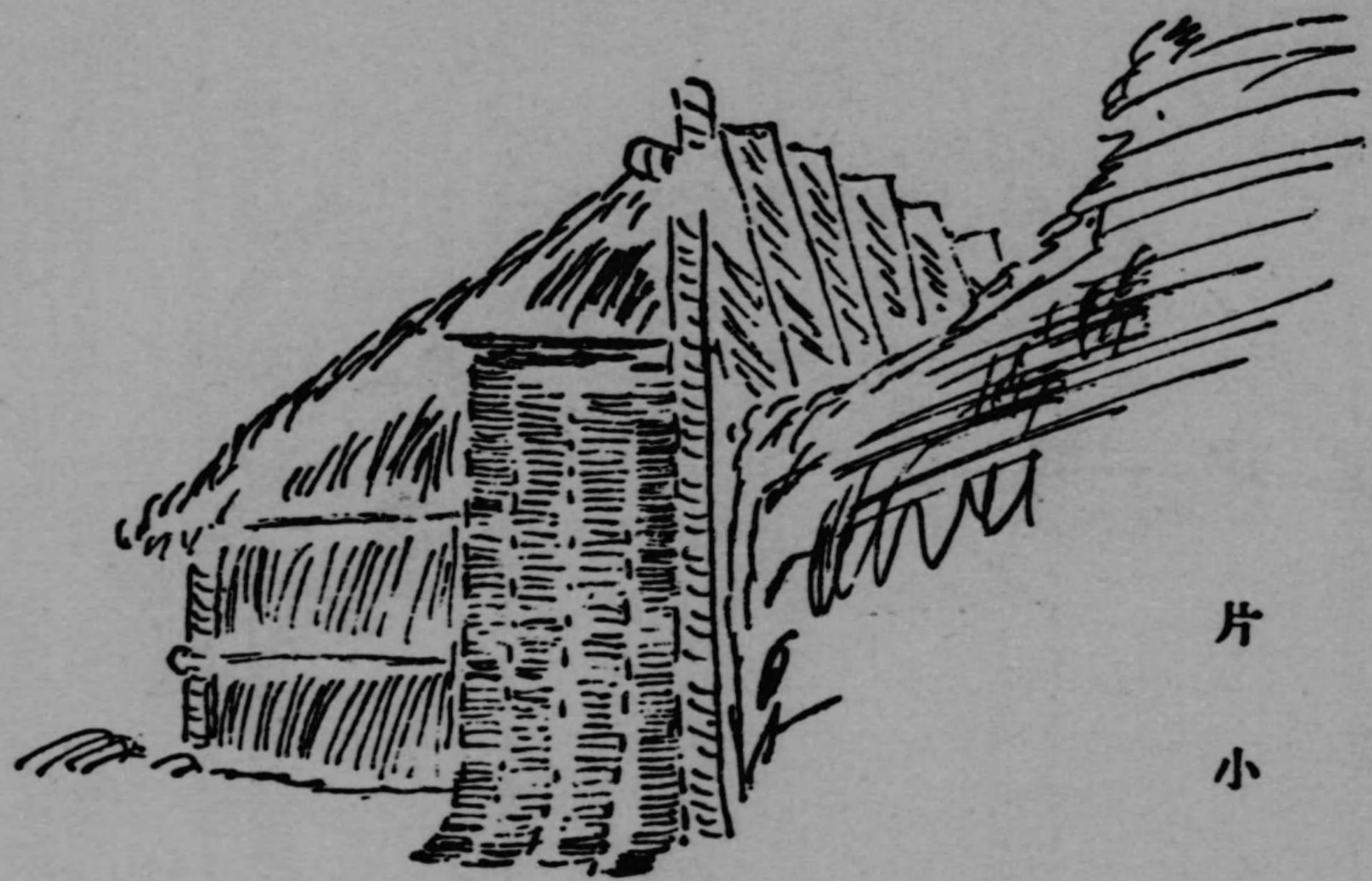


樹の裂け上り落る圖

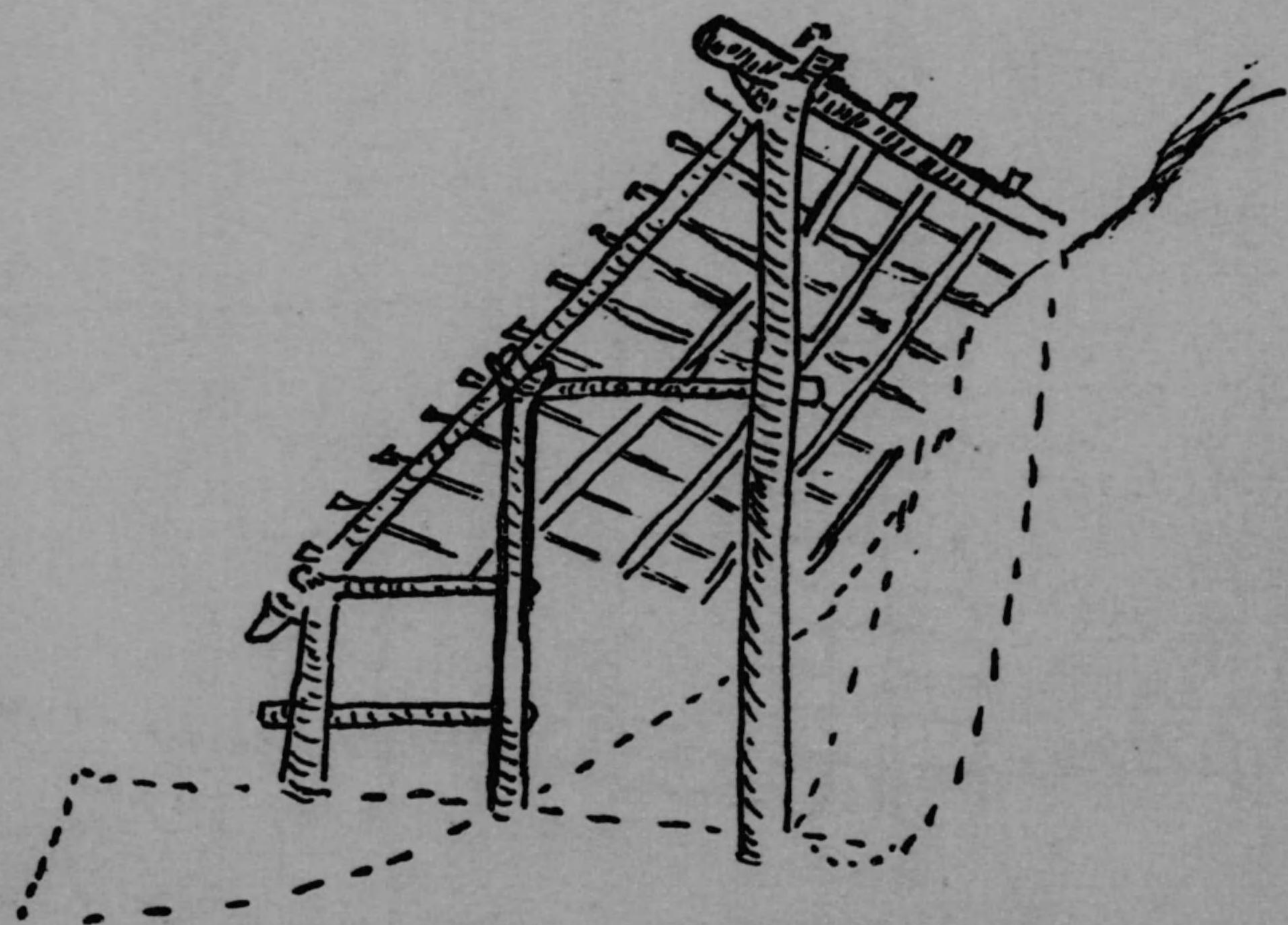


ク  
チ  
ヤ

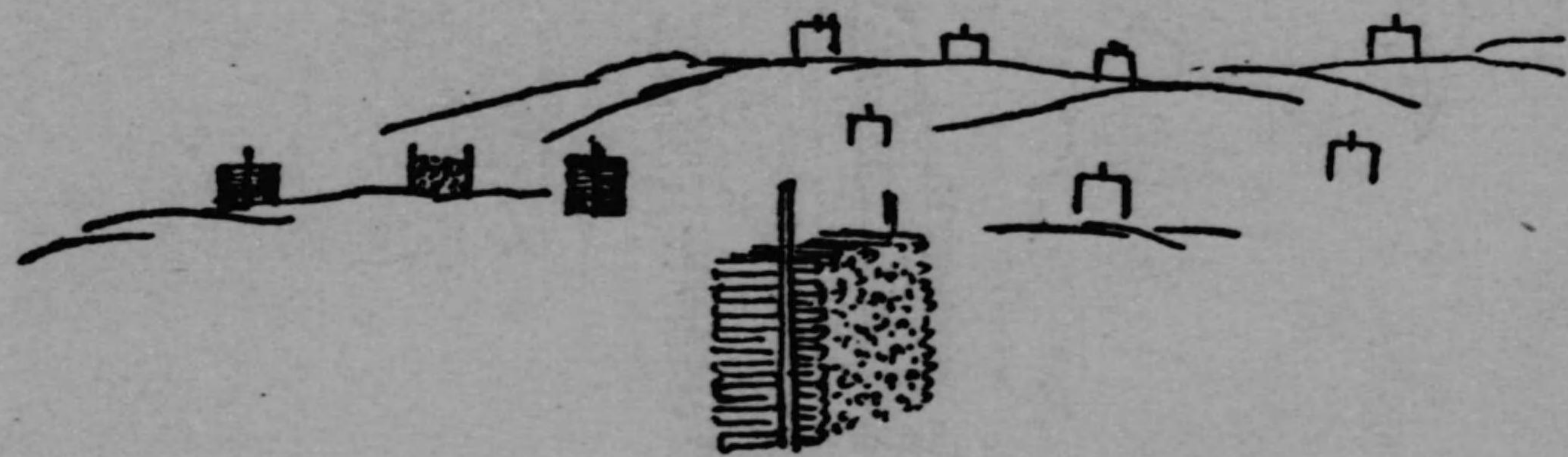




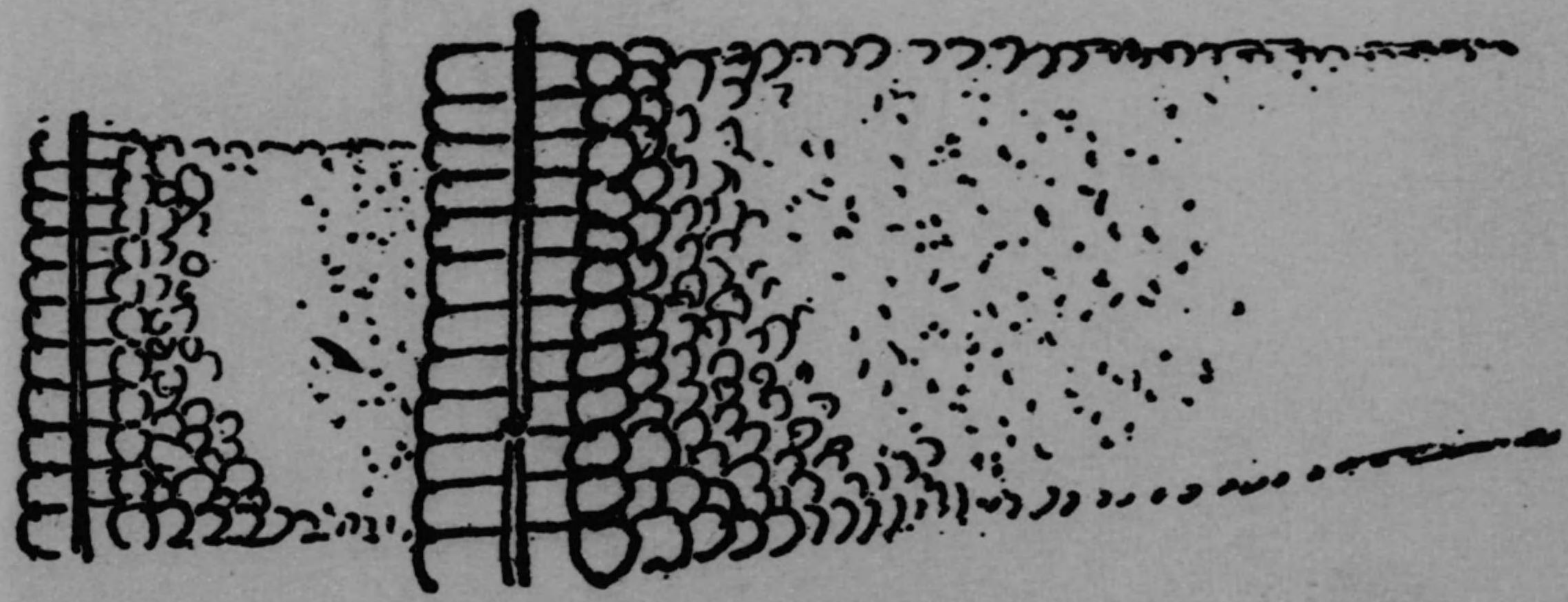
片  
小  
舎



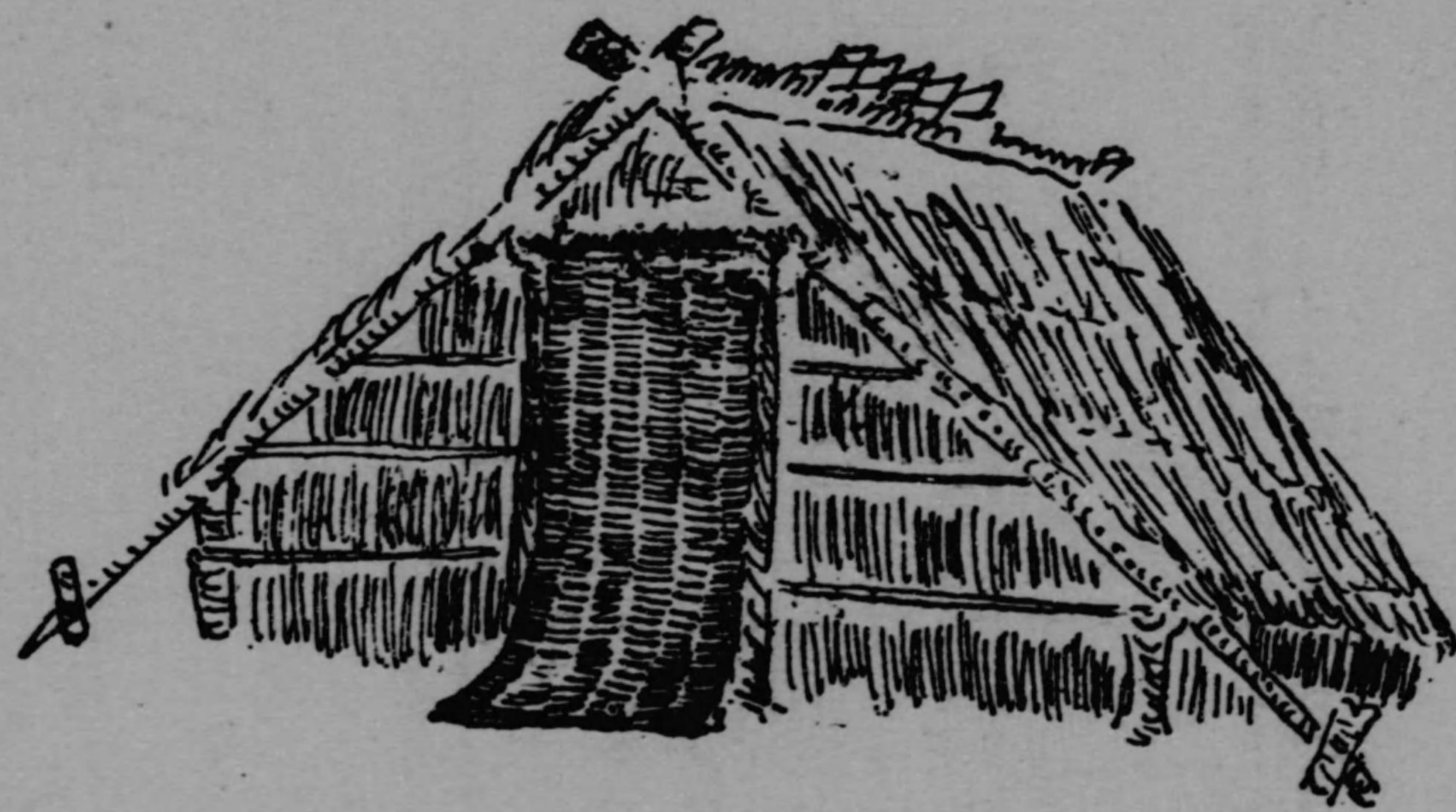
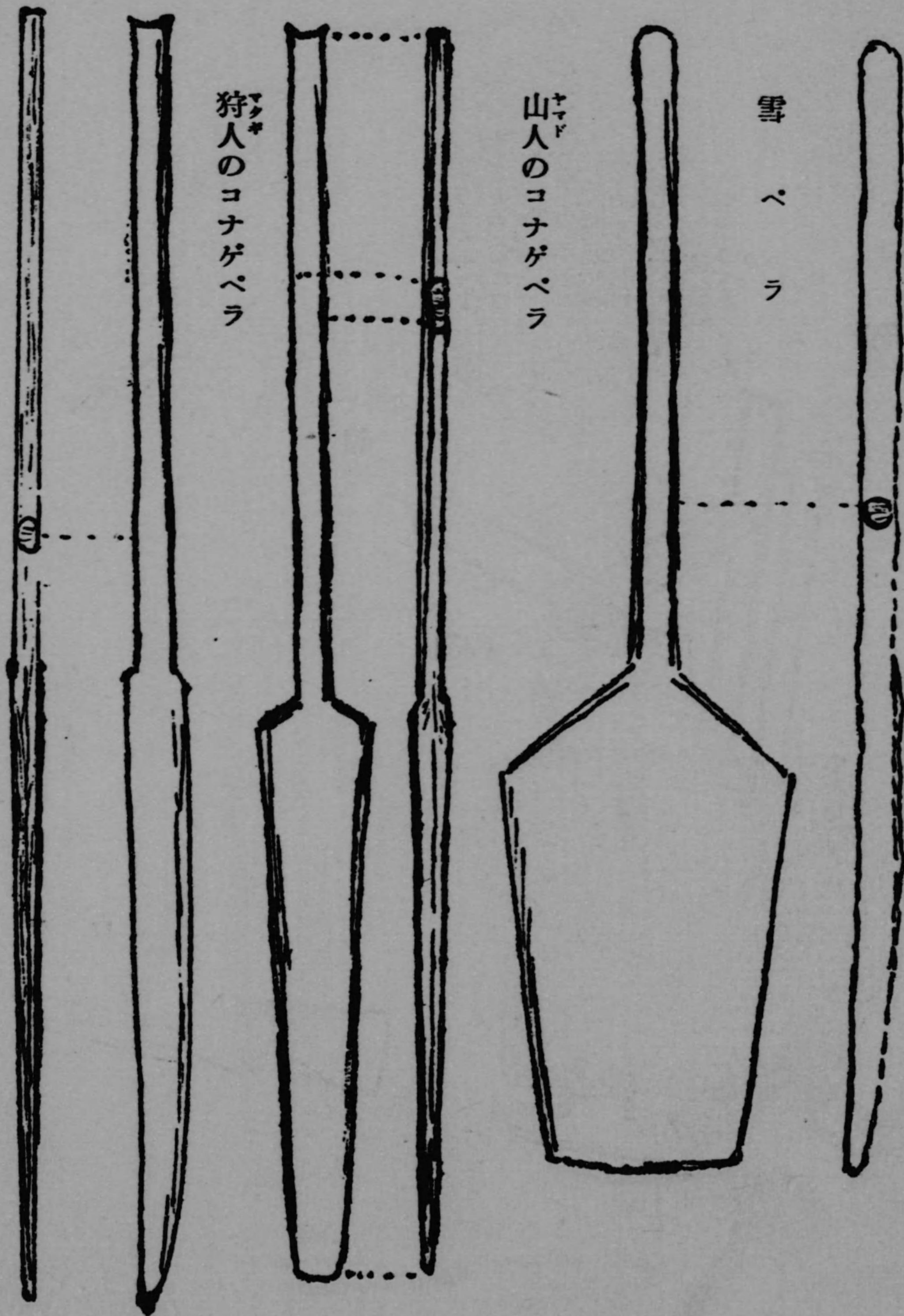
所たつ張を棚の薪に山い近里



例一のみ積木春

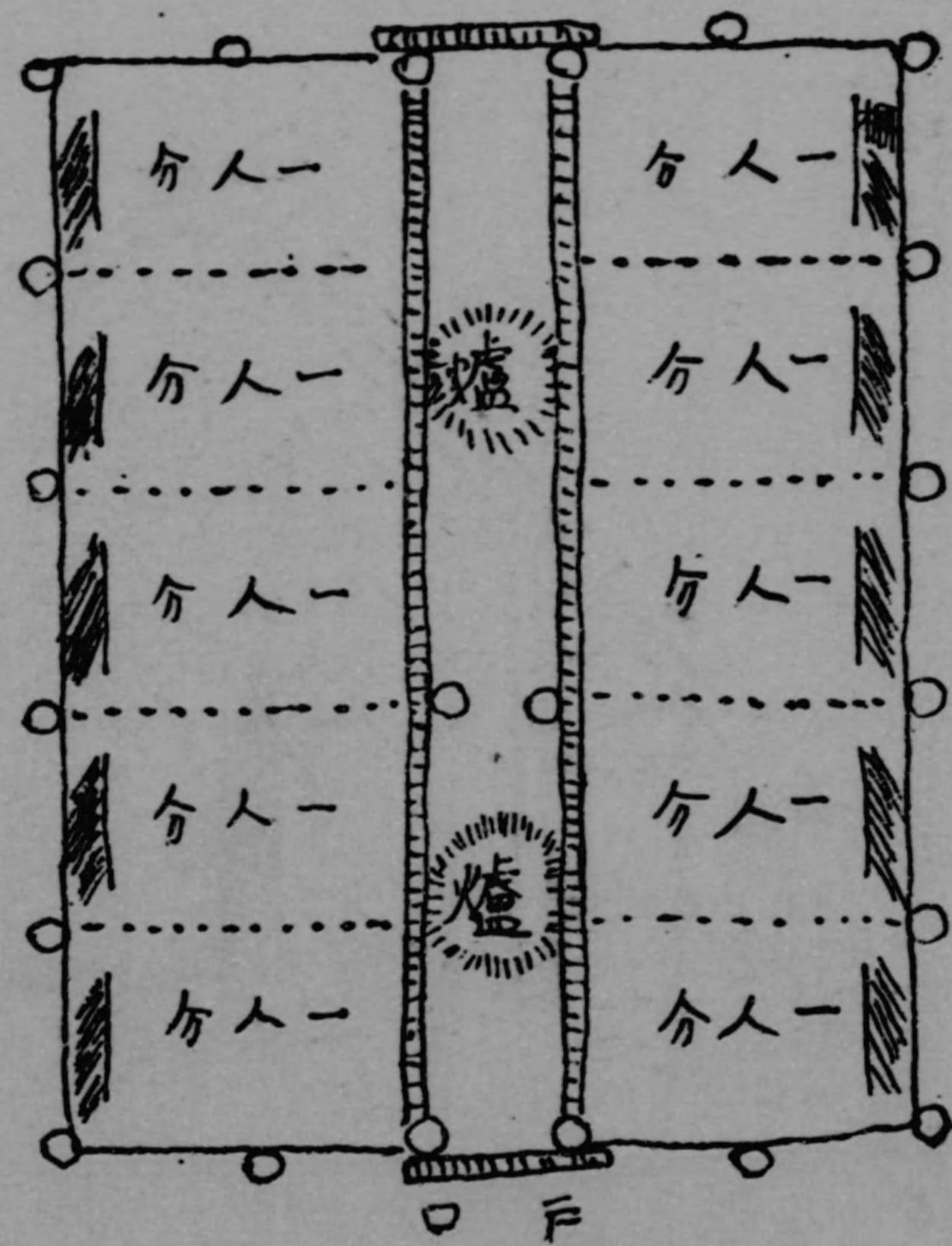




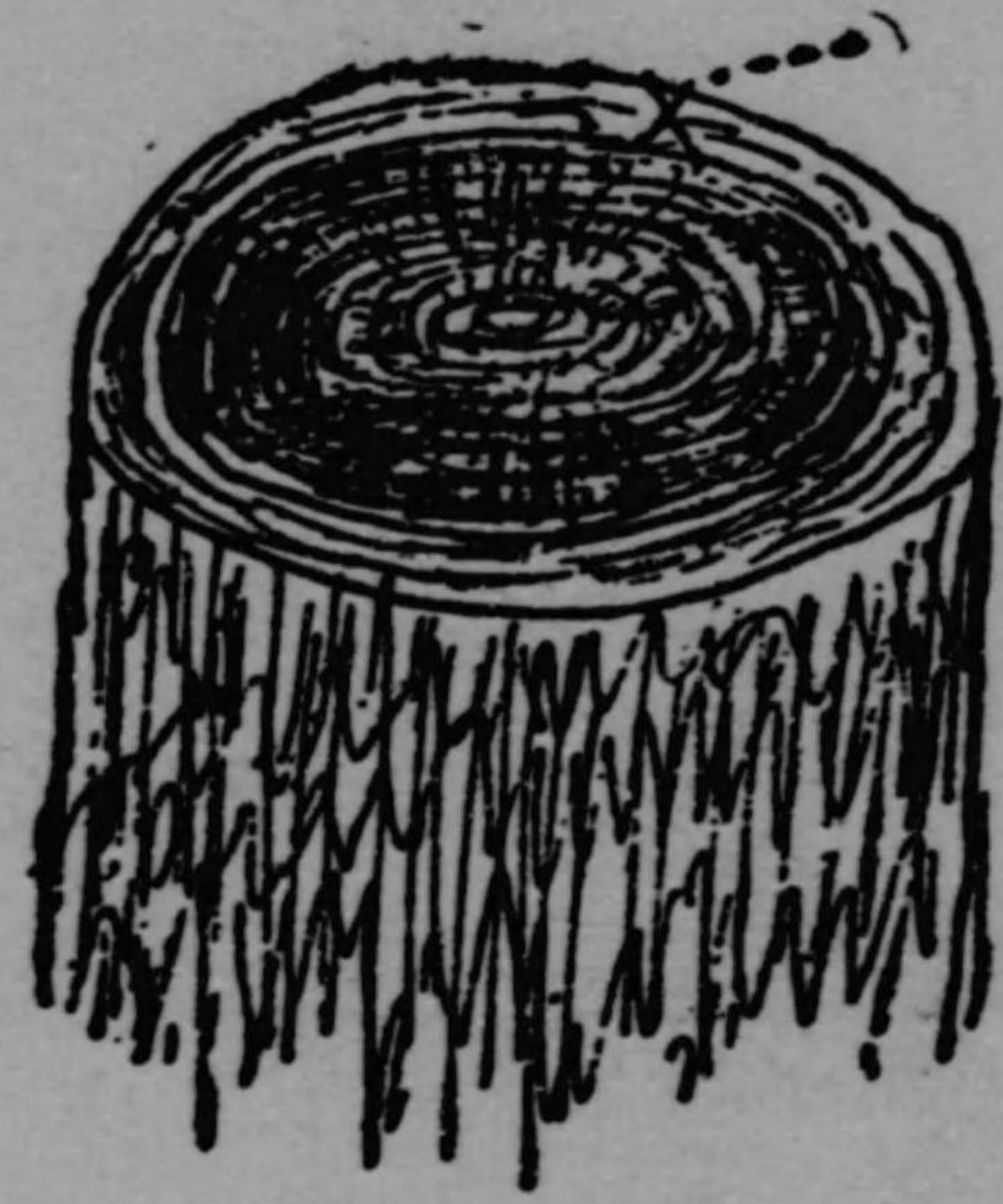


雨小舎

平面圖







木のアマの部分



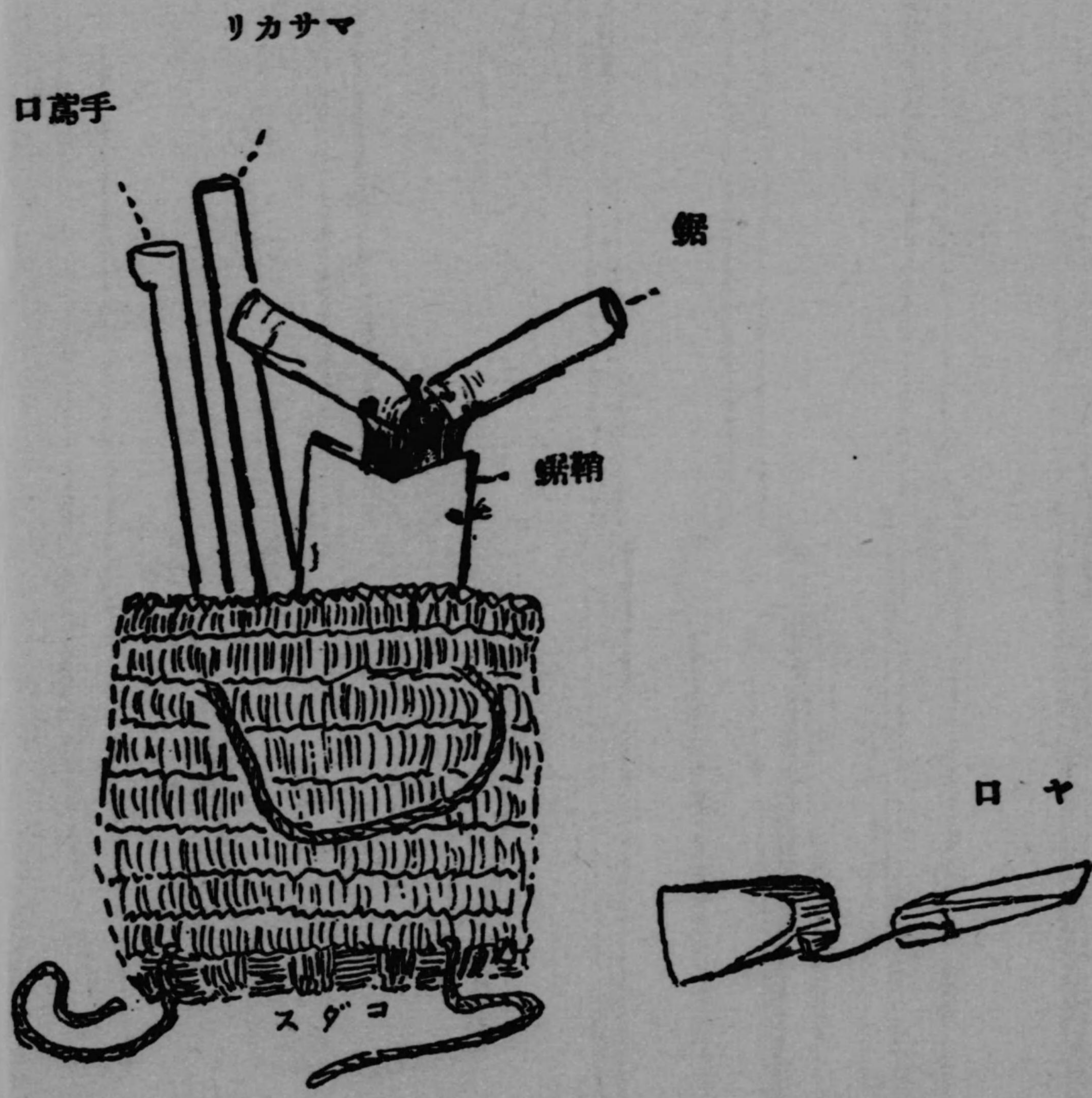
木をオイに割る



木のアテ (悪部)



サイ (中央) 割り



リカサマ

口荒手

鋸

鋸鞘

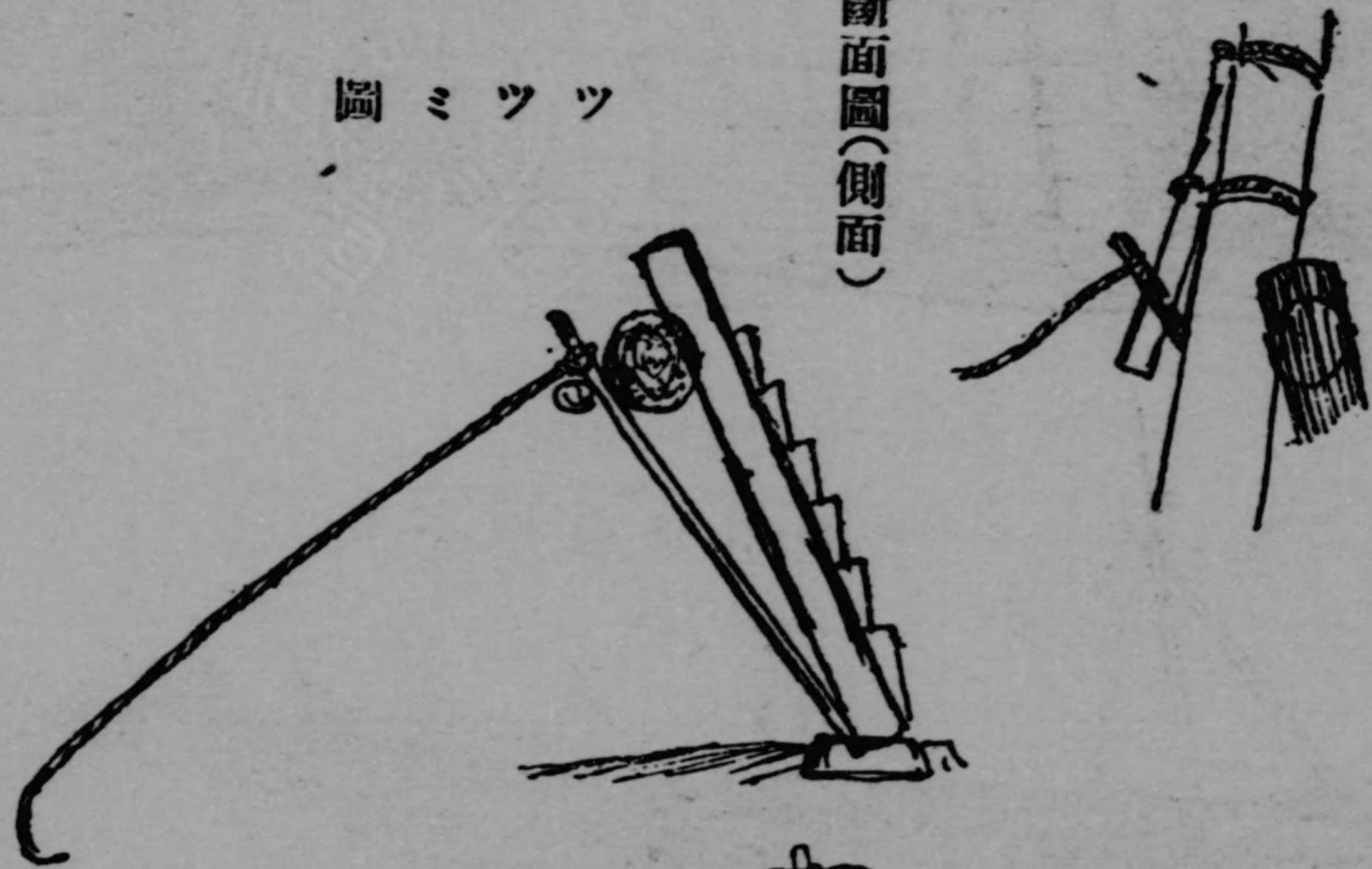
スダコ

ロヤ

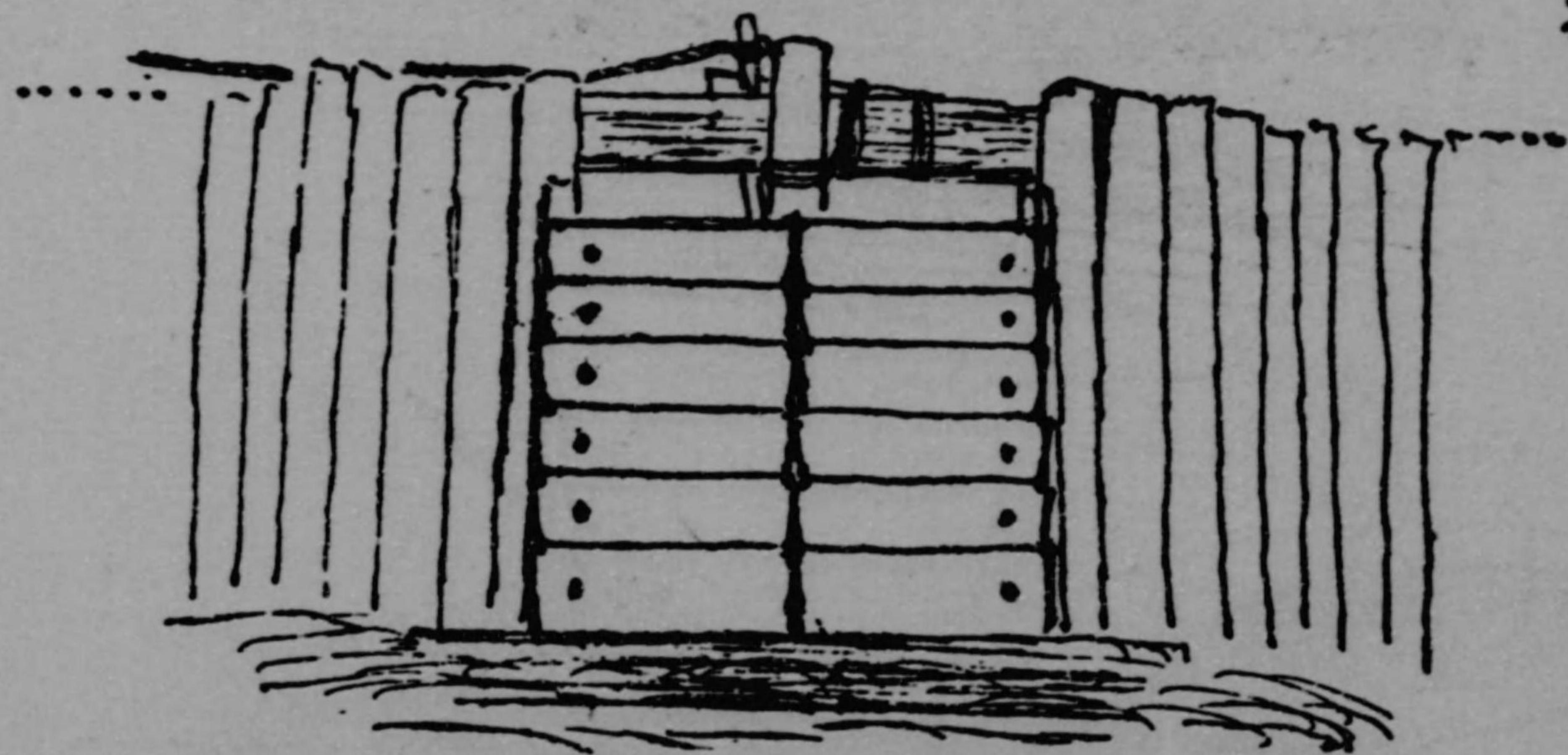
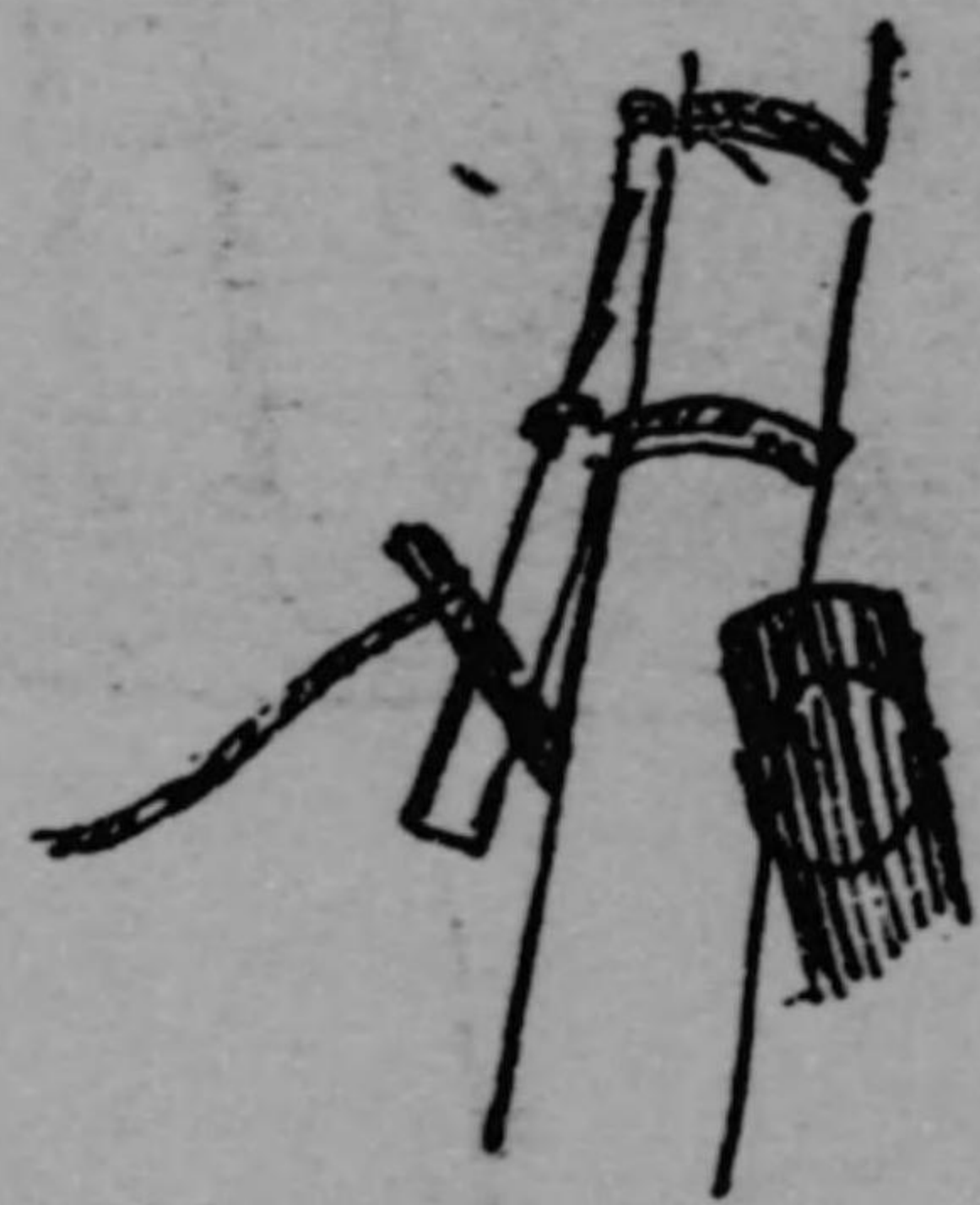


圖ミツツ

ボーズ断面圖(側面)

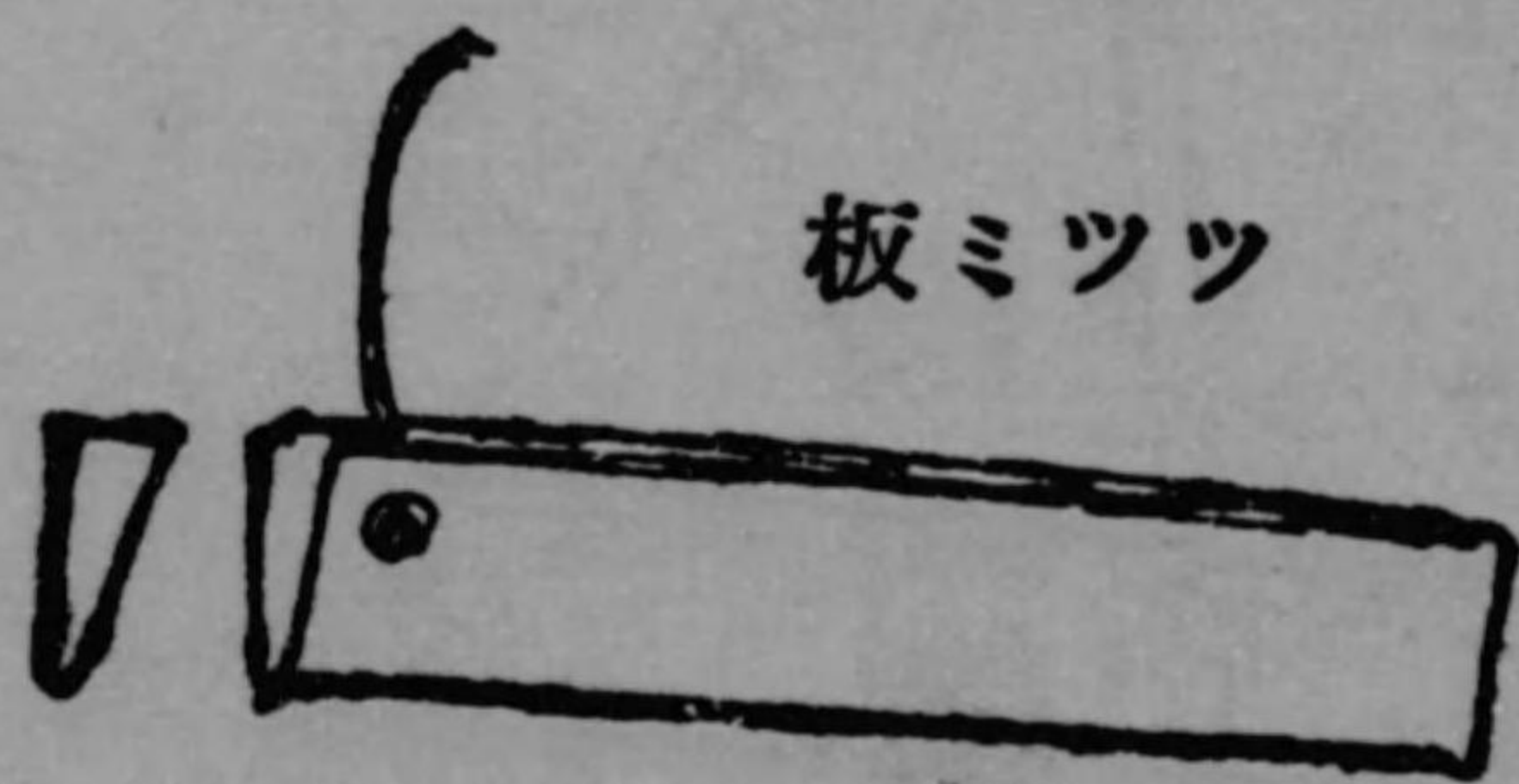


上からボーズを見る

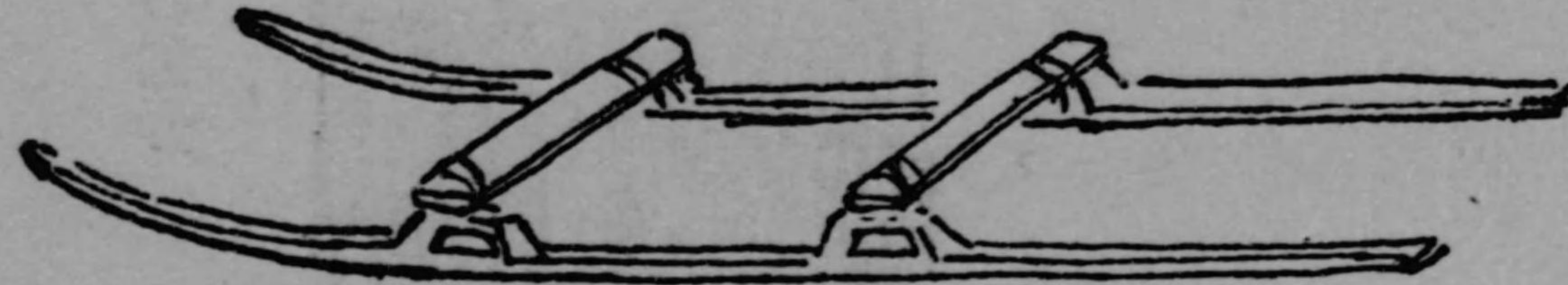


面内ミツツ

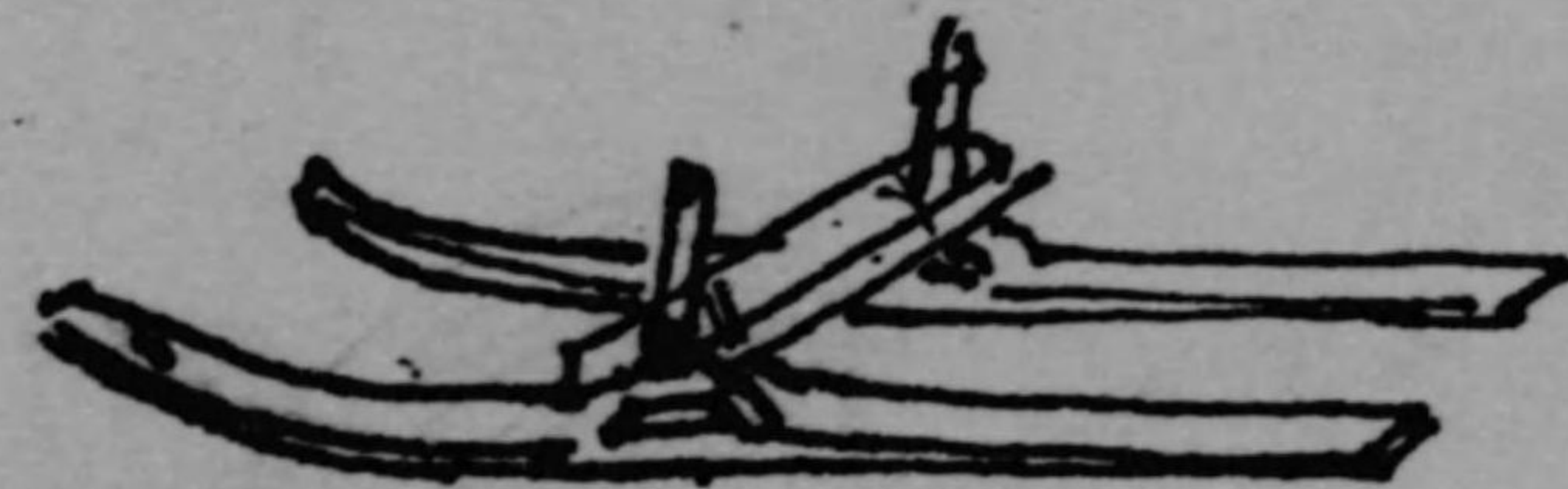
板ミツツ



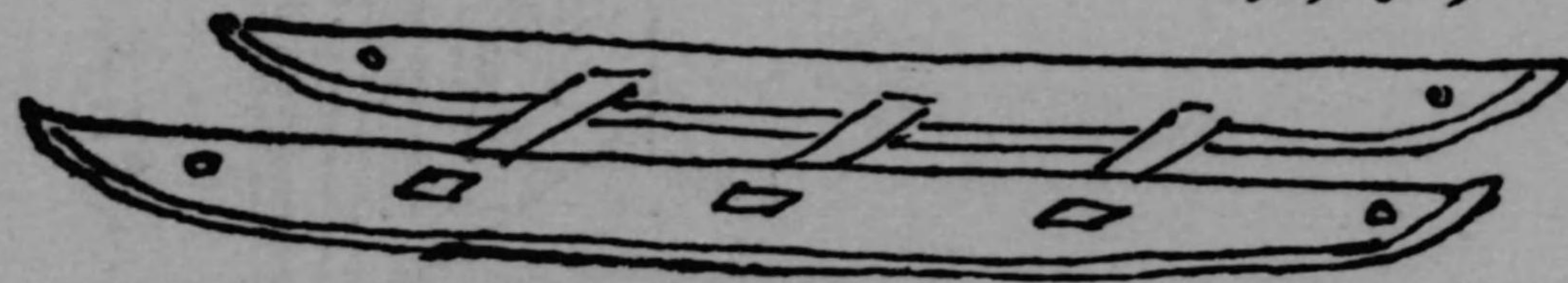
リソ山ツ四



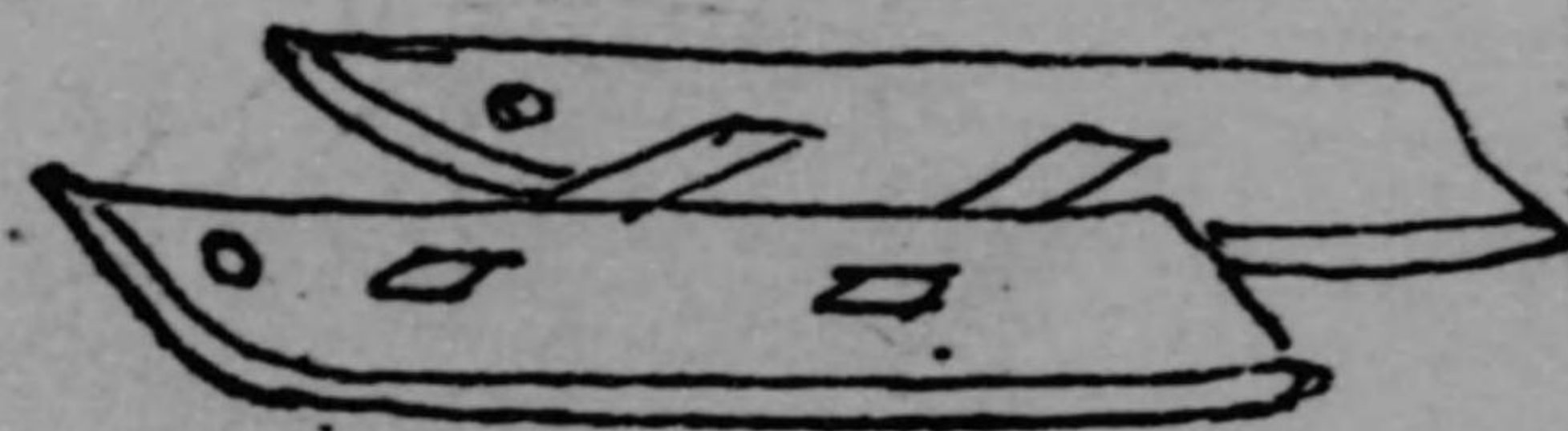
サブヤハ



リゾシウ

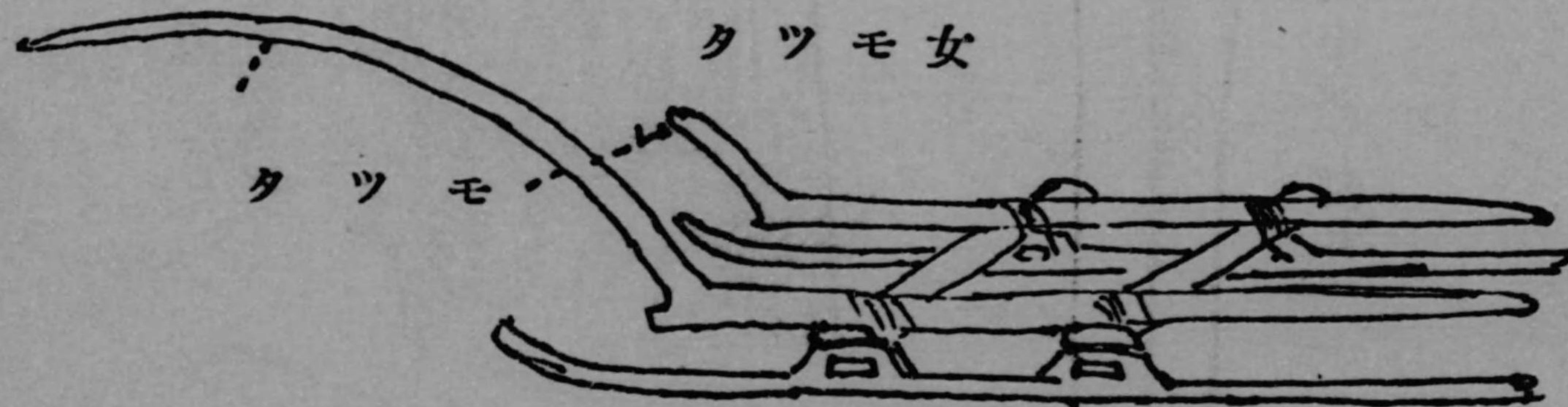


ツバ



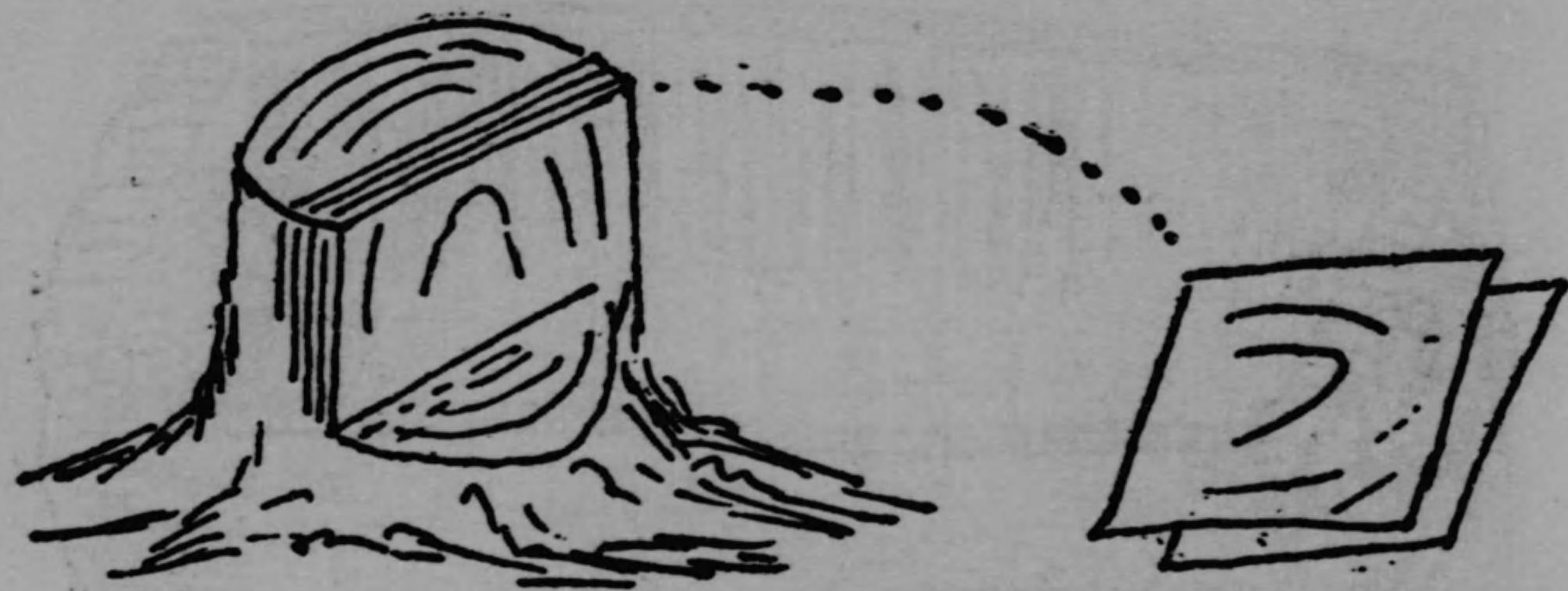
タツモ女

タツモ

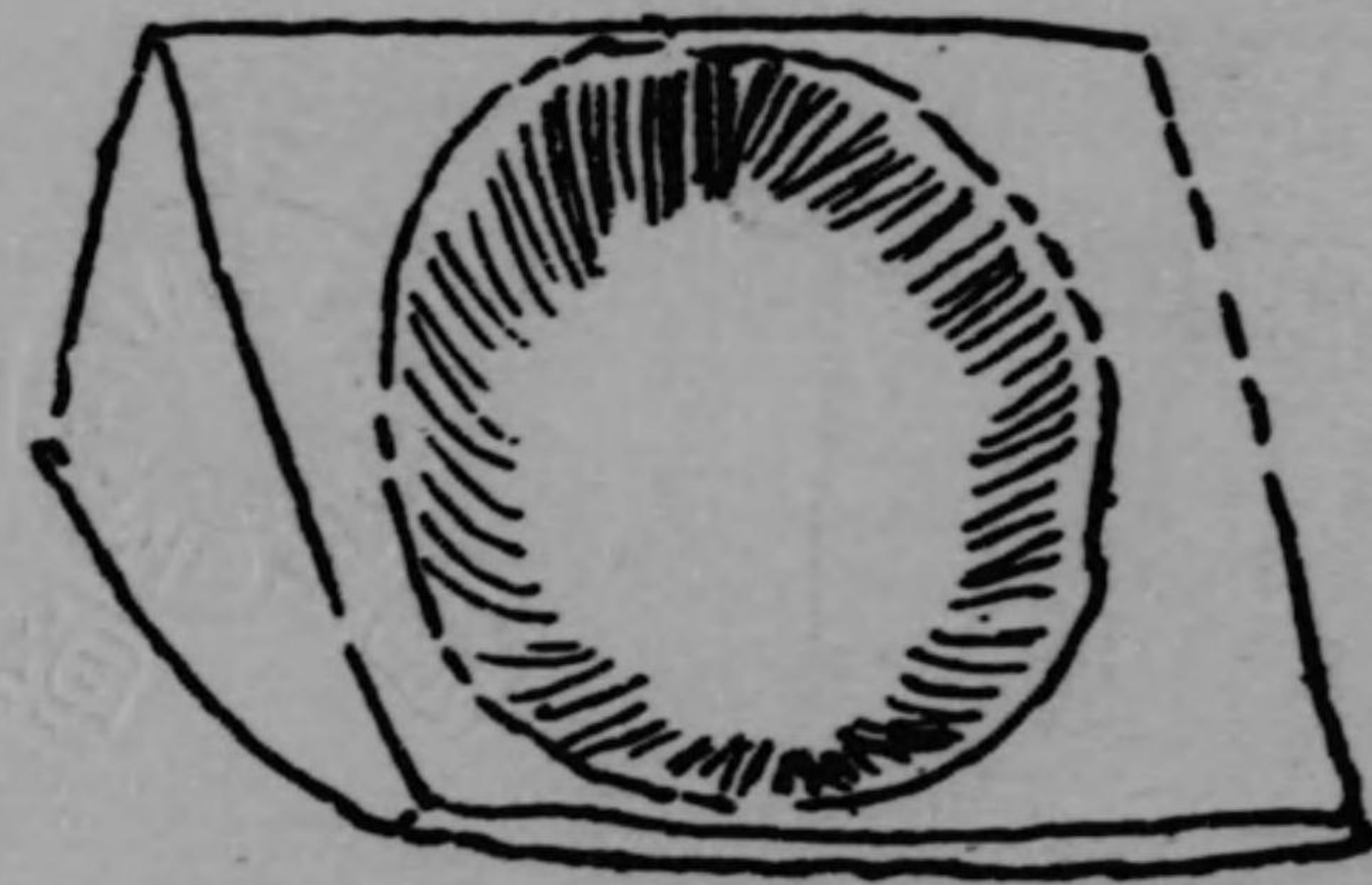




方リ取ノ板ノ膳



方リ作ノイカホ



ギキテ

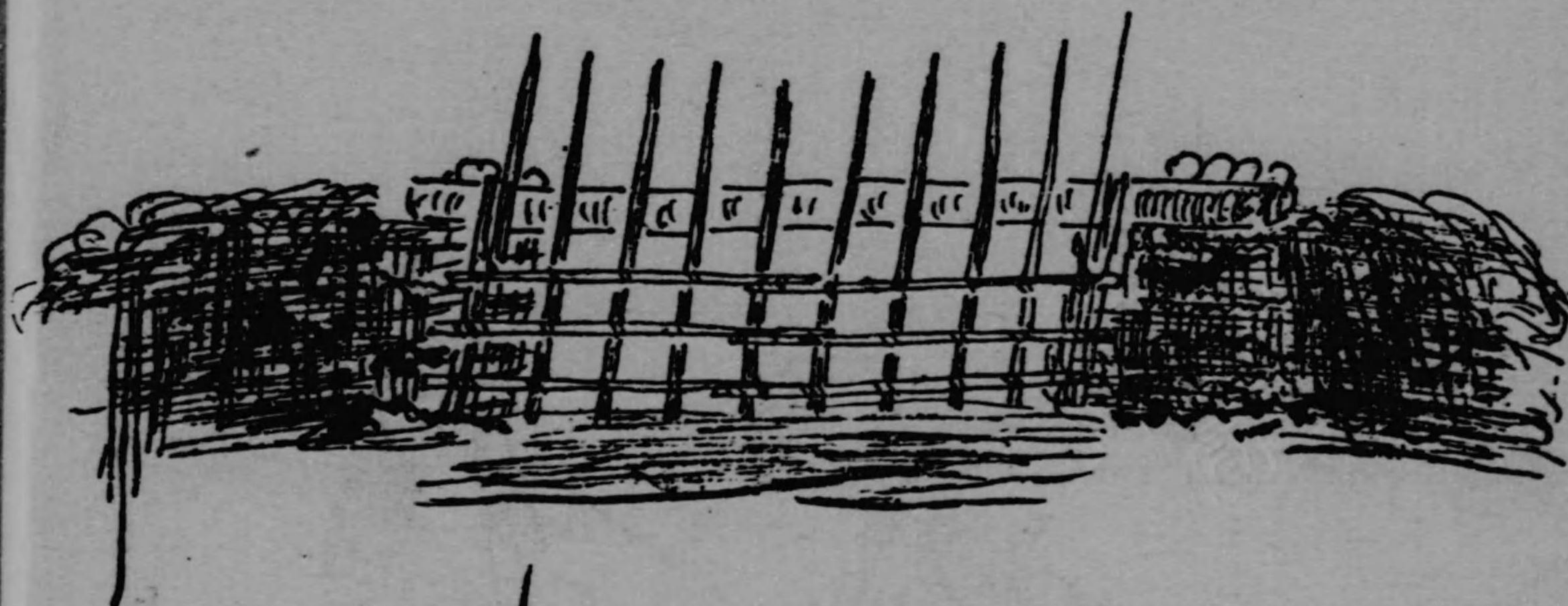
シウリビク

ギキチ

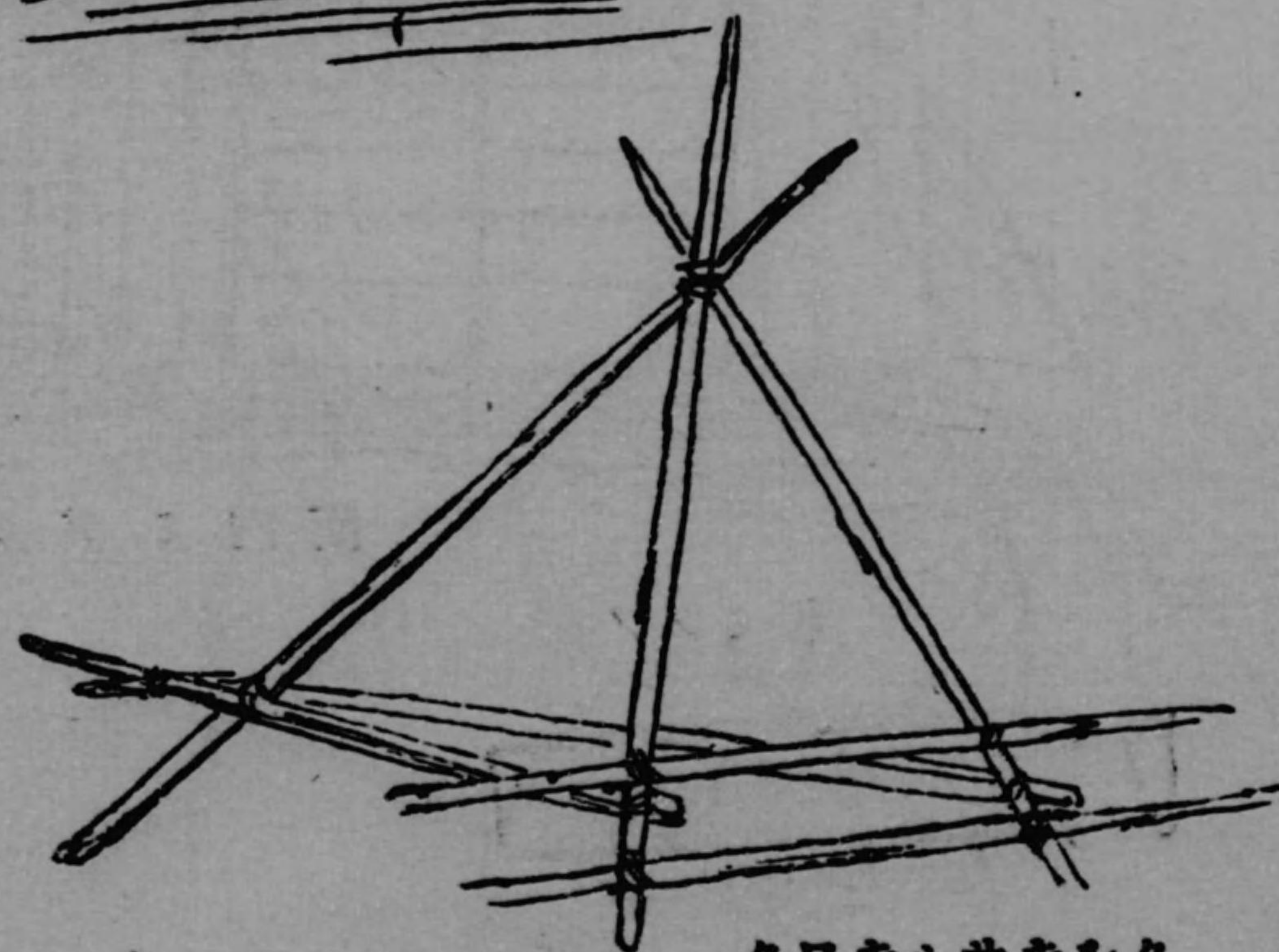
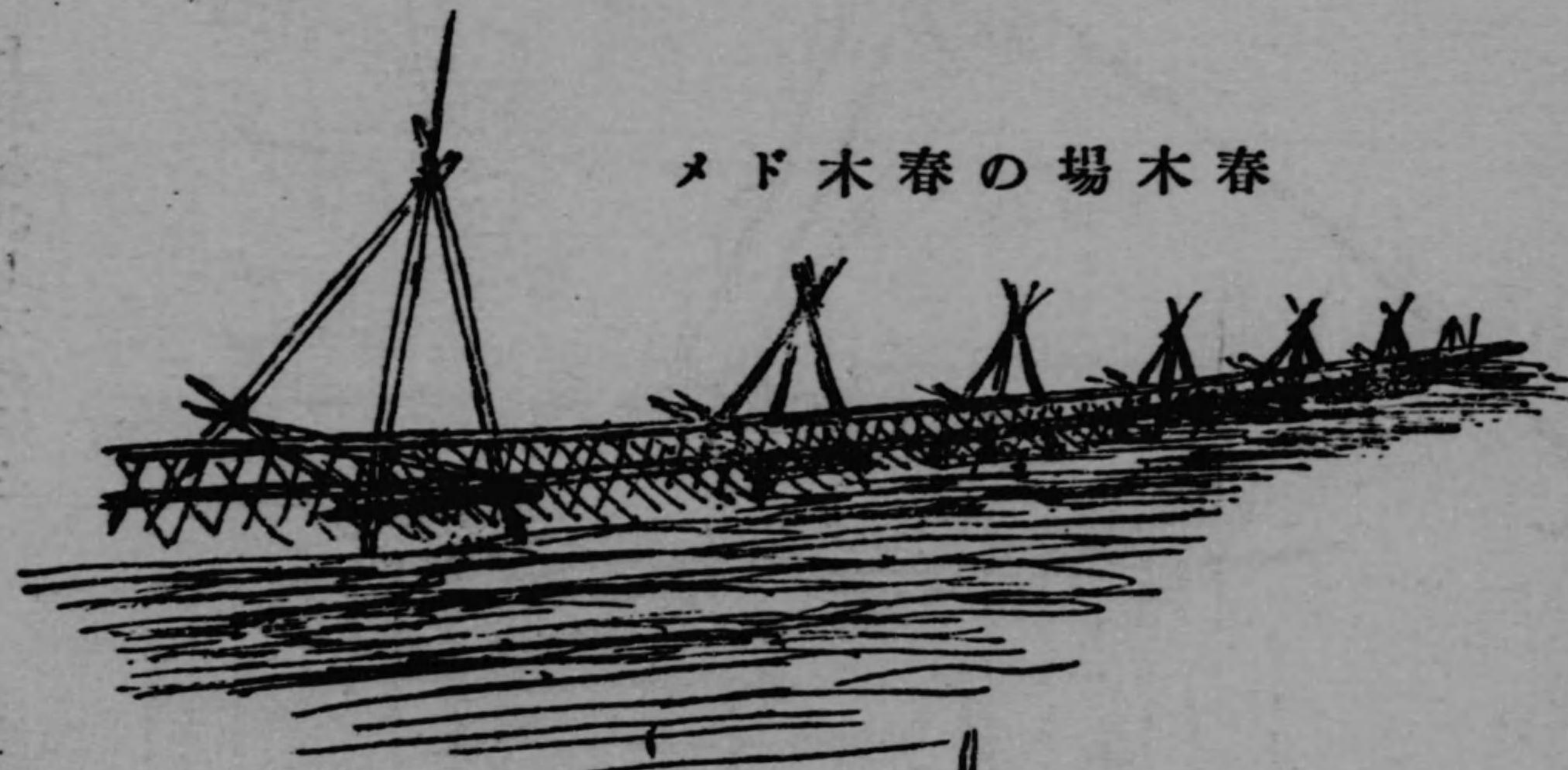


シウド

置装イラヤのダマコ



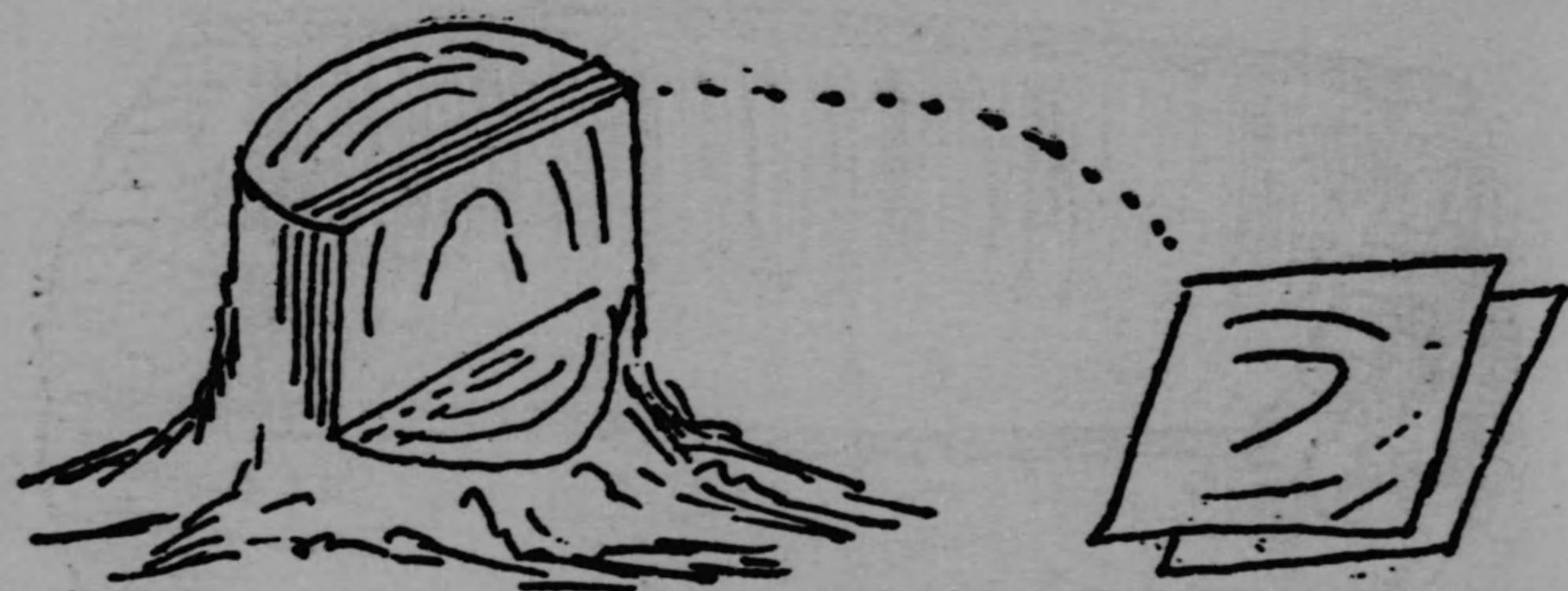
メド木春の場木春



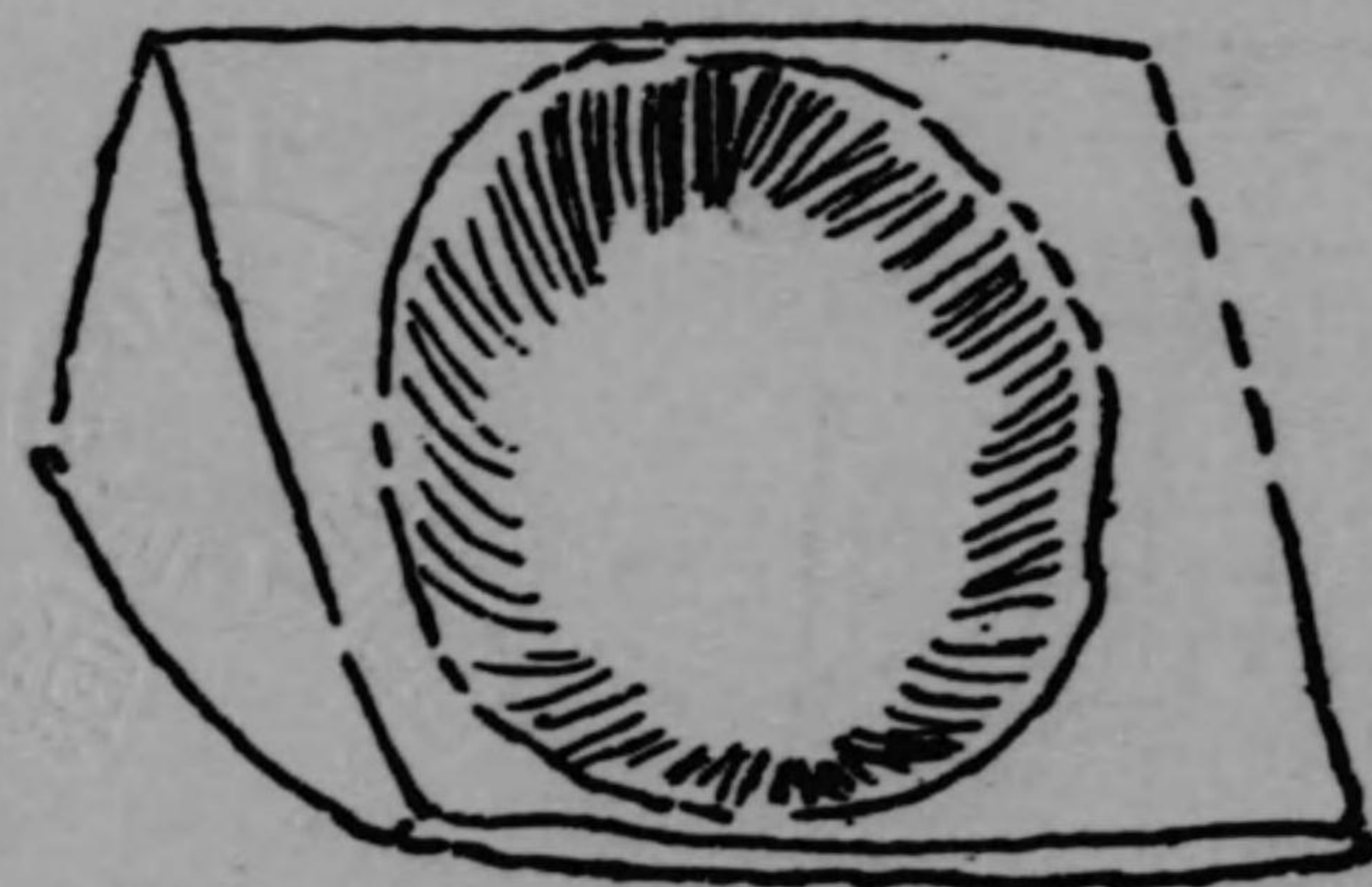
クワキシサキルタ



方リ取ノ板ノ膳



方リ作ノイカホ



ギキテ



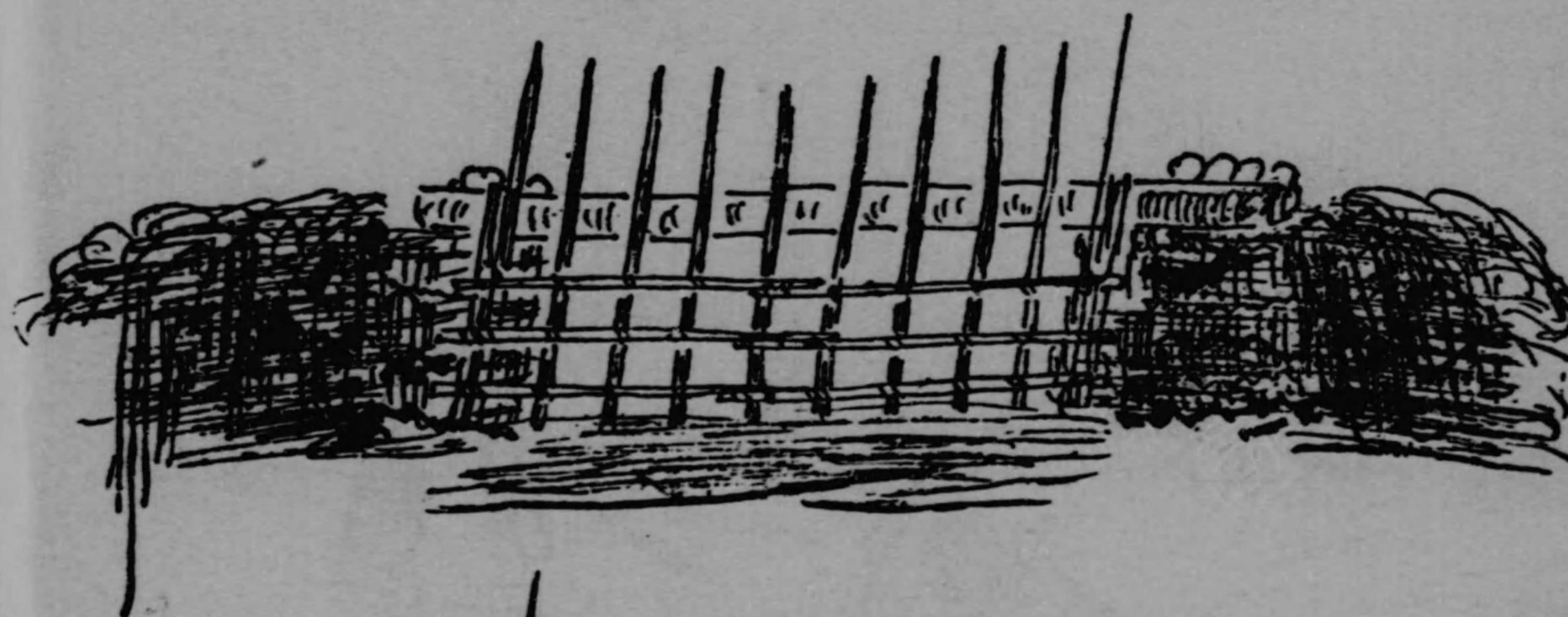
シウリビク



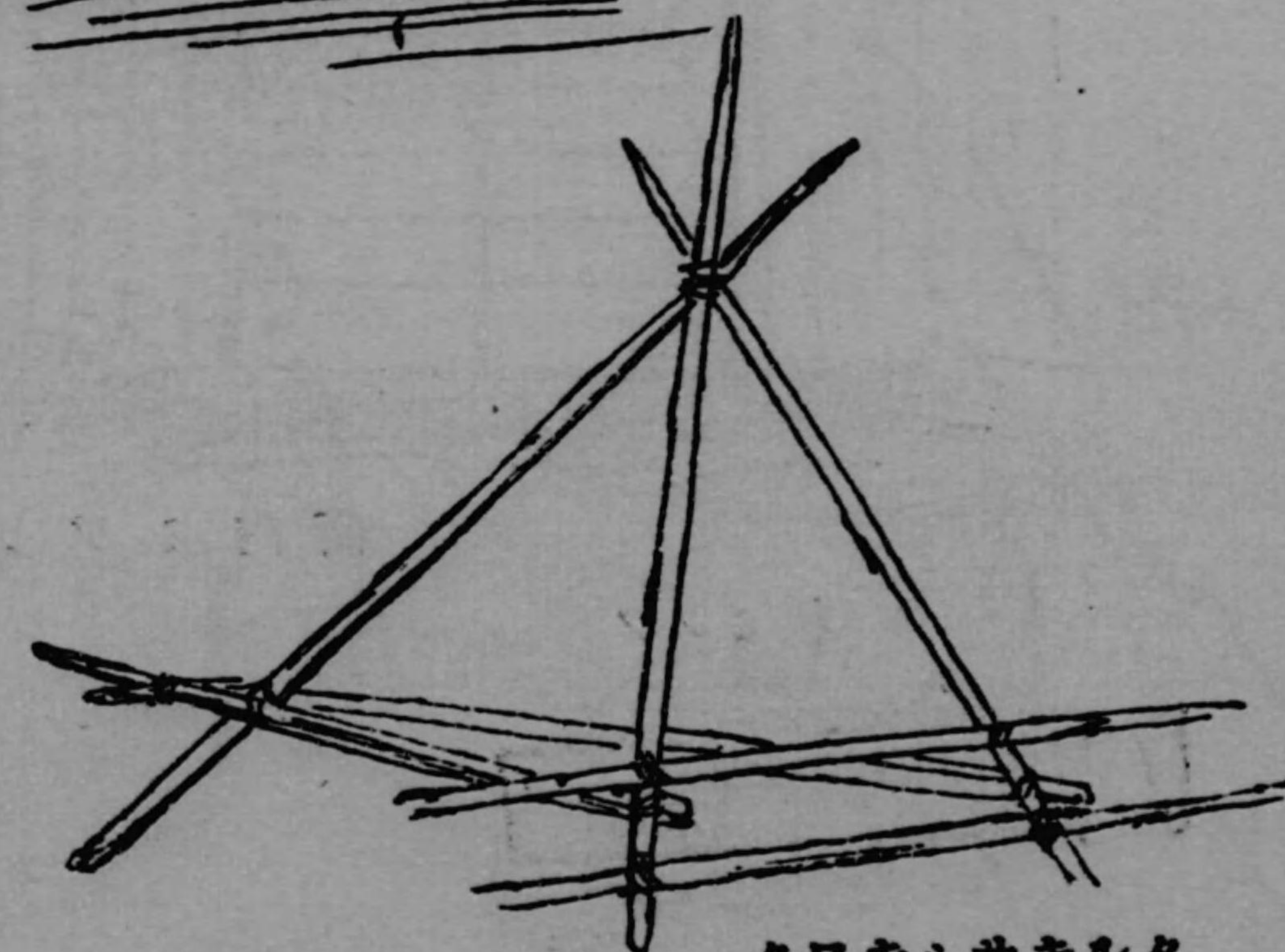
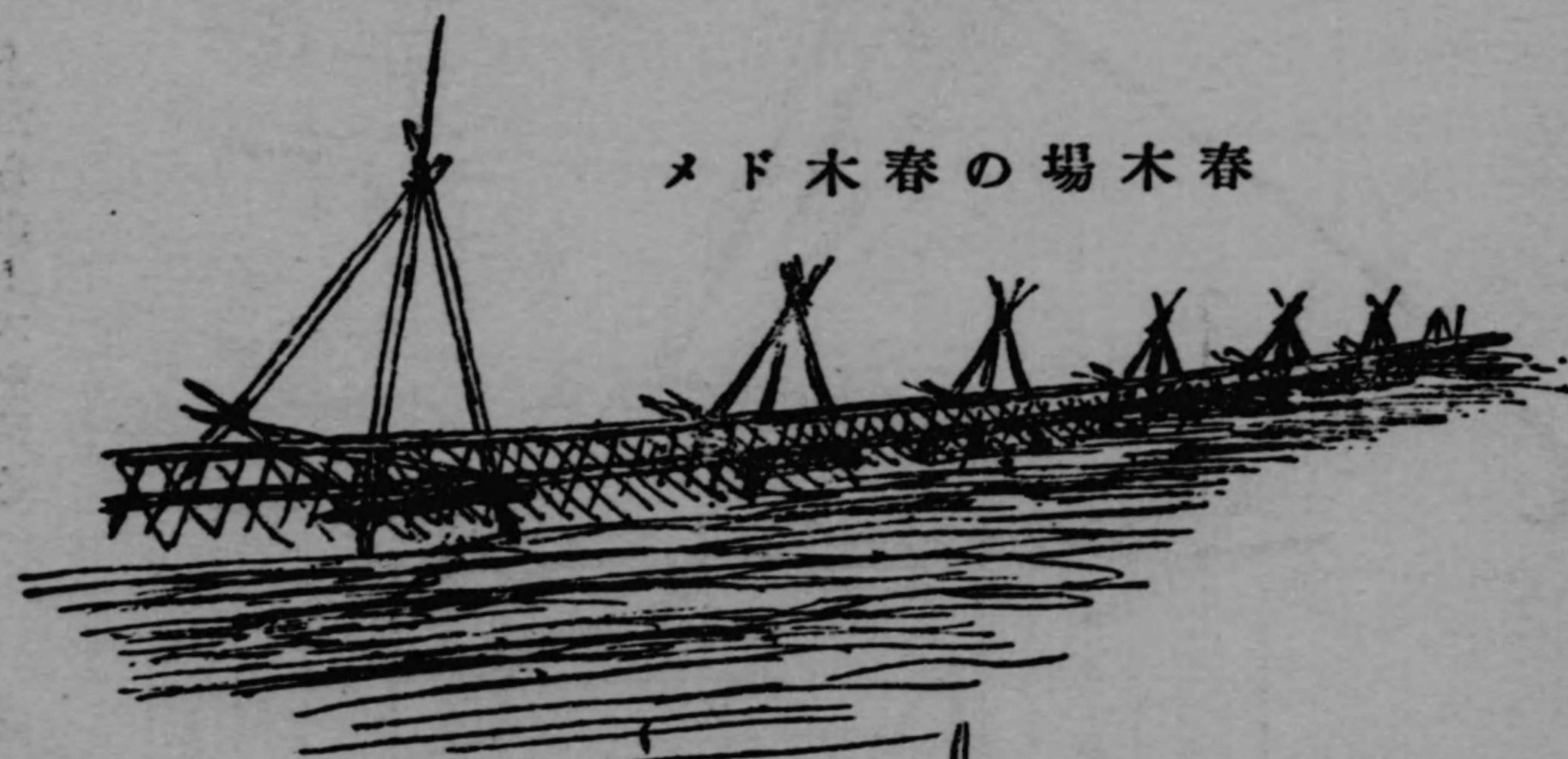
ギキチブ

シウド

置装イラヤのダマコ



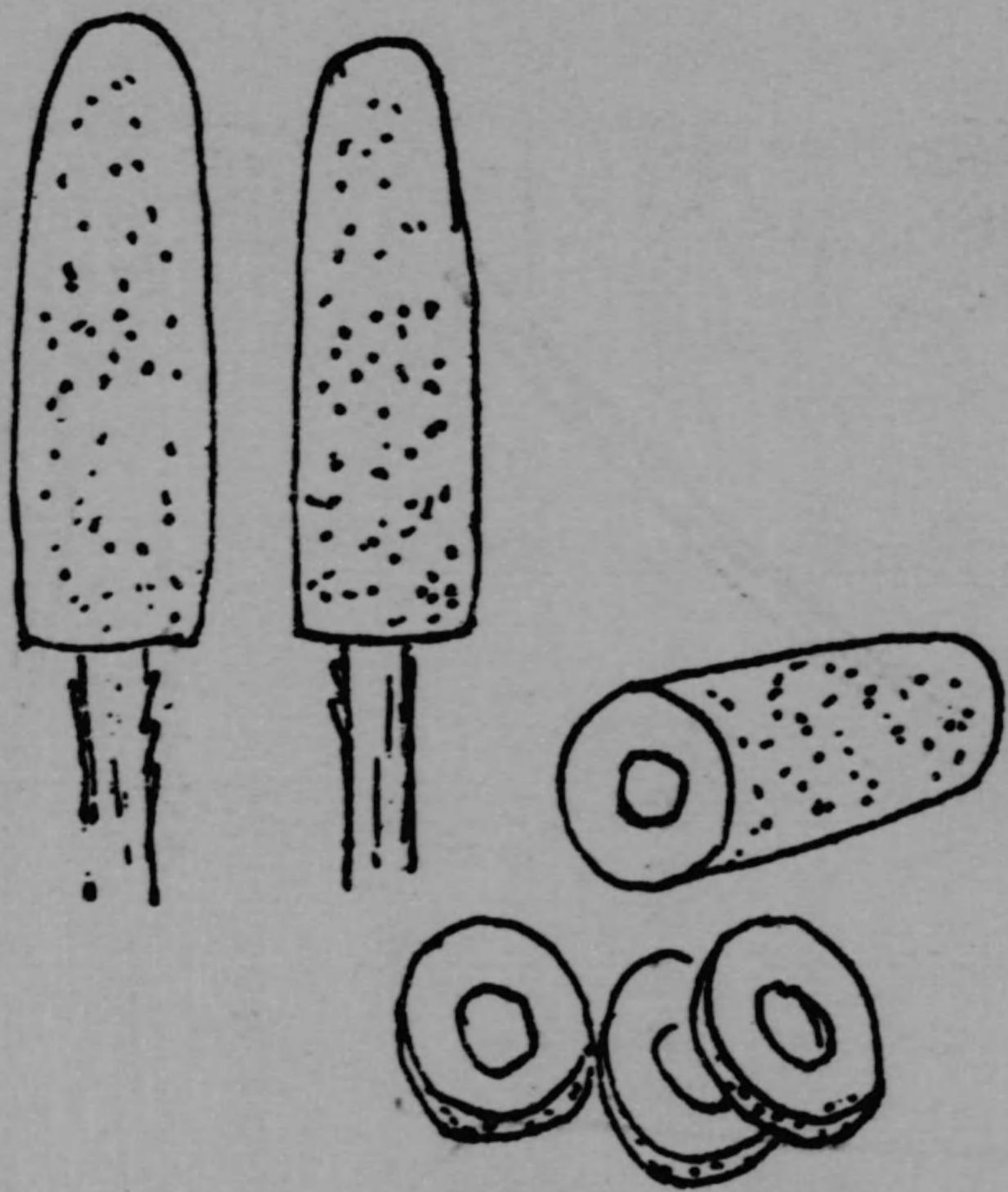
メド木春の場木春



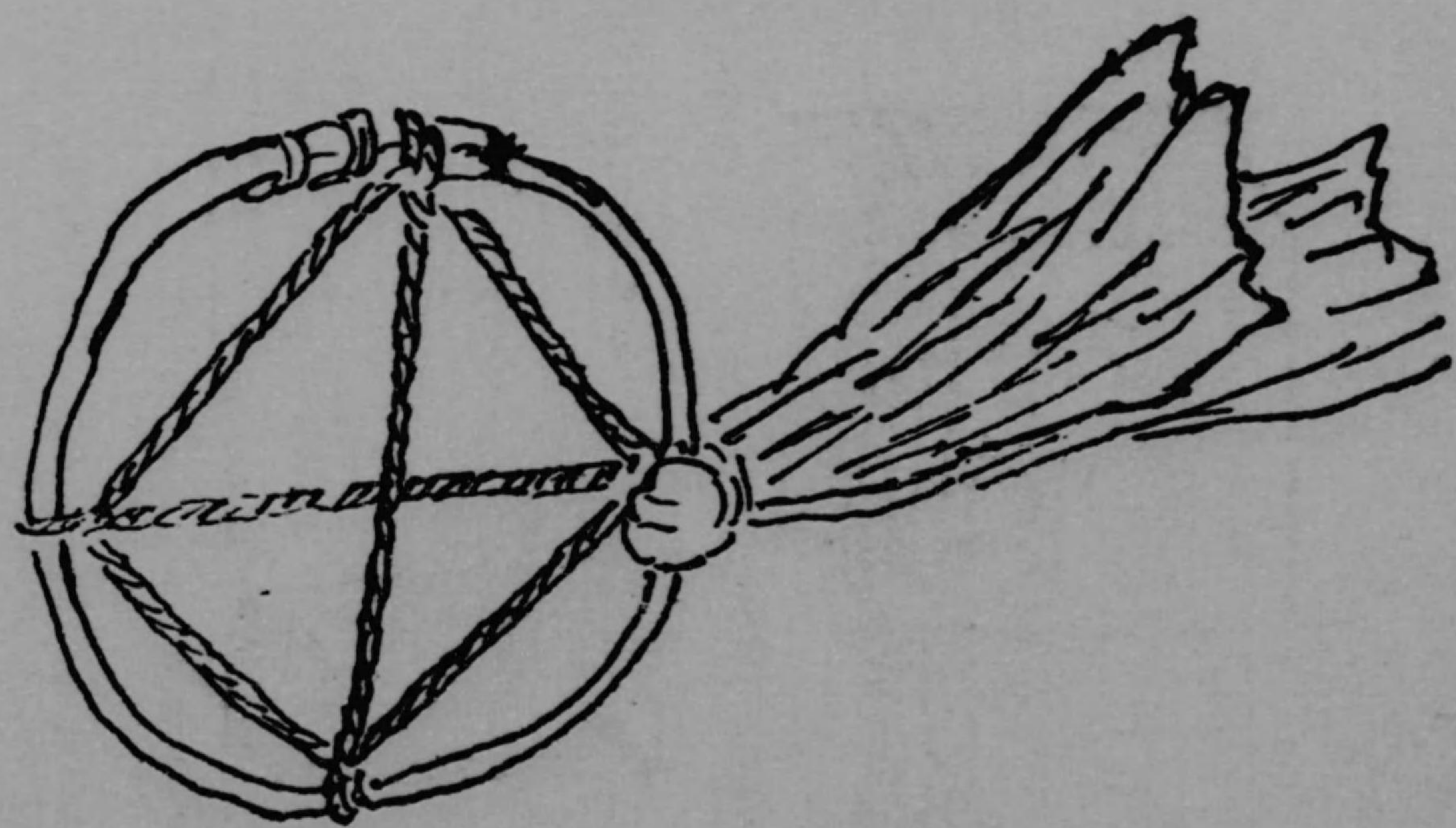
クワキシサキルタ



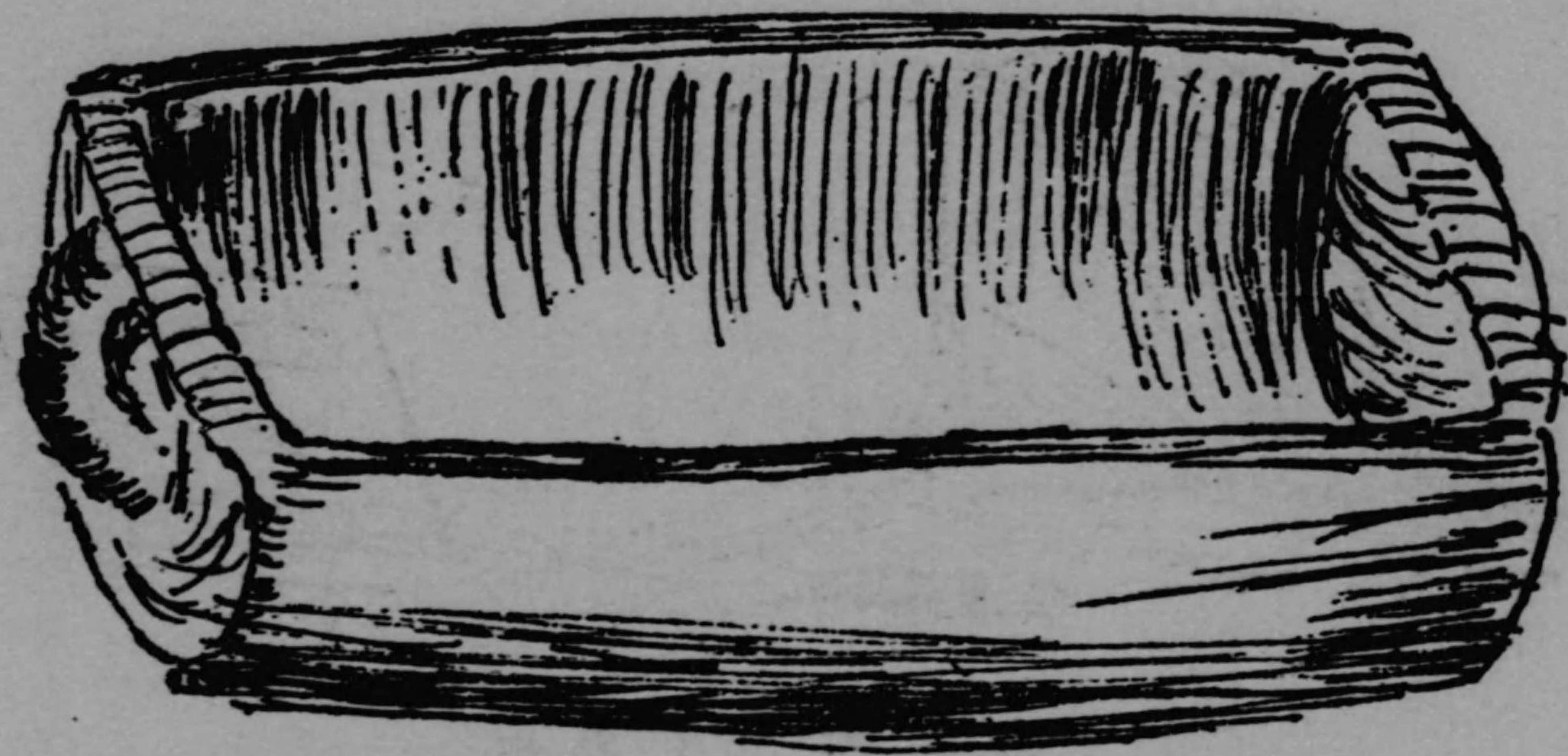
山のポタモチ



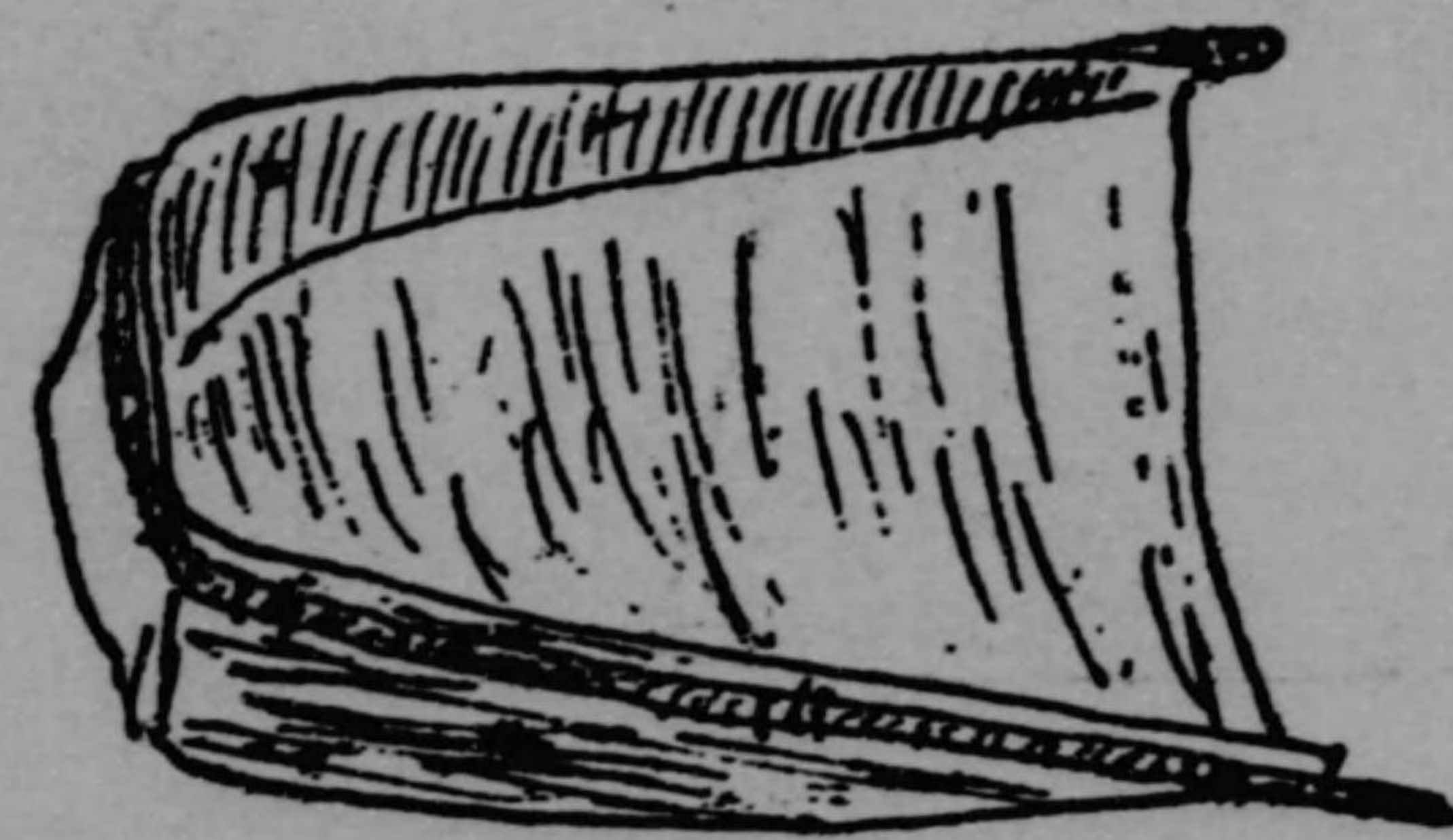
ダラワルケツゲ投=兎



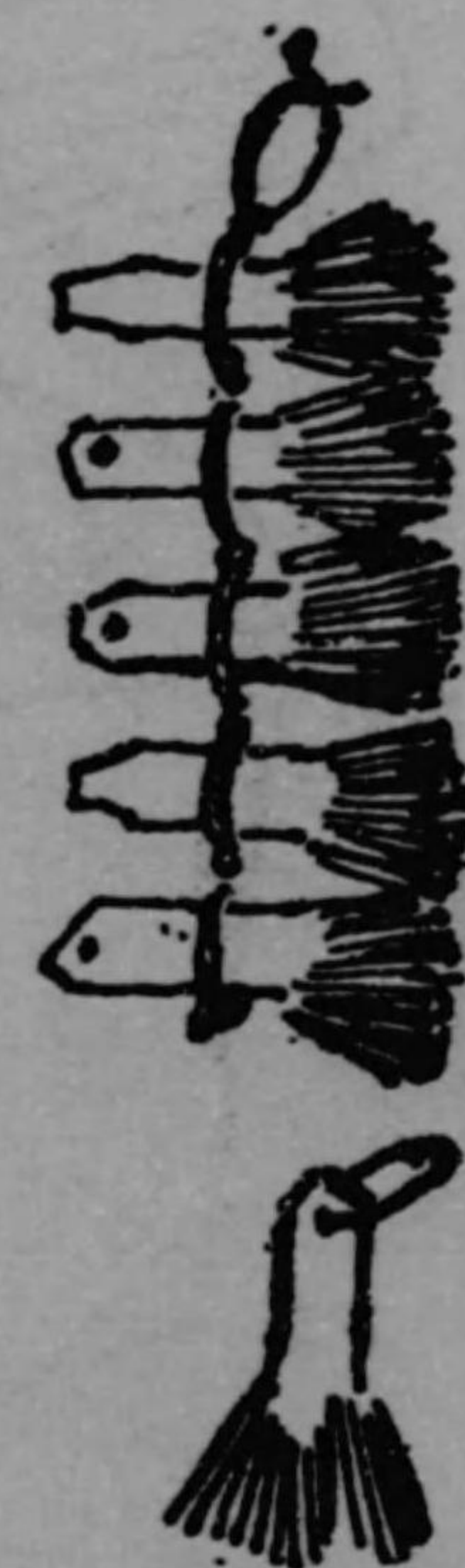
ネ フ



箕 樺



シラクチ蔓のトギタラ



山の箒(シラクチ製)





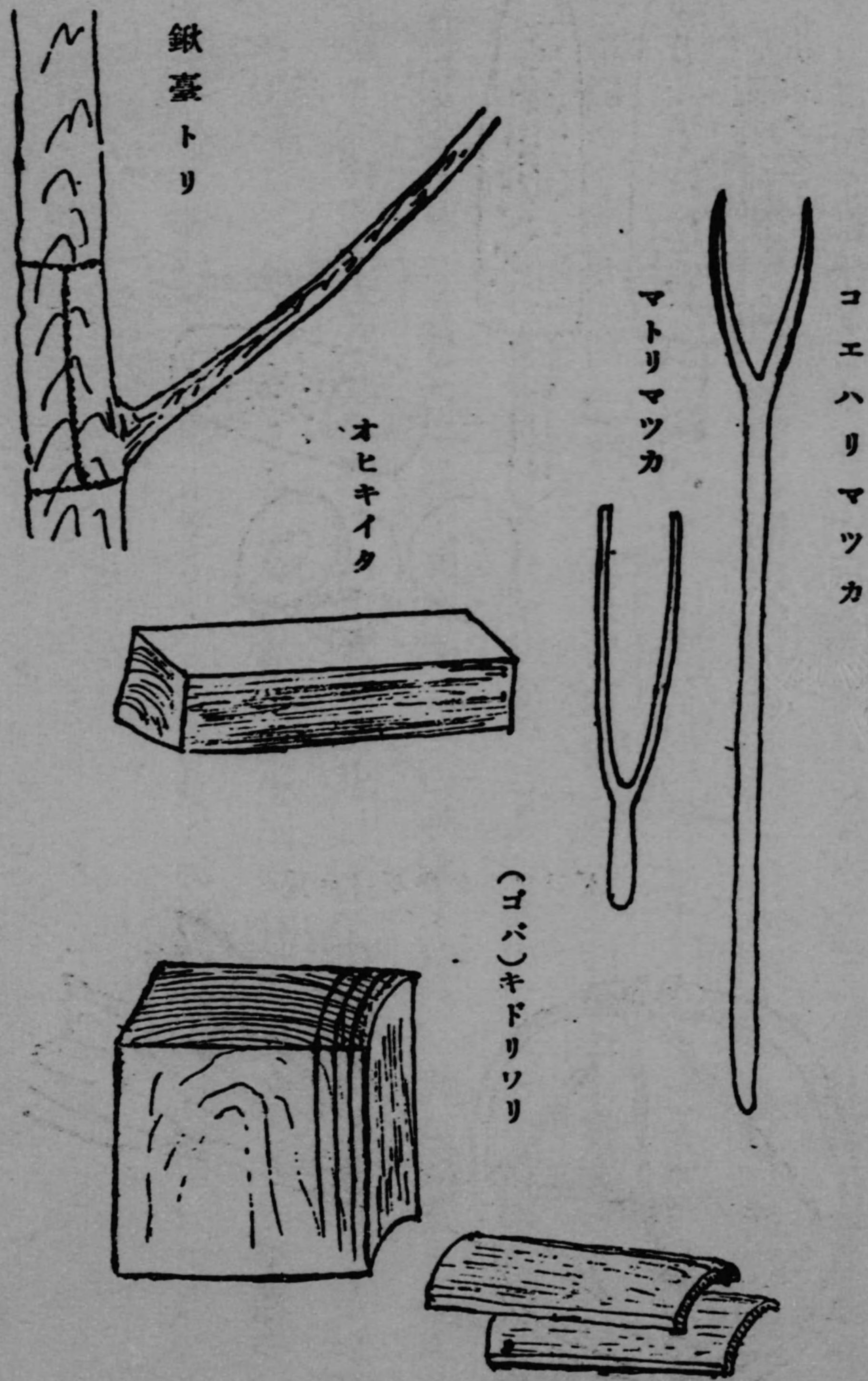
序

此書の著者が考へて居るやうに、山が我々の村生活の、約半分であつたことは事實である。たゞ其山から莫大な土が流れて、廣々とした平地の村を築き上げ、一方には又盛んに市人が在來して、往いて自ら採ることを必要としなくなつた爲に、國土は次第にその外貌を改め、後にはさういふ新たなる邑居が、日本の農村を代表する迄になつたのである。村の古代の結合組織が、今尙山地に據つて生を營む村だけに、僅かに保存せられて居る理由は爰に在つた。それを我々はもう忘れてしまはうとして居たのである。

九州の南部では、狩獵の團體の名が普通にカクラであり、同時に其カクラは又小部落をも意味して居る。それが私たちには不思議でならなかつ

序

一





たが考へて見ると寧ろ當然の事である。村は神祭りや婚姻の便宜といふ點を除けば、主として此類の山の作業の爲に、協同することが最初からの目的であつたのである。以前私などが山民の心理といふことを説いて、力を山間の一つ家の生活に、傾けようとしたのは思ひ違ひであつた。さういふ生活も今は滅びかゝつて居るけれども、是は中代の武士の没落、さては火術の普及などに伴なうて、新たに始まつた様式であつて、多くの山村は又別箇の起原を遠い過去に持つて居るからである。

田中喜多美君の舊著「山の生活」は、曾て私の愛讀書であつたのみならず、其頃この書齋を訪れた程の人は、何れも勧められて一度はあの書物を見て居る。どうして其様に我々が是に心を惹かれたかは、細かに分析して見ないと今でも其原因を知り難いが、一つには著者が實驗といふ以上に、

自身此事實の中に生れ且つ活きた人であること、それが民間傳承學の黎明に目覺めて始めて、自ら識らうとした内容の記録だといふことが、この萬卷の古書新書の推積裡に在つて、尙且つ一道の微光を放つて、人の眼を引寄せた力であらうと思ふ。それから今一つ著者が豫言者でも無く、又達識の士を以て目すべき人でも無いのに、その諄々として説く所が、偶然にも國內の既に知られて居るものと合致し、更に隔絶した府縣の隅々に於て、新たに觀測せられ、又採録せられようとして居るものと、一々に相呼應し映發するらしいことが、少なからず我々を驚歎せしめる。是は日本人が一つの種族、一つの文化團の屬員である以上は、何等の奇妙で無いと言へば言はれるが、でなくとも現在この事業に携はるほどの者は、大概は是をさういふ風には思つて居ない。それ程にも智識は個々の邊陲に眠つて、辛う



じて孤立の篤學者のみを自得せしめて居たのである。天下萬人の生活觀測者が各々その遼東の豕を抱いて還るに及んで、始めて我々の學問は完成するものであるが、それは末遙かなる未來である。今は單に前代の尋常平凡事が、既に我々の間に珍重すべきものとなつて居たことを、心付いたゞけを以て満足すべきである。

地方の熱心な多くの採集家は、最初は歓迎せられ又大いに利用せられ、後いつと無く見失はれて居る。是は甚だ不本意なことであるが、さういつ迄も一區域の調査を、同じ方法と態度とを以て、續けて行くことは出來ぬ故に、後には外部との交渉が絶えてしまふのである。田中喜多美君は壯齡にして氣魄に富み、しかも此仕事は一旦是で片づいた。此次にどう出て行くかは我々全體の問題でなければならぬ。今まで見て來た現象の意味を問

ふ爲に、弘く他の地方との異同を比較して、文化展開の經路を明かにするかはた文我脚下を一段と深く掘り下げて、旅人にはわからぬ趣味と批判、その他あらゆる心意上の事實にまで入つて行くか、何れを擇ぶにしても其途は既に具はり、其資格も亦たしかに有る。要は唯永く一處に掩滞しなればよいのである。學問の漸く熾んならんとする時世に生れ合はせ、事業は認められ辛苦は酬いられ、しかも郷土の爲に傳ふべきものを傳へて、大いなる激勵を嗣いで起つ者に與へ得たといふことは、誠に爽快なる一成功に相異ないが、しかも丈夫の生涯の企畫としては、是はまだ僅かなる一つの段階に過ぎない。私は寧ろこの著者の餘力の尙豊かである點を羨みたいのである。

昭和八年初冬

柳田國男識



## 自序

東北の農民、殊に山に近い處の人達は、山に密接な交渉を持つてゐる。況んや男子に於ては、其半ばの生活は山で爲されると言つてもよい。

私は斯ふ考へてゐる。私達山村農民の生活は、一半は山に交渉を有つ生活であり、一半は里の生活であると。即ち山村農民の生活は二大分野に分けられて考へられる。それは、寒季の生活——暖季の生活、男の分野——女の分野、山の生活——里の生活である。私は今でも自分の郷土を土臺として、この二大分野の生活を是認し、祭祀信仰の上に於ても其影響の多からう事を主張する一人である。

私は郷土人であり、山の生活の體驗者であり、百姓として土に親んで來たのである。従つて郷土を愛し、凡ゆる過去の歴史を尊敬する。良心が薄れ、人情が減びて行く現代に於ても、猶ほ私は多くの希望を以て郷土に接するのである。

この小著を以てしては、山の生活の全貌を窺ふには餘りに不足であらう。私自ら満足してゐない、



知らないだらけである。他から注意されて「それなら斯く……」と言ふ私達である。「唯、氣の付いた事は、山に染つて居る者は、他から注意を受けなければ、どんな點でも素通りすると言ふ事である。願くば根掘り葉掘り問詰めて下さると、色々のものを郷土の住民が吐き出すものである事を知つて貰へばよい」私は前に斯ふ言つて置いた。

山村の住民の思考に、山の姿が如何に浸潤し、如何に傳誦されて來てゐるか、それが聽て山村民俗の上に表現されても來てゐようし、そしてまた求い間には民族性の上に直接間接に影響してゐる筈なので、其研究考査には斯ふした記録も必要なのである。唯此の小著は前述の通り、東北の山村の雪の上の生活を一部筆記してゐる事である。

此小著は前の拙著「山の生活」を臺本として書いたが、全部を書直した。記憶の間違ひや項目の並べ方を訂正して見たが、文章は以前の通り口語を使つて見た。方言を解りよくする考へから、片假名を多く使つたので、一寸讀みづらい事と思ふ。

山の習俗も、その仕來りや、傳へて來た儘を忠實に示さうと努めた。讀んで解らぬ點があれば、岩手郡雫石村著者宛に質問下されば何時でも御答へする考へである。

今度はスケッチを少し加へて見た。大體の輪廓だけと思はれるとよい。

この小著に依つて私の心境は、暖季の生活——里の生活——女の分野、を何時かは起稿して山村民俗を報告するの義務を背負はされた感じである。嘗つて「民俗學」に發表した女は衣服調製の大役以外に、農業上に於ける地位は、是又眞に重大な役割であつた。衣服・食事・育児・仕作の上の習俗は、雪の國でもことごとく重大である。而もこの小著は、男性の活躍する雪上の山生活を中心に、東北の山を少しく報告する迄である。



目次

序文……………柳田國男(一)

自序……………(一)

第一總說……………(一)

〔一〕……………(一)

一、山村の結成 二、生活の二分野 三、私の村

〔二〕……………(六)

四、藩と山林 五、雫石地方の椀飯物

〔三〕……………(九)

六、雪は活舞臺 七、里の女性

〔四〕……………(一三)

目次



八、ヤマド 九、削り杣人 一〇、木挽

第二の山 小舎……………(一六)

〔一〕……………(一六)

二、小舎地の選定 三、秋の小舎がけ 三、冬中の小舎がけ  
四、片小舎様式 一五、兩小舎様式 一六、小舎の内部

〔二〕……………(一七)

一七、テイソウ

〔三〕……………(一八)

一八、二月山 一九、年中山

第三山の信仰……………(一八)

〔一〕……………

二〇、山の神信仰 二一、山の神祀り 二二、ボタ餅作り

〔二〕……………(一九)

二三、山では猥談禁制 二四、椀を洗ふと山の神は嫌ふ 二五、洗面を山の神は嫌ふ  
二六、女性の山に入るを忌む 二七、山にて家畜の肉は禁制 二八、出産を忌む山の生活  
二九、ヤサラ祝ひ

第四 服飾装身のこと……………(二〇)

〔一〕……………(二〇)

三〇、短衣 三一、モンペ 三二、帯 三三、ガフ

〔二〕……………(二一)

三四、アグトモンコ 三五、小ハバキ 三六、ツマゴ 三七、ハバキ  
三八、胸カケ 三九、テエ 四〇、カブリカ 四一、ケラ  
四二、カンジキ 四三、コダス 四四、スカリ 四五、スゴ  
四六、ワツバ



第五 作業及び木の部属.....(五)

〔一〕.....(四)

- 四七、小ナゲベラ 四八、狩人の持つ小ナゲベラ 四九、四つ山榎
- 五〇、ウシシ榎 五一、ハヤブサ 五二、バツ
- 五三、土ゾリ 五四、榎木の材料 五五、山出しの頃 五七、春木の山積み
- 五六、シユラン出し 五九、オドシの地名

〔二〕.....(三)

- 六〇、キリゴ 六一、モトガエス 六二、アガリコ

〔三〕.....(六)

- 六三、山の毛の上 六四、バイ・ボイのこと 六五、青木 六六、ゾウキ
- 六七、アサキ 六八、カタキ 六九、普通のたきぎ 七〇、カナキ
- 七一、タマといふこと 七二、木のウラ 七三、トツカ 七四、カネツケ
- 七五、春木 七六、木材に打つ記號 七七、葉ノシ春木 七八、スツポ

- 七九、バツコ 八〇、丸太 八一、角材 八二、タルキ長木
- 八三、エグイ 八四、ネボウ 八五、ネギ 八六、木のアマ
- 八七、木のアテ・オイ 八八、薪「たな」の事 八九、樹木の冬眠り 九〇、クチャ
- 九一、ツマエル 九二、鉞伐り・水揚げ

第六 山の樹目.....(八)

〔一〕.....(八)

- 九三、ブナ 九四、イタヤ 九五、カンバ 九六、ナラ
- 九七、クワリ 九八、カツラ 九九、トチ 一〇〇、マンダ
- 一〇一、コンゴウ 一〇二、センノキ 一〇三、ハンノギヤツバ 一〇四、ヤツバ
- 一〇五、カダスミ 一〇六、ミズキ 一〇七、ソネノキ 一〇八、ハナノキ
- 一〇九、タモ 一一〇、ツギ 一一一、ヤマガ 一二三、ヤナギ
- 一一三、ヤス 一二四、ホウノキ 一二五、シヤクシギ 一二六、シラカバ
- 一二七、カシワ 一二八、クヌギ 一二九、クナルミ 一三〇、シラキ
- 一三一、ニガキ 一三二、ドロノキ 一三三、附記



〔二〕.....(六)

一三四、サルヲガセのこと 一三五、繊維を取るもの

第七 川下げ木流し.....(一〇一)

一三六、カナガシ 一三七、ドバ拂ひ 一三八、キジリカキ 一三九、キバナ  
一四〇、セドトリ 一三一、ツツミ出し 一三三、カラ及びコマダ 一三三、ヤライ  
一三四、木流し加勢 一三五、春木場 一三六、筏カキの話 一三七、トロのこと  
一三八、河流れ木

第八 山の工作品.....(一一一)

一三九、荒日の仕事 一四〇、山キドリ 一四一、トギタラ 一四二、山の箒  
一四三、シラクチヒキ 一四四、ヘラ 一四五、杓子 一四六、箸及び串  
一四七、コバ 一四八、ハンゾ 一四九、カヨ 一五〇、キジルス  
一五一、臼の取り方 一五二、山オシキ 一五三、鍛臺カキ 一五四、三本鍛ズリ  
一五五、オヒキ板とり 一五六、クサ竹割り 一五七、下駄も手細工 一五八、キドリ割り

一五九、くり舟

第九 雪の種々相.....(一二七)

一六〇、雪と村 一六一、アグ落し路 一六二、雪の豫則 一六三、雪層のこと  
一六四、サネ雪 一六五、シトリ雪 一六六、モロ雪 一六七、アラネ雪  
一六八、ハシラギ雪 一六九、アワ雪 一七〇、オトシ降り 一七一、ウバ雪  
一七二、ハテ雪 一七三、堅雪 一七四、吹雪ダナ 一七五、イソ突き  
一七六、ワシ 一七七、ユウギレ 一七八、大ザケの頃

第十 山がたの地名.....(一四四)

一七九、カツチ山 一八〇、デト 一八一、モダワラ 一八二、山のオダ前  
一八三、しつコゲ 一八四、山のノラ 一八五、嶮しいはキツイ 一八六、イソビラ  
一八七、クラ 一八八、クボ 一八九、ツボ 一九〇、ヒラ  
一九一、ツル 一九二、ズリ 一九三、ホラ 一九四、馬タテ場  
一九五、ウマ阪 一九六、シバリ 一九七、ヨドマリ 一九八、ヘグリ



一九九、ワタリ	二〇〇、沓掛け	二〇一、ソネ	二〇二、タビ
二〇三、ハブ	二〇四、川袋	二〇五、長根	
二〇六、舟の名のつく所	二〇七、キギシ	二〇八、ヒドロ	二〇九、ザワタリ
二一〇、マタ	二一一、マンブ	二一二、イワナメ	二一三、ガンジャ

第十一 山と民俗……………(二三)

〔一〕……………(二六)

二四、山と村人	二五、嶽の神様	二六、岩手山と片目の鬼
二七、山説話	二八、御駒ヶ嶽の話	二九、兩國が婚姻絶えた話
三〇、苗取爺と西の嶽	三一、國見峠と貝吹嶽の話	三二、晝休みは麻蒔きの日から
三三、権現様もタマゲル話	三四、篠崎八郎の話	三五、鬼母と権現様
三六、山男八郎太郎のこと	三七、九十九澤のこと	三八、東根太郎の話
三九、山奥の怪異	三〇、大蛇の話	三二、十石の大杉の話
三三、水無しの話	三三、牛形金塊の話	三四、目標となる古木
三五、山で知る天気豫測	三六、お山がけのこと	三七、岩手登山祈禱詞

〔二〕……………(一九三)

二二六、鳥獸も亦懐かしい	二二九、マスの話	二四〇、アヲシシの話
二四一、熊の話	二四二、兎捕りの話	二四三、ウキノシシ
二四四、オカベの話	二四五、狐の話	二四六、バンドリの話
二四七、テンカベの話	二四八、マミの話	二四九、ムジナの話
二五〇、雉子の話	二五一、朽コロバシの話	二五二、ゲンベツ

〔三〕……………(二〇六)

二五三、カ(蚶)	二五四、ヨガ(蚊)	二五五、トシバイ	二五六、ウシバイ
二五七、ハチアブ			

第十二 山林と食物……………(二一〇)

〔一〕……………(二一〇)

二五八、コゴミ	二五九、バッケア	二六〇、ゼンマイ	二六一、シドゲ
二六二、ホンナ	二六三、アイコ	二六四、ウド	二六五、ホギ
二六六、ミヅ	二六七、ウリエ	二六八、アザミ	



(二一).....(二四)

二六九、アキビ      二七〇、山葡萄      二七一、栗の實      二七二、ハシバミ

二七三、コウガ      二七四、クルビの實

(二三).....(二六)

二七五、ワカイ      二七六、スエダケ      二七七、松ダケ      二七八、サマツダケ

二七九、ハツタケ      二八〇、土モクリ      二八一、トウジモダシ      二八二、アワモダシ

二八三、エクジ      二八四、カヤシメジ      二八五、ヤチキノコ      二八六、サモダシ

二八七、アカボリ      二八八、シロボリ      二八九、白シメジ      二九〇、紫シメジ

二九一、ウイコモダシ      二九二、ハキモダシ      二九三、バクロ      二九四、マイダケ

二九五、ムキダケ      二九六、カノガ      二九七、ナメジシキ      二九八、ユキノシタ

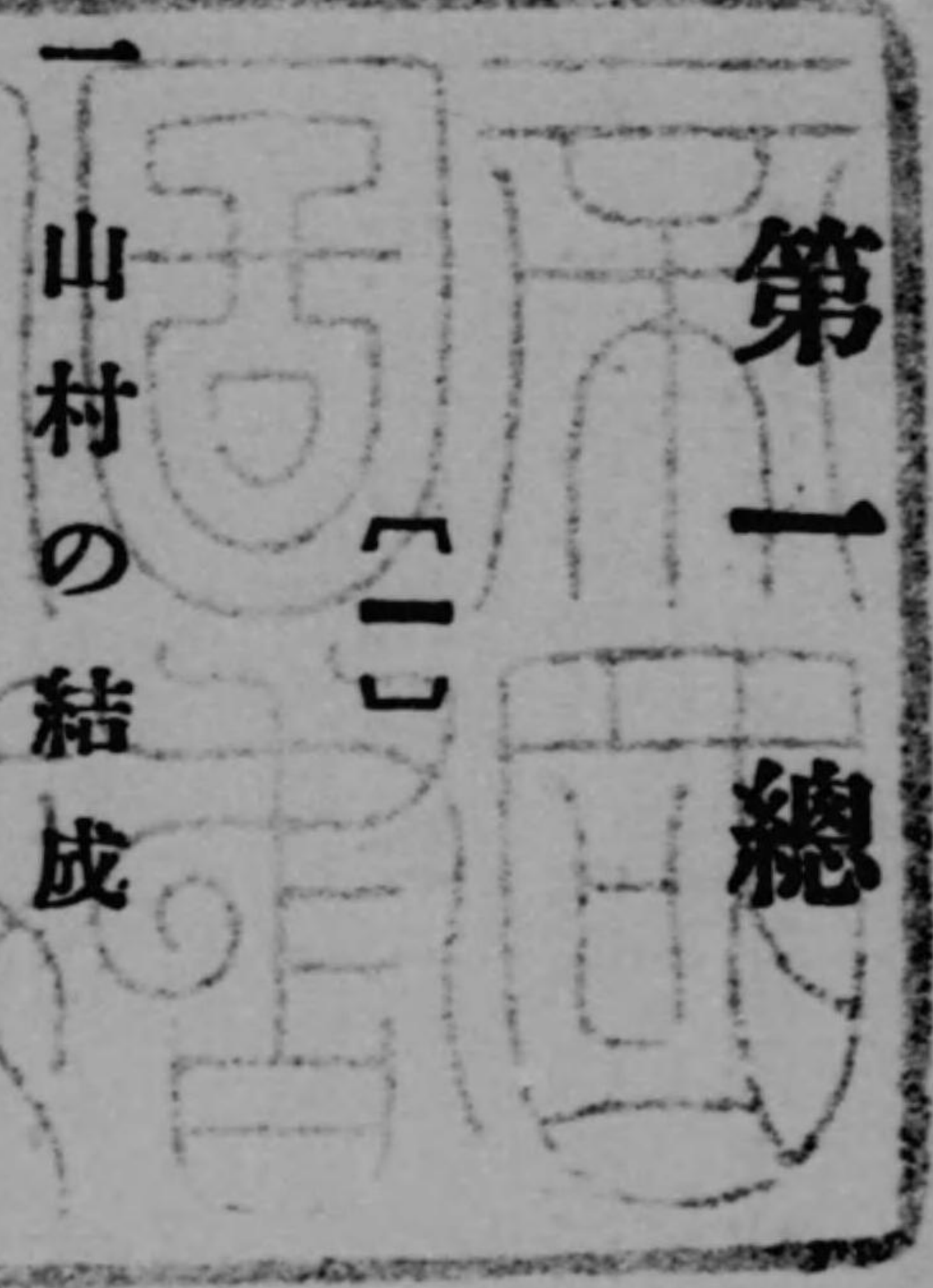
二九九、キンダケ      三〇〇、ギンダケ      三〇一、キクラゲ

三〇三、ヤナギモダシ、アガキノコ

第十三 山は未知數.....(三五)

三〇三、産金と山村社會      三〇四、童謡花折り      三〇五、山見又は花見のこと      跋言

第一總説



山村の結成  
私は今日でも度々妙な質問を受けることがあります。  
『貴方の村は新しい村ですか、古い村ですか』

斯ういふ質問に對しては分りませんと答へる外方法がないのであります。日本の國民は如何に系圖好きの民族であつても、一一書傳へてもなければ、特に記憶せしめようとして努力した譯でもなかつたと見えて、昔乍らの祖先の生活をぼんやり續けて來てゐる迄のことで、自分の村が古いんだか、自分の家が新しいんだか實際は餘り注意もせず來てゐると言つた方が適當であらうと思ひます。只古いと言ふ事の自尊は、随分激烈であつて、村に新らしい生活を需めて來る新參者は村の人として容易に承認されず、承認されても新參者として永い間取扱はれてゐる事實は幾等でも算へ得る



ことで、分家筋の頭のがらないことも、新参者は末席に甘んじなければならぬこともそれは當然な定律の形となつて現存し、村の風習を支配してゐることでもあります。

随つて村の生活單位は自己的ではなく、村を單位とした共榮共存主義でありながら、開放平等主義ではなく排外主義であることでもあります。それが一つの信仰を中心として結成されてゐる經濟主義的な組織單位の村なのであります。祭祀行事から、相互扶助的共濟關係にあるのは村の本體であつて、その組織の上に多少とも龜裂故障を生じ、若しくは生活上の脅威を感じる惧れのある場合は、之を受け入れないのであります。

然らばこの村の生活體とはどんなものであるかと申しますと、私の地方のやうな山村部落の例を取つて、段々調査して見ますと、大體二つの生活分野が認められます。

## 二 生活の二分野

生活の二つの分野は、暖季の生活寒季の生活、山の作業と里の作業、男の仕事の分野女の仕事の分野などとして見て來ることが出来ます。

この男性の分野である山の作業を考査して、山村農民の實生活は、更にまた社會全般の生活體に

重き役割を演じ、且つ影響してゐることの事實の參考として、遺俗の一般をも少しく望見したいと思ひます。

唯この僅かな資料の提出に基いて、直ちに山の生活體全部と信じたり、山の民俗の全般を過去を悉く知り盡したとお互が過信してはならぬことでもあります。

私は今まで注意を受けて、「それならあります」と言ふ一の答申書に過ぎないので、私の知らないこと、今後氣付く可きこと、など將來の集積と考査に、この雪の東北の作業を中心に、山の生活を素描した迄のこととあります。永い間山と親んで來てゐる事實の説明でしかあり得ないのであります。祖先から傳へられて來た種々雑多な<sup>しごと</sup>仕業、それは何一つとして無意味なものはありません。「虫祭り」「疫病祭り」「風祭り」の如き恒例の行事や、「盗人祭り」や「雨請ひ祭り」のやうな臨時の行事に至るまで、年毎に繰返して來てゐる其傳統上の沿革歴史には、嚴肅な力の籠つてゐることを知らねばなりません。

村の境には神が座してゐて、村に取つて不利益な事は凡ゆるものを排斥しようとし、村内の災害不利益不純分子を悉く外に送り出してしまはうとしてゐるのであります。

斯く土地と經濟とは不可避的のものであり、個人の生活に對する自然力乃至供給力は或制限を踰



える事を許さぬのであります。随つて人口の増率及分家を許さず、比較的永い間一定の戸口を維持して来た理由をも考へられるのであります。

農村郷土の生活體には、又山村部落の生活體には明らかにこの事實が認められるのであります。山村社會に於ける凡ゆる生活は、其土地の經濟に基準を置いてあるのであります。

### 三 私 の 村

私の生れた土地は雫石と言ふ所で、盛岡より十哩、略西に當つてゐます。北上川の一支流雫石川を中心に一の盆地を形成し、今でも全郷人口は一萬五千に満たなく、それが四ヶ村に分治されてゐますが、盛岡藩政の末期頃は十ヶ村で一萬六百五十石の石高でありました。住民は夏は田畑の農業に従事し、冬季は男子は山に生活すると言ふ風で、家毎に馬を飼育し、戸數一千三百軒許りに二千何百頭の馬が飼はれてゐたので、矢張り馬産地の一と算へてもよかつたかと思はれます。

交通は盛岡を玄關口とすれば、盛岡と久保田を結ぶ國見の街道で秋田と往來し、角館と雫石は分水嶺を一つ隔てた裏口で、南は澤内を経て出羽の横手地方と往來し、北は岩手山の裾野を廻つて北岩手に通じ、津輕鹿角三戸東海岸と交際してゐました。

東海岸からは海産物の鹽や魚類、昆布類など牛方に依つて雫石の雜穀と交換のため彼等は遠い路を物々交換に来て泊り、雫石地方の木材は雫石川から北上川に出て石巻湊にも運ばれるので、その文化線の想定は、北上谷文化を根幹として、頗る強烈な出羽文化と、東部海岸及三戸津輕方面のものもを浸潤させてゐると見ることが出来ようかと思ひます。

村の成長は勿論街村發達では無く、農業中心の山村部落で、地形的に雫石町の丘陵は一郷の中心となつてゐるので、代々の豪族もまた此所に居城を作つて一旗一頭の形勢を示してゐたが、豊臣秀吉の手入で南部氏に一統され、永く代官の政治を見ることになつたのであります。

南部氏の南方移動は、實は一面から言へば九戸四門の一牧官に過ぎなかつた者の、南方の米産地を欲して其宿望を遂げた事にも考へられ、雫石地方のみならず、紫波・稗貫・和賀の人々は、米を食はない稗飯の民として南部氏の本居地方の奥方民族を卑下して来た傳統には、新來者に對する多くの皮肉をも含まれてゐるのでありませう。

雫石地方住民も亦米を食べる事を誇りとし自ら米産地として、昔から自負して來てゐる傾向があり、現在もまた二萬五六千俵約一萬石を市場に販賣してゐる事實もあります。

明治以降になつて、人口の増加は急速の進歩を遂げてゐる筈なのに、現在尙ほ一萬五千足らずで



あり、それかと言つて寶曆の大飢饉は六千人以上も死んでゐて、それでも猶ほ何千人かは生き残つてゐるに考へて見れば、永い間一萬人足らずの人口で終始して來たと想像するより外ないことになります。

一定の土地に於て一定の人口より増加することも亦低下することも、一方は食料經濟から一方は勞力分配などから、最早や條件と言つてもよい程の自然律が主張に出來てゐたことを知らねばならなくなりました。村の發達の經路には、又農民の歴史には斯うした約束以外に立つては無益であることも分ります。

## 〔二〕

## 四 藩 と 山 林

慶長以前は雫石郷で其所務高は三千貫文であり、二千貫文は山關係のものであつた事をも如何に雫石は山林國であつたかを語るものであります。

降つて延寶年間に始めて雫石御山奉行所が設置されました。

又元祿年間になつて尾入に筏を検査する御番所が設置されました。

御山奉行は盛岡藩士から任命され任期は二年で、廳にあるものを「當番」と言ひ然らざるものを「非番」と言つてゐたやうで、六ヶ月交代であつたやうであります。是に地方のものを起用して手傳ひせしめ「御山係り」とも言つてゐたやうであります。更に山方の村には山村の事務全般を統べてゐる「御山肝入」があり、それを助けて「御山守」もあつたやうであります。

筏の番所では番人役人が居て、木材の品質員數を臺帳に記入し、「檢印」を施して川の「通用切手」を渡すなど頗る嚴格でありました。

春秋の二季には山林役人は支配區域の山林を人足と共に見廻り繪圖を書いた事が見えてゐます。

殖林計畫としては人工造林を奨励し、植林者に遣證文を出して分別わかけをしてゐる等仲々用意周到でありました。

地方の共有山は入合の證文を出して共有させ、官山は御用山として入山を禁じ、或は御制木と言つて樹種を選定して伐栽を禁ずるなどしてをります。

## 五 雫石地方の椀飯物



雫石地方の椀飯物に關しては慶長中のこととして御明神右京進覺書に左の如く見えます。

- 一、福岡御城御越年御祝儀、雫石御山檜杉捲物御正月大番飯檜物指上申様、御代官宮十郎左衛門殿を以、丹波被仰付候間、大桶三拾・櫃三拾・ケハ三拾膳・手桶三拾・ツボ桶三拾・面手洗大
  - 小六拾・大敷三拾・小折敷三拾・柄杓大小六拾本・物敷三百三拾ケ福岡御城ニ持參指上申候。
- 下略

是が後になると次の如く變つてゐます。

遺 證 文

- |                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| 一、黒檜元木五本 目通三尺廻。   | 一、黒檜壹本 目通二尺廻。     |
| 一、黒檜三本 目通二尺廻。     | 一、檜元木壹本 目通二尺廻。    |
| 一、杉元木三本 目通二尺五寸廻。  | 一、杉元木壹本 目通二尺廻。    |
| 一、杉三本 目通二尺廻。      | 一、黒檜元木拾本 目通一尺五寸廻。 |
| 一、黒檜元木四本 目通一尺五寸廻。 | 一、檜元木壹本 目通一尺五寸廻。  |
| 一、桧元木二本 八尺廻リニ五尺廻。 |                   |

右者來正月御年始椀飯物細工入用御吉例之通、雫石御百姓共江被仰付候條、澤内通川舟村之内

大杉澤御山小杉澤御山水無御山に而 右之通御山元、紛敷儀無之様爲剪出可被申候也

文化九年十月

宮	内	美	濃	藏	人	丹	波	沖傳右衛門殿へ
						外	衛	長嶺九兵衛殿へ

慶長頃のやうに製品としてではなく、其原料を徴してゐるのであります。

〔三〕

六 雪は活舞臺

我々山村の人々は、山に入つて生活するのに何故冬を擇び雪の上を好むかを一通り説明して見ますと、理由は色々算へられませうが、第一に雪を利用されるから、第二に里に男の仕事が無くなるから、第三に來る可き年の生活資源を得るためから、第四に作業がなし易いから、第一と第四は同



じやうであります。この他にも尙ほ様々ありませう。

雪を利用すると言ふことは、恰もシベリア北部の土人が冬期の雪上を好期節として潤歩交歓してゐるのに等しい氣持もあらうかと思ひます。雪を利用して活動することは、雪の無い國では想像も出来ない程でありまして、木材の伐り出し、運搬交易から、亦夏季などでは作業の出来ない場所でも、雪の上なればこそ出来るのが通則であつて、雪の國に於ける雪の恩恵は甚大なものであります。どうして今日スキーヤが冬山を越し渡る以上の深刻な觀念を植付けてゐるのであります。

木の伐り出し等にも、熊笹とか、小灌木とか草小柴などのやうな邪魔になる「シタクサ」もなく、皆雪に埋もれ壓縮されてゐて、仕事の能率の上に非常に都合がよいのであります。

冬はまた落葉の期なので、虫類のうるさくない事も算へることが出来ませう。肌を刺す蚊の類の襲撃が冬にはないことも樂なことです。馬サシの類や山蛭の居る地方も、雪の頃は山村民族の活舞臺であります。

雪國の殊にも山近い所の農民は、秋の收穫が済めば春の暖季を迎へる迄、久しい間の農閑期を、是非なく迎へねばならぬので、其農閑期の男の仕事の分野は、家の外に求めなければならぬ實情は極めて自然なことでもあり、其他に爲す可き仕事もないのであります。

女子は永い冬の間、殆ど衣服の調製、麻布の織出しに専念し、男は山に這入つて炊料薪の伐り出しや、人夫となつて山の作業に従ふのであります。

### 七里の女性

都市を除外して、山村に於ける女性の地位を考へて見ますと、食事・衣服・仕作・育児等重大な役割が課せられてあります。暖季の生活Ⅱ里の生活Ⅱ女の分野に於ける女性の地位等を検討して見て里に於ける女性の活躍を歸納的に見ると、女性の結成力を禮讚せずにはゐられません。人類の社會結成に於ける初期には、女性が如何に力強く動いてゐるかが察せられます。是は又自然の哲理とも思へますが、古代の民衆が農業集團として一定の土地に住居を定めるやうになつて以來今日に至るまで、猷ほ其能力を發揮してゐることは、驚歎に價するものがあります。

今僅かに自分の部落の例を取つて見ましても、男性は山の生活に在る間、婦人共は實によく衣服の調製に従事してゐました。昔は如何なる場所種族を問はず、凡ゆる生活が自足主義でありましたが、麻布の織出しもその一例でありました。

明治四十年に於ける下久保部落麻布産出情況







稱することがあります。本來は山の作業に従事する人の意味でありませうが、今はそれと定つてゐません。

是に反してヤマゴとは山の中に入つて其生活を渡世とするものと考へられてゐます。専門職業として旅を家とし、山を渡り歩く人々の意にヤマゴと言つてゐます。山の渡世人で木挽等をも言ふことがあり「俺はヤマゴをした事がある」などは木伐りのやうなことを渡世とした事があるとの意味であります。

ヤマドは里の方から言つた言葉で、山に入つて働く者の謂で、山の中に永く寝泊りしてゐるものも、日傭として一日／＼山に出入する者も凡てヤマドであります。

### 九 削り 杣人

木材を専門に削る職、即ち角材取りに従事するヤマゴ、之を「ソウマ」と言つて其職人の代名詞になつてゐます。正しくは杣職の事かと思ひます。この「ソウマ」は普通の樵夫せうぶより以上に尊敬を受けてゐて、職人化してゐます。大工などはこの職を兼ねるからでもありませうか、物指ものさしと墨壺すみかを持ち、鋸・鉞はびち・双廣鉞はびち・鳶口等の道具を使ひますが、削用専門のハビロは生命であります。昔は削

用専門の鉞として「金時鉞」を使用したと言はれ、私の家にも金時鉞があります。ハビロ鉞は大工の持つ斧鉞の如きものの大形のものであります。

樹を伐倒して尺度に依つて丸太とし、簡素な臺を作つて其上で削ります。動搖を防ぐためには臺にカスガイを打つて押へます。

ソウマの宰領の頭を「ソウマ頭」と言ひます。この一團の人々も亦相當廣汎な地域に亘つて歩いてゐます。雫石地方のソウマも海を越して北海道に出稼ぎしてゐるものもありました。

### 一〇 木 挽

ソマと共に尊敬され、亦同じく旅をかけて歩く職人に木挽があります。大きな「マイビキ鋸」が生命線であります。ソマ職と共に山村の開発には縁が深からうと思ひます。

丸太や角材に墨を打つて、板を挽く職人、昔から名人と言はれる程の名手が出たとの傳誦、杣削り職は目無しの角材を作つて三間ものコツバを出したと言へば、木挽は一ひきに庭の石を三寸も引下げた話など、大工に亞ぐ名工のあつた話が巷間に流布してゐる程であります。今御明神村の木挽職南野久一郎の率ゐる一團の木挽歌を僅か筆記して見ます。



ハア― 木挽はサンカの御山に住めど

前には六尺ヨ―ほんに立て竝べヨ―。

ハア― 山は高山ヨ―木は大木だヨ―

木挽は新參でほんに難儀するヨ―。

ハア― 木挽は新參で未だ小屋慣れぬヨ―

皆さん御最辰に願ひますヨ―。

ハア― 山子するなよ年若中ヨ―

鳥も通はぬ奥やま蔭にヨ―。

ハア― 新鋸あらし背負せて後から見ればヨ―

ママ子なりとも憎くないヨ―。

ハア― 鳥は鳴くく林場の屋根でヨ―

親方繁昌と鳴いてをるヨ―。

ハア― 親方錢借せ鋸の齒が缺けたヨ―

明日は何の手で日を暮そうヨ―。

アラシとは未だ買った許りの新らしい鋸で、未だ多く使ひなれない新刀のことです。ママ子は弟子でしのことです。ここでは単に「自分の子では無いが」の意味に使つてゐます。親分が子分共に鋸鉞の山道具を背負せて山に這入つて行く情景で、親分が後ろの方から誇り顔に歩いてゐることを唄つてゐます。併し段々弟子共も一人前になつて来ると親方の隙を見てなまけ出し、鋸の齒が破損したと言つて里に町に出て修繕しながら親方に錢を貰つては遊んで来ます。又明日あたり出て行きたいんだが、仕事をサボるには何んと言つて親方を口説き落さうかとして苦心してゐます。



## 第二山 小 舎

〔一〕

### 一一 小舎地の選定

小屋を掛けますには、左のやうな事柄を是非必要と致します。

山と里と聯絡によき地で、

仕事に出るに便宜で、

土や雪の崩落と水害がなく、

荒風の通り道でなく、

寒中水が涸れなく、

よしそれが完全でなくとも、これ等の條件に近い地形を撰定することが安全なのであります。「小屋場は吟味するものだ」と常々言はれますことは、以前の多くの遭遇した災難からして訓へてゐるこ

とでありませう。

### 一二 秋の小舎がけ

小舎の掛け方は掘立式と言ひませうか、先づ柱を土に掘て立て、棟木をあげ、のぼりたるきをわたり、ぬの横木をつけ、ホケたるきを結つて其上に屋根を葺くのです。

一つの小舎を新築するのに三月位は要ませう。第一日は土工や材料集めに暇取られて、短かい秋の日はいやが上にも速かに暮れて行きます。里からの距離や材料の如何にも支配せられて、第一日の行程はそれで終了します。日歸りの出来ない程遠い場所は、夕餉の仕度や夜の焚火の薪を用意して野宿を致します。

夜中は暖を取る必要から、焚火を絶やさぬやうに努力し、大きな火を燃やし、銘々蓆やトンバにくるまつて眠りに就きます。最初は交代に起きて火の加減を見たりしてゐますが、冴えた星も川瀬の音も岳の遠鳴りも、もう疲れた五體の神経をゆすぶることなく、其中皆疲れて眠つて了ひます。何時しか焚火は消えて、夢三更に結び、寒さに震へて目覺むる頃は、曉の霜白く蓆蓆を染めてゐて、吐く息が朝の氣に觸れてゐる頃なのであります。



第二日三日は屋根を葺き、側垣をつけ、アデギを入れ、火を小舎内に焚いて、心ばかりの祝意を致します。鍋の鍵を作つて吊すもの、用水のドワを打つもの、便所を作るもの、戸口や窓の修理をするもの、棚を吊したり物置を作つたり、板を割つたり其設備をして完成致します。

秋の中に小舎を作る場合は、積雪の防備のため、頑丈な構を致します。屋根などは熊笹等で葺き側垣などは割板や萱茅で囲みます。

斯うしないと、積雪の重量で押し潰されたり、曲つたりしますので、手の届く限り充分に盡して後顧の憂のないやうに努力致します。

### 一三二 冬中の小舎がけ

二月山にがつやまとは二月頃を主として山に働くことですが、この小舎掛けは冬中にかけることもありました。年明けてから山に入るので、この小舎がけは一苦勞であります。秋の中に小舎がけをして置いた時は、其儘上の雪や側の雪を取除けて入れますが、さもないければ新築して入らなければなりません。

雪が深いので秋に作つて置いた小舎も全く雪中に埋れて見えないことがあります。

雪中の小舎新築は、大體定めてあつた場所へ、スコップや雪ベラで以て雪を切取り、それから土工をして小舎を建てるのでありますから並大抵の苦勞ではありません。殊にも雪降りなどの日は實際悲壯な感にうたれ、辛い時など泣き出したいた事もありました。

冬中の小舎は材料不足で準備は行き届かないことと、其頃になれば餘り降雪はないので、屋根等は比較的高く且つ傾斜を急にする傾向があります。

殊に冬中で屋根草も側垣も多量に得ることが出来ないで、多くは里から持参したトンバや蓆類なので、どうしても輕装な風になり勝であります。

トンバとは今日のテントのやうなもので、屋根葺用として特に編まれた藁製の蓆なのであります。其故トンバは屋根用として以外には使用出来ません。トンバの語意は不明であります。

床に敷くものは檜や杉の葉又は小柴であつて別に説明してある通りであります。二晩や三晩は雪の穴にトンバを着て雪と寒さを防ぎ、眠つたでもなく夜を明すのであります。こんな時濕つたツマゴを其儘に寝込むことは、忽ち凍傷となつて歩行出来ないやうになりますから、十分注意して新らしい藁靴つまごと履き換へて眠ります。雪の中に育ち、山に生活する人達としては心得たもので、一人も凍傷に懸る者はありませんでした。一つの仕來りをも或程度まで遵奉せねばなら



ぬよい例でもありません。焚火は絶やさないとやうにしても、雪の上冬中の野宿は寔に辛いものがあります。

#### 一四 片小舎様式

山小舎の様式には二種あります。一つは片小屋と稱し、他は兩小舎と稱してゐます。一方にだけ人が寝泊り出来るやうな仕組の小舎は片小舎で、是は一方は高く山に續いてゐる場所に小舎地を撰定した時に作る構へで、山の一方を削り立て、其土を埋め立てるやうにして地上を平坦とし、一方山方から来る濕氣や雨水を排除する溝を設けたりします。随つて屋根なども片屋根とし、山方の方へは割板を押掛けて「からがき」ますから、兩小舎に比して至つて温かで、人數の多くない場合はこんな地形を選定することがあります。

片小舎の爐は山根の方に寄せて作り、マデキ（爐椽）は一本だけであり、戸口なども多く一方にだけあるのが普通であります。

#### 一五 兩小舎様式

兩小舎は概して平坦な地を選定します。是は人數の多いことや、作業の都合やで自然さうした所に小舎を構へることになります。

兩小舎の様式は一般に戸口は兩方についてゐます。人數の割合に従つていくらでも長く續けられますから、中央の二本のアデキは恰度線路のやうになつて、其間に柱が二本づつ立つて爐を區切つてゐるだけであります。

爐は中央に諸々にとり、三尺乃至四尺位の幅をとつて兩側を爐椽が走つてをります。アデキは六寸位の長い丸太を使用します。

人數は兩側に對立し、中央の爐から光線をとつて雑談を交しながら焚火にあたつてゐます。

#### 一六 小舎の内部

「蓆一枚の旦那」は山生活者のたへになつてゐます通り、其部分だけきりの自由よりない譯であります。床は土間の上に杉や檜の葉や枝を敷詰め、其上に蓆や藁を敷き、其上にゴザを敷きます。毛布や夜具衣類は後方に疊んで押して置きます。後もとの上には棚を吊し、各自に椀皿の食器一通り、小細工道具又その未成品山の作業の補助道具、其他一切の小装身具や貴重物等で、金庫や篋筒



の代用をしてゐます。

未だ雪の降らない秋の頃に作つた小舎なれば、床には、「トコナツ」のやうな柔かい羊齒類を敷き、濕氣がなく寢心地のよいやうにと充分意を盡せますが、冬季の雪をくりぬいて作る小舎などは、如上のやうなアヲ木のある所はアヲ木の葉を用ゐますが、時とすると雑木のみで比較的柔なアヲ木の葉も得られないので、止むなく柔かいやうな小柴や樹の梢を擇ぶこともありました。里近い所なれば藁を運び入れることもありませんが、多くは至難なことでありませぬから止むを得ません。

最初小舎地を選定して小舎掛に取掛つた際は、何人組の小舎であるから幾尋いくひらと云つた具合に、大體の目測を以つて取掛りますが、是はそれ以上廣くすればお互の空隙が大きくなつて寒く、狭くすれば反對に仕作に支へますのでその中庸をとつてゐる譯なのであります。

小舎内の座席には上下がなかつたやうであります。奥の方に老人が陣取り、若輩達は戸口近くに陣を取ります。各自配置が決定すれば、各々その装置を協同生活の第一條件としてやつてゐるのです。鍋釜桶や其他の炊事道具は中央の柱の根もとに置場を作つて置くこともあり、物置室は別にあつて、鋸鉞の類、雨具の類と共に置くこともあります。

爐の上には火棚を作つて其日／＼の汚れものを乾かし、火棚の上には焚火用の乾燥薪や、細工物を乾燥して置きます。

アデギは荒日や夜の細工の臺木で、削つたり割つたりする時使用され、一方防火の役をも果たしてをります。

炊事の道具は先づ水を汲む手桶、ヒヤク、飯鍋、御汁鍋、味噌樽、漬物樽、筥及杓子、等であります。其他小舎に設備するものは今はスコップ昔は雪ベラ、薪割マサカリ同鋸の類などであります。山の膳と云つて小舎の内部で各自が食事の際に椀を載せたりする板があります。木の割板で部厚なものであります。其他山の箒と言つてシラクチ蔓を打叩いて作つた箒もあり兎に角最簡單な住居をつくるのであります。

## 〔二〕

## 一七 テ イ ソ ウ

テイソウとは飯炊めしたき當番のことです。七人の小屋組とすれば七日目、十人組なれば十日目に一回自分に順番が廻つて來ます。この日一日は自分の本業以外にこの炊事の事務に當らねばなら



ないので、米を炊ぐやら薪を用意するやら、用水を汲むやら晝辨當の仕度をするやらで一寸の暇もありません。一定の所から食料を需めてゐる場合とか、食料を共同してゐる場合の他は、各自が各自の家から米味噌を持参してゐるので自分の順番の折には自分の米を使ふのが例となつてゐます。小屋組の人数は多くなると、炊事係は順番でなしに略一定するやうになります。専門の炊事を置く時は老人とか少年とかを傭ふこともありました。一行中から専門の炊事係りを出すには、一人前の仕事の出来ない者などが選定されがちなので、軽視されるやうな傾があります。

薪は小屋に皆が集つて来る際、必ず集めて持つて来るやう訓練されてありますので、小屋の周囲は薪で山積の状態であります。山が荒れて三日四日と續くと、流石山積の状態だつた薪も段々缺乏を告げて來ることがあります。薪は多く枯木などを用ゐます、之は枯木は乾燥してゐて燃え易いからであります。

生木を焚く場合は、火棚に割木として乾かして置き、之を用ゐて火勢を旺んにし、後はどんな生木でもどん／＼燃えるやうにします。

テイソウに當つた當座は、慣れない人は、飯を黒こげにしたり、生米だつたりして、珍談を作りますが、次第に上達して立派な炊事をするやうになります。テイソウは順番と定つてゐても、多く

は若物はその手際の折に手傳つて呉れます。老人を勞り尊敬する美德と、一つは鋸の悪い點を見て直して貰ふとか、或は色々指導を仰がねばならぬ先輩なので、種々便宜を計つて指導して貰ふ爲でもあります。御椀など決して洗ふことを許されなかつたのであります。現在は清潔を旨としますから、顔も洗へばお椀も洗ふやうになつてをります。

テイソウの語は以前（山の生活前編）經て送る意の程送かと思へましたが、其後よく吟味して見ますと、そんな漢字讀みの苦しい解釋でなくとも類語のあるのに注意されました。

氣嫌を取ること、よくもてなしをすることを私達の地方で「テイソウ」すると言ひます。妻が亭主の氣嫌をとることを「御亭さテイソウす」御役人の氣嫌をとつたりすることを「旦那衆さテイソウして云云」などと言ひますから、山小舎のテイソウの意味もこれに他ならないと思はれます。全力を盡して御馳走することに使はれる言葉と解釋されます。

従つて宿屋などで心良く盡して呉れることをテイサイ（體裁）が良いと言ひ、其反對を不體裁と言ふも同格の類語であらうと思はれます。勿論漢字は後で、その以前の又は以外のものでありませう。新參者のテイソウは山の生活では一のメンタルテストともなり、訓練されてゆきますから饜應役たるもの決して樂ではありません。



## 〔三〕

## 一八二月山

冬の山の作業を大體二つに區分して、「二月山」と「年中山」としてゐますが、二月山は年明けてから山に這入つて仕事をするので、年中山は秋の頃から山に這入ることでもあります。

二月山は年明けた頃の冬中に山に入つて小屋を掛け、冬中山稼ぎをすることを言ひます。二月を主として活動するからであります。二月頃は晴天続きであつて、雪は一般に落ついて堅く、雪の上の黄金時代であります。春木は多くこの二月山で伐り出されてゐました。

二月頃は伐り倒した木に雪は附着しませんから、其作業は容易であります。又朝や夕方には雪が堅く凍結してゐますから、一定の谷間へ伐つた木を集めるにも容易であります。この頃は木も段々伐り易くなつて來てゐます。随つて山ではこの期を以て伐栽した木材の山出しをも初めます。

## 一九年中山

年中山とは年の内に山に入つて山仕事に従事することです。二月山に對する名稱のやうであります。年明けてから入ると違ひ、熾に雪の降る頃山の作業に従ふので、二月山に比し遙かに難儀とされてゐます。

農作物の取入れを濟ませて、秋のうちに小舎がけし、所帶道具を持つて移り、荒れ狂ふ吹雪と戦ひながら、其作業を續けて行きます。日毎降り續ける雪は、其日々の勞苦を、段々層を高める積雪に被ひ隠して行き、小屋は雪に埋れて反對に低さを増し、軒に頑丈なタルヒ（垂水）が幾重にも垂れ下つて、如何にも菅江眞澄翁の驚きさうな住居と化して行くのであります。秋の頃豊富に湧いてゐた水も、寒を向へる頃には頗る減水して來て、時には水の儉約をも必要となつて來ます。

晝に掃へども、降つてゐた雪が、眠つてゐた間に餘りに積つて、戸口のコモは押し明けられない事もしばしばあります。



## 第三 山の信仰

## 〔一〕

## 二一〇 山の神信仰

山小舎にあつて、山の作業に従事するものは、毎朝毎夕新らしい御飯の出来た度ごと、山の神様へこの炊たての御飯を献饌します。只簡単に、飯を少し許り鍋の蓋に取つて後方の棚の方へ供へるだけですが、食事の始まる前拍手して供へますから、一同の者に矢張り敬虔の念を起させ致します。

其他、酒宴のある時は必ず先づ山の神様に御神酒を供へ、それを撤して一同のものに御神酒を頒ち、後に酒宴に移るので、御神酒を神前に供へるのは小舎頭で、低頭拍手します。

ボタ餅を作る場合も、多くは山の祭祀でありますから、先づ神前に供へてから、一同の者は徐ろに食べるのであります。

## 二一一 山の神祀り

十二月の十二日・一月十二日・二月十二日は、如何なる切迫した忙しい仕事をも休んで山の神を祭祀します。意味は分りませんが、十二日は山の神の日とされてゐます。従つて各月の十二日は、山の仕事は禁物とされてゐます。村の山の神の神社も毎月では勿論ありませんが、十二日は祭日になつてゐます。

別けても年ねんちゅう中山では十二月十二日、二月山では二月十二日を盛大に山の神様を祀ります。山小舎に於てなにはなくとも、酒を用意し、ボタ餅を作り、肴を煮たりして、神様に供へ酒盛といふ段取りになります。兎を捕るとか雉を捕るとかして、豫め御馳走の準備を整へ各自に身を清め穢を祓つて拍手をして山の神様を拜むのであります。昔は何か呪文を小舎頭が口中に誦したとも傳へますが私達の知るやうになつた頃は知つてゐる人は無かつたやうであります。以上の十二日は山小舎の恒例としての山の神の祭祀でありますが、山では猶ほ臨時の祭祀があります。餘り悪い天氣ばかり續くとか、何日も續く荒日あれびで小舎籠りをしてゐる時など、晴天祈願のためにやる山の神の祭祀はそれであります。



## 二二一 ポタ餅作り

山が永く荒れて外に出て働くことが出来ず小舎の中に休んでゐることを「小舎籠」と稱しますがウサ拂ひの氣持も手傳つてか、斯うした時に徒然の餘りポタ餅を搗きます。天氣快晴祈願の山の神祀りでもあります。ポタ餅と言つても普通の御飯を押し潰し捻り交したものであつて、餅を搗くとは言ひ條、それは體のよい言ひ方で、事實はコネ廻した御飯のことなのであります。量は一人に對して、一食半乃至二食分の米を磨ぎ、少し強めに炊いて、それを鍋に入れた儘杵でこね廻すのであります。

ポタ餅の杵は二尺前後の握り太のもので、少し曲つてゐると都合はよくあります。ポタ餅を搗く役は若い者で、向ふ鉢巻きで捻り廻すと、御飯は段々粒が消えて強靱になつて來ます。飯粒の全く見えぬ迄汗を流しながらかき廻す珍景は山小舎なればこそであります。

一方老人連は串削りを致します。長さ一尺四五寸で八分角のものであります。この串に恰も蒲の穂の形に如上のポタ餅を刺して火に焙るのであります。一人に對して串二本位あたるやうに分配致します。

火で燥くと解いて置いた味噌を塗つて再び火に乾かし、適當の加減にして食べるのであります。最初の一本の串では食ひ足りなく、二本では少し餘る具合で、其所に色々様々の山としての珍談が生じます。

人に依つては二本を平氣で平げて猶ほ食ひ足りないとして他人のを奪つたり、食へないと言ふ人に山の作法は後に残すことを嫌ふなどと理窟をつけて無理に食べさせようとしたり致します。

昔は山中に常に濁酒を醸酵させてゐるさうですから、御神酒とこのポタ餅を神前に獻じてそれから皆が祝つたのであります。

里下りの場合は子供への土産にこのポタ餅が喜ばれたもので、私達の幼少時も父兄の持つて來て呉れるこの餅を待つてゐたものであります、一の時代風俗であります。

## 〔三〕

## 二三 山では猥談禁制

山では小舎の中でも妄らな話は禁物とされてゐます。其故猥談に花を咲かせると言ふことは禁じ



られてありました。勿論歌を唄ふとしても淫らな唄は悪いとされてゐます。殊に女に關した猥談は極端に嫌はれてゐました。嘘か眞實は分りませんが、昔は猥談をする者があると小舎の外に追出し鹽を振り撒いたと言はれたものであります。

禁じてゐることを冒す者があれば、山の神に見放され、罰が當つて、木に打たれて壓死するとか枝の破片が飛んで来て傷を受けるとか、櫓に呑まれて其下敷になるとか、雪崩に足を取られて谷底に埋るとか、其身一人に限らず小屋が火事に遭ふとか、イソに突かれるとかの不幸を招來するとして嫌はれてゐます。

山の生活をする者に取つては、斯した禁制は、多くの經驗から割出された教訓として一應は考へて見る必要があります。

## 二四 椀を洗ふと山の神は嫌ふ

山小舎では、お椀を洗ふことも山の神様が嫌ふとして許されませんでした。若しお椀を洗ふと、山の神様が怒つて、お山が荒れると言はれてゐました。この意味はよくは解りませんが、此所は神域であるから、里の村のやうな生活することを山の神様が嫌ひになるからでもありませんか。山

に入つたら山としての作法に従へ、少しく原始的な生活に甘んぜよとの意味もあつての事かと思はれます。随つて山では椀は不潔と思はれる程でありました。水の不足から故意に老人等の戯れたはむに言ふことを、代々戯れと知りながら言ひ傳へて來たものを、吾々だけは眞面目に考へることも馬鹿氣た話ですが、椀を洗はない無精者の言ひ譯の理由とばかりも思へません。然し之は昔から餘り嚴格でなかつたやうであります。清潔を第一とする今日では勿論行はれません。炊事當番の者が洗ふか、又は自分で洗ふかします。

## 二五 洗面を山の神が嫌ふ

顔を洗ふことを山の神様が嫌ふと言はれ、顔を洗ふと山が荒れると言はれてゐました。然し之などは水に不便でない限り、其禁制を遵奉するものが一人もなく、顔を洗はなかつたりするのは山の神様の嫌ひなさるのではなく全く自分の都合でありました。今日では却つて顔を洗はないものが無精者とされ、不潔な奴とされますから、今の山の神様は段々醜男よりも身だしなみのよい美男子を可愛がることでありませう。昔と異つて山の生活も普通の家庭生活と異ることなく、石鹼も楊子も鏡も白粉も山に入つてゐますから、昔の民俗の俤を補促するのに困難を感じます。



## 二二六 女性の山に入るを忌む

山の生活では、山に女の來ることを嫌つてゐました。是も山の神様は里の婦人を嫌惡するからであります。どうして里の婦人が山に來ることを山の神様が嫌ふか慥かな事は言へませんが、之は可なり嚴重だつたやうであります。女は昔から罪深いとされ、御し難い悪心の所有者のやうに言はれて來てゐますから、不淨を忌む山の神様及山の生活者は是を近づけまいとした努力は、軍律的な意味からも多分必要だつたのでありませう。

兎もすれば生命を賭する作業が多いので、常に緊張した生活を必要とし、心の弛緩を絶対に排撃しなければなりません。一寸さきは生命を奪ふ危険に晒されてゐる時、煩惱怯懦の氣があつては、科學機械の取扱ひと同じやうな、山の作業に、非常なる危険を伴ふことを注意しなければなりません。殊に寒季もあけて、春暖の候に移らんとする季節は、土地も亦その溫暖變化を享けて、人間は生理的に倦怠を起し、眠氣を催し、精神的にも其緊張を缺き、受難の率を高めるの頃であります。多くの人が禁制としてゐることを、軽く嘲笑し以つて破る人は、思慮乏しく輕卒であり、深謀熟慮を缺くのであつて、歸着する所、受難が多い譯で、冷靜・沈着・果斷の度を失ひ、受難の素因

を招來することになります。歴史は嚴然鏡の如く、傳誦民俗も亦吾々民衆の生活記録であります。故に、現在の生活との聯鎖を考へる必要があります。

山の神様の神爵は第二としても、生活意識の動く所に、神意を信じ、靈威を感じ、それが尊敬とか信仰の事に關聯を有つとしても、少しも不思議とは思はれません。況して其所に神業を説く事は古い宗教形式に於て、一番賢明でもあつた事せう。人間業以上の奇蹟を神の神意神業と信ずる所に、吾々の超越した精神が相觸れて神秘の威力を増大し、其所に描かれる神人共同の生活は、聽ては私達は神と共に生きて行くことであり、立派な神の進出となつて、或は美しい信仰、立派な神の成長ともなつてゐることせう。神様の思召の立派な神聖な土地を、徒らに冒瀆してはならないのです。私達山の生活者は、理窟なしに山に神ありと是認し、其加護に依つて人間生活の能率を得てゐることは結構なことです。

## 二二七 山にて家畜の肉は禁制

四足二足を食べない風習は、維新前の古俗でもありましたが、山の生活者は大抵のものを食べてゐたやうであります。勿論自分の家ではそれを嚴禁し、且つ持込むことをこの上なく恐怖した話も



あつて、雉を食べるにわざ／＼家の外で料理し外に鍋を持出して煮て食つた話など、よく田舎の地方で聞かされることがあります。然るに、雉やまどりや熊やシシや兎は、山では喜んで食べてゐたやうであります。

是に反し、馬・牛・犬・猫等の如き家畜の肉は絶対に禁じてゐたやうであります。之は里の家でも食べる事を不淨視し、且つ極度に嫌ひ、盛岡の特殊部落民のみ食べることを、非常に蔑視してゐました。山の中では殊にも嫌つてゐたやうで、私達の時代迄其痕跡があり、家畜類の肉を山小屋に入ることをしませんでした。之を冒すと半身不隨とか、口が曲る(顔面神経)とか言はれます。私の祖々父は禁制の肉を家で食つた爲、勿論<sup>おとし</sup>羚羊だつたさうですが、口が曲つた事があるとの話であります。大正になつてから死んだ私の父も家畜類の肉を家に持つて來ることを嚴く叱つてゐました。神聖な神域を冒瀆されるやうな氣で憤慨したらしいこの古俗は、一面私達の研究心をそゝる得難い賜ともなつてゐます。

食物に對しては割合寛大であつたらしい山の神様も、家畜の肉には澁面を作つて氣嫌を損じ、旋毛を曲げたらしい事は、矢張り一寸考へて見ねばならぬ事かと思はれます。

## 二八 出産を忌む山の生活

男は山から歸つた場合とか、又は山へ行かうとしてゐた頃、妻が分娩でもすると、その日から七日間は休んで謹慎の意を表し、山に入ることを遠慮する風がありました。又山にゐて里の妻が分娩したと聞くと矢張り或期間家に歸ることを遠慮するやうでありました。實際は産褥にある期間を謹慎するのが本來であつたのかとも思はれます。

出産は何故か不淨視され、二十一日間は食事をも産婦は常人のと區別され、鍋釜は勿論、椀箸膳に到るまで之を別扱ひと致しますから、偕老同穴の主人たる者、又産褥の期間謹慎の意を表するのは本來の姿かも知れません。更に妻でない場合、即ち其家に出産のある時は、其家の家族たる者は矢張り山にゐても謹慎を表すべきものか何うか、其點は明瞭ではありません。私達の知るやうになつたのは、明治の後期のことでありますから、多くの遺俗は大部廢れて來てゐて不明なことが多くあります。

實は斯様に婦人を嫌ひ、山林の領域を見張つてゐる山の神も、里にあつては一面女性の味方となつて同情を垂れてゐるのであります。産婦の出産の主宰をもすると信じられ、産婦は山の神の神祠から「カネノヲ」を借りて着帯したり、又は出産の時鉢巻とも致します。一面山では婦人を嫌ひな



がらも、里に於ては出産を手傳ふ産婆のやうな役目を果してゐます。兎に角出産を手傳ふ神様として考へて見ねばならぬ事です。

## 二九 ヤサラ祝ひ

私達は山の仕事を終へて里に歸つて來ると、山小舎の仲間だつた者が皆集つて、山の神を祭り御祝ひの酒宴を催します。この祝宴をヤサラ祝ひと申します。ヤサラの意味は分りません。祝宴の意味は、無事に仕事を終了したことを神に謝すると共に、一同の無事を慶賀し猶ほ懇親と訣別の意をも兼ねた祝宴でもありませうか。酒肴や餅を神前に供へ、各自再拜拍手して酒宴に移ります。

一行の主人役をサキダチとも唱へ、又は小屋頭こやぶしとも言ひます。小舎を代表する宰領者のこと、「親方おやかたさん」と普通に呼んでゐました。

この組頭は神前に神饌物を供へたり、先きに立つて世話を焼いたり致します。祝宴には正座し、他は年齢の順等に居流れ、御神酒を頂いてから祝宴が始まります。

このヤサラ祝ひは、男ばかりの祝宴であつて、場所は普通小舎頭即ち親方の家などで催します。女性は其家の人達が手傳つて呉れる以外、全く男手で調理を致しますから、昔は女性を入れないの

が本式であつたのかとも思はれます。

一行中の主人役であり、其組を宰領してゐる程の人は、經驗に富み、物事に熟練してゐて、山の作業には一種の歴史でもあり、亦曆でもあります。随つて山では時には寶物でもあります。

ヤサラ祝ひでは、勢ひ山生活中での失敗談や、功名談に花が咲き若い者を刺戟發憤させるのであります。

## 附記

ヤサラの行事は必ずしも山小舎と關係はなかつたらしく、御明神村瀧之澤では三月中に此の行事があり、一枚の膳に中央に大椀を伏せ、其大椀を取繞るやうに木皿を八個伏せ置き、家内中して山の神の御神酒を頂く形式をする。御供へ餅及御神酒を山の神に供へるが、ヒヤゲに入れて献じた御神酒を右の八皿に注ぎ、家内銘銘之を頂く行事で、八個の木皿は盃の事もあると言ふ。山の神を祭る行事であると言はれてゐる。(荒屋敷ナツ報)

北岩手郡田頭村でも春の頃同じく一枚の膳に八個の盃を出して酒を注ぎ山の神を祀ると言ふことである。(高橋氏報)

岩手郡西根村にも同じ行事がある。

山小舎組は山を下つて、席を改めて祝宴する「ヤサラ祝ひ」と、里の家で年毎にやる春の「ヤサラ」行事には、一面山と別れる意味合ひも含まれてゐるやうでありますから、農(或は野)神を春



に迎へて、山の神を送る行事とも或る關聯した意味もあらうかと思ひます。里の神様即ち農神様と山の神様の交代する日は三月十六日としてゐまして、此日「ノガミ團子<sup>だんご</sup>」を作る風があります。ヤサラの行事も多分は山の神と別れることに無關係ではありますまい。

## 第四 服飾装身のこと

### 〔一〕

#### 三〇 短 衣

今から七八十年前の衣服の状態を推考して見ますと、先づ肌着兼シャツのやうなテツポといふものを着けてゐました。勿論普通の前割の短いものなのです。私達の時代までは之を着けましたが、現在はシャツが代用となつてゐます。地は自家製出のシラソ麻布で作り、藍の紺染であります。

此上に綿入を着るか、綿入のない者は衿を着用しました。綿入の上に綿入を着る者は上等の部であつたのです。一體に綿が不自由でゼンマイの綿や、麻糸屑<sup>おぐそ</sup>を代用してゐたと言ひますから、多くの人は減多に綿入を着ることがなかつたらうと思ひます。

衿も表裏地共に麻布で皆シラソ布で出来てゐるので、頗る重くさへ感ずる程であります。袖はヒラキ袖と稱し、頗る大きく、且つ先きは夜着のやうに開いてゐるので、必ず褌をかけて仕事をした



さうで、その襷は種々染模様ある花色木綿のものに紅い糸の房などをつけ、一種の誇りや伊達としてゐたさうです。袷の染模様は現在も雫石染などと稱する紺の二重染であります。サヤガタ・ツルビシ・キツビシ・花ビシ・波形など其他用途に依つて色々あります。此ヒラキの袖にも房をつけたさうです。是等は皆悉く短衣で、少しく腰の両側は裂けてゐます。コシビリと唱へてゐますが腰切りの意でありませう。更に肌の中に麻布製の腹掛をしてゐる人もありました。

今日ではヒラキ袖の衣服は殆どありません。私の知つてゐる弘化四年生れの人が保存してゐて昭和八年の八月見せて頂きました。往古からしてこのヒラキ袖以外の衣服を知らなかつたさうです。

次に人々は貧困のため仙臺領へ出稼に出ることになり、その交易に依つて將來されたのは所謂「仙臺ムジリ」の流行であります。慥か「仙臺ムジリ」は明治三十年頃まで私達の地方を風靡したやうであります。このムジリの特徴は袖が小さくなり三角型を帯びて来て、腋に少しく空隙の出来てゐることです。仙臺ムジリの流行して来た當座は、非常に便宜として皆之を採用するやうになり、新舊の面白い挿話があつたさうであります。老婦人はその縫ひ方を知らずに死んで行つたとその頃の新智識だつた老婆達が言つてゐたものです。兎に角ヒラキ袖の使用下限は藩政末期だつた事が頷かれます。

仙臺ムジリの次に流行して来たのは今の横テツポで、私達の着てゐるものなのであります。仙臺ムジリは極く子供の時分着た記憶よりありません。短衣系統のものが盛岡の周囲を包んでゐることは、盛岡風俗が盛岡城を圍んでゐる事に何か歴史的の理由が伏在してゐることと考へられます。

### 三二 モンペ

肢ひきは更にモンペ又はモンヒキとも呼んでゐます。最近まで悉く麻布で製してゐました。今日も猶ほ農民は水田用として夏季用として便宜を誇り大部分使用してゐます。殆どシラソハダの自家製造に基くものであります。このモンペは兩腰で、紐でもつて腰に吊し穿くもので、兩側は少しく裂けてゐます。

このモンペには近世著しい變遷はなかつたと見え、何の傳誦もありませんから、頗る舊い頃からの古態其儘かと信じます。男女用の區別はマチの小便穴の有無で決するだけ、全く同じであります。大便や女の用便は必ず尻腰の紐を解くことになつてゐます。

冬期用の肢引は裏をつけるだけでありました。是を「二枚モンペ」と呼んでゐます。



## 三二一 帯

帯は「オビタナ」とも稱してゐたやうであります。矢張り多くは自家で織出した麻布を使用してゐたさうで、是を「布オビタナ」と申してゐます。この布は普通のものと同じ、約半幅ばかりに織出したもので狭い布であります。一反から二筋とりますから一織から四筋の割合となりませう。古への狭布のことが考へられます。

## 三三二 ガ フ ラ

ガフラは一名を雪袴ゆきばかまとも言ひました。股ひきの上に穿はくものであります。膝より上の雪を防ぐ爲でありますから膝の所より下はありません。膝の所にくくり紐がついてをります。上は衣服の裾と一緒に入れて帯の上から締めますから、膝より上は全體袋状となり、保温の装ひともなるのであります。モンベの上に穿くので二重となり、どんな寒さの折りも寒さを感じないし、雪がモンベにしみ込んで来ないので仲々珍重されてゐました。地は同じやうに麻布を黒く染めたものを用ゐました。ガフラとはダブ／＼してゐるから、袋のやうにガツフラしてゐるからなのかと思はれます。狩人もこの雪袴を用ゐてゐました。

## 〔二〕

## 三四 アグトモンコ

アグトモンコとは跟かかと當のことであります。跟をアグトと申してゐます。モンコはモツコでありませう。ツマゴ(雪靴)を履く時跟を保護する藁製のものであります。是に依つて跟の凍傷を保護するのであります。

## 三五 小 ハ バ キ

コハバキとはアグトモンコの下に履いて、藁磨傷わらづれを防ぐためのものでありまして、麻布で製し市松・會あひ杉・網あみの目などの模様を刺繡をした一つの美術品とも言ふ可きものであります。ハバキは脛當はねでありますから、コハバキはその小さいもの、脛バキ(穿)から轉化したものでもありませうか。

## 三三六 ツ マ ゴ

ツマゴは藁靴の一種を言ひます。山の雪の上では主としてこの普通のツマゴを使用致します。楯



出しには強いからと言つてセミカシラ等を用ひますが、保温の程度がツマゴに比して劣るので、雪の中では殆どツマゴを履いてをります。一體藁と申しますものは寒冷を防ぐ度合は驚く可き程で凍傷に對する設備としては今日まで是に匹敵するものは無く寒氣に對して非常に抵抗力が強いのであります。

## 三七 ハ バ キ

ハバキは脛を保護するもので脚絆の一種でもありませう。故に「はく」とは申さず「あてる」と言つてゐます。然し名稱からは「ハネバキ」と考へられます。脛に穿くの意でありませう。正しくは脛當とも思へます。

藁製・ミゴ製・蒲製・葡萄皮製・馬尾製・マダ皮製・シヨ皮製などあります。雪などを防ぐと共に脛の保護には是非必要缺く可からざるものでありまして、雪の上冬季と限らず山行き、山の作業には夏冬を擇ばず着用されるのであります。刈りカツバや柴ハジキの豫防となり、鉞遣ひや歩行の安全など功德禮讚は算へ切れません。

## 三八 胸 カ ケ

ウナカゲは前當とも言ひます。胸當でもあり腹掛でもあります。藁製・葡萄皮製・マダ皮製などあります。胸や腹を保護し且つ汚れを防ぐ装身具であります。

元來私達の地方のケラ（蓑）は後身だけ完全で、前身は兎角雨雪に侵される缺點を有してゐますので、ケラを着てゐた場合もこのやうなものを以つて前身を保護する必要があります。殊にケラを着けてない場合でも、仕事の所作（木流し・木積み）には是非必要なのであります。農家で稲刈りや稲を摺んでする仕事にも是と同じやうなものを用ひてゐます。

## 三九 テ エ

手甲當をテエともテカエイスとも稱します。多く私達は木綿製を用ひてゐました。主として防寒用具であつて、綿入れの也有ります。藁で編んだ手袋もありますが、私はその名稱を知りません。

## 四〇 カ プ リ カ

私達は淺黄や白のモンバを被つてゐましたが、モンバは厚い綿木綿を中央を幅廣く兩端を狭く裁



つたもの二筋を縫ひ合せたものであります。語意は分りません。其他布呂敷と言ふものを老人共は被つてゐました。四角な布呂敷を對角に二つに折つて三角形とし、兩端を左右とし、三角形の頂點を後頭として喉に締めてゐました。或は古態でありませう。亦手拭などは白いはなく淺黄色のみを使用してゐたさうですから、如何にも賤民といふことを如實に示してゐた事でありませう。

被りものを悉く「カブリカ」と稱してゐますことは、「被り皮」の意味とも考へられます。すると「被り皮」は獸皮などを想像して見なくてはならなくなります。

## 四一 ケ ラ

この蓑は装身具と言ふよりは、雨具とも見る可きであります。山小舎から作業に出る際は必ず着て出ますので装身具にも算へられませう。毛皮と共に外套にもなつてゐます。

肩から後身にだけ垂れたものをケラと稱し、腋から胸をも包む方をミノと區別してゐますから、南部の殿様が美濃守だから蓑をケラと言つたと云ふ事は當らない説で、蓑をケラと稱してゐるのは南部領ばかりではありません。材料はマンガ・ワラ・ササメ・クゴ・ミゴ・スゲなどあります。

## 四二 カン ジ キ

かんじきには二種あります。雪を踏通らないための雪かんじきと、雪路を滑らない爲の金かんじきであります。

木で作つたかんじきは、割木で作つた方をツリカンジキと唱へます。イタヤ・ニガキ等は割木として作ることもあり然らざる事もあります。丸木の方は右の他に、サダメシ・ハシバミ・ウルキ等を使ひます。前の方をマイコ、後の方をシツコ（尻こ）と言ひ、共に火にかけて曲げます。爪を打ち込む所の縛る紐はシラクチを裂いたもので頗る強いものです。足に履くやうに紐を結びつける所作を「ツマイ」〜と唱へてゐます。爪即ち楔はイタヤ又はサヒタを用ひ、一尺位に長く削つてよく乾いたものを打込み、後で適當の長さに切ります。曲げた木を結縛るシラクチを取るには余程巧者でなければ出来ません。適當の長さのものを一旦煮て、それを裂き、それをしごくので、是をシラクチを引くと言ひ難事とされてゐます。

〔三〕



## 四四 コダス

物品を入れて背負ふ袋で、藁縄を編んで作ったもの、アケビ蔓を編んで作ったアキビコダス、葡萄の皮を編んで作ったブンドコダス、など様々種類がありますが、要するに物品を容れて持行くもので、多くは背負ふやうに出来てゐますが、腰に吊すやうな小さいものもあります。山の中で用ゐるものは葡萄の皮で作つたものが多くあります。鋸マサカリを入れるので、最も丈夫なこの葡萄皮の物が使はれます。藁コダスは家事用の馬糞拾ひ用とされ、アケビ蔓のものは辨當を入れて畑に持参するやうであります。何れにも例外は勿論あります。

## 四五 スカリ

山や畑に行くものが辨當を入れて持つて行く袋で、最近はずツクの袋がこの名を言つてゐることもあり、コダスをスカリとも言つて、スカリ・コダスの區別は判然しなくなつてゐますが、元來は區別が判然してゐたであらう。今は大體布製の背負い袋をスカリと言つてゐるやうであります。語意は不明であります。

## 四六 スゴ (ゴは鼻音)

萱で編んだ俵のことを言ひ、木炭を容れるものは「炭スゴ」で、海岸から魚類を容れて送つて來るものは、サカナスゴであります。ダブスゴとかイワシ・乾物類のスゴも澤山來ます。スノコ(簀)と關係がありますか。山の生活とは餘り關係は有りませんが加へて置きます。

## 四七 ワツバ

晝食辨當を入れる曲物であります。山にあつても里にあつても辨當携帯で外の作業に出る場合、多くこのワツバと言ふ曲物に飯を入れて持つて行きます。個人の分業を指して、「ワツバ飯は各自各自」と譬へてゐます。テンデは各各といふ事であり、菅江眞澄翁の「奥の手ぶり」に書いてあるのも是であります。秋田大館や山形・會津から産ると聞いてゐます。材料は檜や杉のやうであります。



## 第五 作業及木の部屬

### 「一」

#### 四七 小ナゲベラ

山では雪をかき投げたり、掘割つたりすることが多いので、今日のスコップの代用に木製の雪篋を使用してゐました。このへらの使用下限は大體明治までのやうで、大正には最早や實用には適しないので、スコップが旺盛を極めてゐました。併し稀には使つてゐる人もあつて、仲々器用な手扱ひに感心したこともあります。是には二つの型がありまして、一方は歩行専用のもがあります。私達はサツテとも知つてゐましたが、矢張り狩人の持つものと同じやうに「コナゲベラ」と言ふのが眞當の名稱かと思はれます。

コナゲベラはイタヤ等で作り、幅の狭い銳利に出来てゐるへらで、少し位の雪を拂ふと共に、杖ともなり、又は突き刺して雪の底下を探る重要具であります。山小舎と里を往來する場合など必ず携へて歩き、雪の深く積つた山腹を横断するには、このへらで足場を一步／＼堅めて進んで行きます。川や藪や雪隙などを探り進む時、又は軽い雪崩ゆきかみなどもこのへらを突き刺して除けることも出来るので、山生活者には重要器具であります。

大きい方の雪除篋は、雪を拂つたり、切取りしたりするのは専門で、スコップのない時代には頗る貴重な山の器具であつた事と思ひます。是等は皆割木で作られるので、良質の木でなければ出来ません。櫓材の使用されてゐるものもありますが、イタヤは殊に賞用されました。

#### 四八 狩人の持つ小ナゲベラ

普通の樵夫が持つてゐるより、猶ほ幅も狭く軽く作られたものを狩人がもつてゐます。コナゲベラと申すさうです。是は殆ど雪除けにはならない程のもので、杖と探りを入れるのが専門だつたかと思はれますが、私達は現物を見ただけで使用のことはよく分りません。獲物を探す目的と雪を渡る時の杖であつたかと想像されます。私の採集したのは「たす」とか言つた人の天保頃持用でありました。



## 四九 四つ山櫓

山では普通に五尺位の櫓以下は使ひませんが、作業に依つて違ひますが、春木を運び出す櫓は六尺位から七尺位のものであります。材木を運び出す櫓は更に大きく、八尺以上もある櫓を使ひます。この普通の櫓はヤマ二つあつて對になつてゐますから、四山櫓とも言へませう。眞澄遊覽記の「四乳鵠」と名ある鱗に「はこの四つ山櫓のことかと思はれます。重量三百貫を曳き下すやうなことは稀ではありません。木材などを運び出すには、櫓道を立派に作つて二人相對つて曳き下ろすこともあります。春木などは五尺棚（經一尺の薪二十五本）を一枚櫓に積むやうな人もあります。

櫓道が凍結しては櫓の滑走力が鋭く、曳き卸すに困難でありますから、其場合特に坂道などには檜の葉技はまたを坂に敷き詰めたり、木灰を振りまいたりして用心しますが、それでも朝夕の凍ひやる時分は飛ぶやうに櫓が走るので、其苦勞は一方ではありません。

餘り早い時は、櫓にサグリ（支へ棒）を入れたり、タガ（櫓に輪をはめること）を入れたり、フカセ（後に木を惹づること）を附けたりします。櫓を曳く者は皆鐵のカンジキを履いて足の滑らないやうにしてゐます。それであるから坂など櫓が餘り走つて危険でもあれば、前記のやうに木灰を散布したり、檜や杉の小枝交りの葉を敷き詰めて、滑走を防ぐのであります。こんな所は人が寄つてたかつて協同して引卸すのであります。

## 五〇 ウ シ 櫓

雪路の勾配が少しく急で、普通の四つ山櫓で至難の時は「ウシ櫓」を用ゐます。ウシには山と言ふのが無く、全體低く出来てゐるので、速力が弱く滑走の度も低いのであります。四つ山櫓のやうに左右の舵が取難く、眞直ぐにだけ走る性質を以てゐます。向つた方へむり／＼行く性質と、遅い走力とはウシ（牛）の名を冠してゐる所以かとも思はれます。ウシ櫓には前後の作り方はなく、前にも後にも曳かれるやうに出来てゐます。速力が鈍いだけ壊れ難い特徴があります。

## 五一 ハ ヤ プ サ

ハヤブサは山の一つある二尺許りの櫓であります。對でありますから全體で山は二つになる譯であります。



山の斜面が急傾斜で、ソリもウシも使用困難な場所で之を使つたと言ひます。之を人が曳く事は尠なく、主として積んだ儘手放しする櫓であります。一旦下まで引き卸せば、歸りには肩にあげて上つて行つて、又木を積んでは放します。私達はこのハヤブサを使ひませんが、祖父の使つたと言ふハヤブサを一挺保存してあります。

## 五二一 バ ッ

バツはウシを半分に横断したやうな櫓であります。使用方法はハヤブサと違ひませんが、ハヤブサは春木（薪）などを専門とするやうに、このバツは丸太や木材を急斜面を引き下すに使用されます。矢張り手放で多く使ふのであります。

## 五二二 モ ッ タ

モツタとは櫓に取つける舵木だぼぎのことです。軽くして強靱な木からとります。幹の一部と枝とを利用したもので、亦出しの木を横積とした時主として是を用ひます。大きな方は普通左手で使ひし舵を取り是を「男モツタ」と呼び、右の方の小さい方を「女モツタ」と言ひ坂道を荷をかかへ

る時など役に立ちます。モツタは山櫓又はウシヅリに利用し、材料は栗梓木イタヤなどであります。語義は分りません。

## 五四 土 ズ リ

雪の無い夏季などに使用する櫓で、山の斜面に横道を作り、其道に枕木を敷いて其上を引く櫓で櫓は厚い板の對で作るのであります。道に敷く枕木は「バギ」と言つてゐました。土道つちみちを引く櫓との意味でドゾリと申すのでありませう。ウシ櫓などのやうに前後に引かれるやうに作られてゐます。夏季の頃木材を山出しする一方法であります。バギや櫓には油を塗ることもあります。

## 五五 櫓木の材料

櫓に作る木は、イタヤ・ナラを普通とします。猶ほ櫻樺かばやクルミにても作りますが下品とされてゐます。櫓キドリとする良質の樹は少ないのでありまして、曳く力に大いに關係しますから殊に精撰する風があります。柚山生活者でも秀れた人でなければ良質のキドリを發見出来ないと云はれてゐます。



## 五六 山出しの頃

彼岸過ぎになると山の雪もどん／＼消えて来るので山の作業は今まで伐つた木を運び出さなければなりません。之は「山出し」で、川端に向つて運び出します。山出しは櫓で積み出しますから櫓出しとも言ひます。櫓出しは山の作業中で一番骨の折れる仕事でありますから食事も數回取ります。菅江眞澄翁は米二升を一日に食べると聞かされて驚いてゐますが、私達はこの山出し即ち櫓引きには一升二合から一升五合位食べてゐましたから思ひやられます。

この「山出し」の頃は山の作業の絶頂期で、杣山生活者の活動の最高潮期であります。朝夕は冷えて凍結するが、日中は暖いので雪はどん／＼消える一方であります。

この頃になると人手が不足するので、里から應援の人足を招ぶことがあります。是を「加勢」と言つてゐます。人足の應援を得て山はさながら戦争のやうな活動を暫し続けるのであります。重なり合つた山又山、日増しにふくらむ雑木の一齋林の若芽に、冬枯れから甦よみがへつた新鮮の氣を晴天に漂してゐる時であります。

## 五七 春木の山積み

一旦川岸に運んだ春木は、其所に山積みして置くか、又は雪ツル水（雪解水）で便宜の地、即ちコマダ入れして置くかであります。後に雪消えを待つて積直し、秋の頃まで乾燥して置きますが、この場合崩れない仕組のサンをかけて積みます。この山積には甲の木も乙の木も全く混交されて積まれてあります。山積の木は夏の頃一二回に亘つて雑草や小柴の日陰をもつものを拂ひます、これを「陰拂かげばらひ」と申します。

## 五四 シュラン出し

シュランとは、木材を組み編んで、其上を木材を滑り出させる装置で、之をまた「シュラン出し」とも言つてゐます。この上を木材を滑らせる扱ひを「流す」又は「木を流す」と稱してゐます。多くのは丸太等で作りますが、此のシュランを拵へますには、下方から順に作つて來ます。木の根もとの太い方を下とし、細い方を上部として、順次下から組合せて來ます。上から滑り走つて來る木材の引懸りの無いやうに苦心します。椽ぐらには太い丸太を使つて外へ流失しないやうに努めます。この装置は木材を轉び落す爲の便法であつて、山のホラ等に用ゐられる山出しの一方法であります。



随つて餘り距離の長いシユランはありません、普通百間以下のものが多いやうであります。春木等のやうな短尺の木材は、山の斜面を轉がすと雪が附着して雪だるまとなり始末が悪いので、矢張りシユラン落しすることもあります、短尺ものは粗末なシユランでも充分間に合ひます。

丸太のやうな長い木材になると、立派なシユランを組んで流します。櫓の種類では引下すに至難であり、「粒轉落」としては仲々能率があがらない場所、亦は雪の無い頃で、小柴・モダワラ・檜ボツト等で何してもシユランを敷かなければならない事があります。殊に雪の期節ではない夏期の山では、谷間を運び出すには是非必要であります。

このシユランを、木材を込らせる仕事は、實に危険な作業であります。途中にゐて止つた木を動かして流したり、シユランの修理に應じたりすることを「シユラン扱ひ」と言ひますが、常に聲を出して合圖を上下に交します。二間もの三間ものは途中に突當つて眞二つに折れたり、宙を舞つて來たりしますから危険至極であります。宙を舞つて來ることを「トブを打つて來る」と言つてました。「宙返り」を「トブ返り」と言ひます。シユランの組方も經驗の浅いものには出來ません。シユランは語源は不明であります。或は暴れる意味の修羅でもありませうか。

### 五九 オドシの地名

山の崖、急斜面などにオドシの名の付いてゐることがあります。「喜嶽オドシ」とか「高倉の高オドシ」などと、一澤に一ヶ所位はそんな名が附いてゐますのは、木材を伐り出した場合山出しをして來て、其上から木材を轉落した場所の謂であります。

奥の嶽近い處では、澤目は澤に沿ふて木材を出し運んで來るのには峻坂となつて、櫓を引く事が不可能なので、止むなく山の側面を迂廻して行きますから、場所に依つては是非二度も三度もこのオドシに懸けなければなりません。このオドシでは崖のやうな地形なれば木材は其儘落ちますが、斜面はやや緩いと木材を敷き並べ所謂シユラン組みをして落し流すやうになるのです。

オドシは従つて「落し場」でありませう。川に向いた突端などによくあります。オドシ一回で済むなれば一路臺、二回三回かかるなれば二路臺・三路臺と言ひます。

### 六〇 キリゴ

山の中では、木を伐ることを「キリガタ」と言つてゐます。「俺は今日も伐り方だ」と言つた具合であります。又多くの人が入込んで仕事をしてゐる時は、それ／＼仕事を分業的にやりますので、



小集めをする「落し方」や、山出しをする運び方の「出し方」や、其他土場の「整理方」や橋立場の「マクリ方」「つけ方」などに分れて仕事を致します。こんな場合も「伐り方」は一番上位で、自ら尊大振りもし、且つ皆から尊敬されてゐます。こんな場合は對立的に「キリコ」と稱ばれてゐます。

大團體で山の仕事をする場合も、小集めに従ふものや橋出しに従ふものは、雑夫仕事とされてゐます。若いものは未だ木を伐る経験を積んでゐないので、多くこの雑役に廻され勝であります。又毎年入る薪伐山でも、加勢として來たものは新役に廻されるのであります。

専門伐り方に従事する程の人は、多く技術の勝れてゐる者になつてゐて、経験に富み、伐り出す可き木に向つての目標を凡て誤らないやうなものでなければならぬので、何うしても年長者が多い傾向がありました。

朝には、鋸鉞の如き道具の手入に時間を要し、小舎を早く出ることが少なく、随つて夜分まで仕事が残る傾向がありました。手許が薄暗くなつて猶ほ鋸の音がするといつたやうなものです。

## 六一 モトガエス

木の根もとに鋸をひき入れ、横に伐り倒すことを、モトガエスと言ひます。バリバリ／＼ドドドドと言ふ凄しい地響を立てて横倒しになつた瞬間と氣持は、一種名状し難い壯快味にうたれるものです。

木の倒れる時は豫め安全地帯を定めてゐて其所に避難をしないと、場合に依つては豫期しない危難に襲はれることがあります。

一番危険なのは木が裂けあがつて倒れることで、殆ど逃場を失つて、裂け墜ちて來るその木に打たれ壓死することがあります。未だウケを切らない前に、風の爲めに裂け上るとか、木の質がよく、裂け易く出來てゐる場合とか、他の木が壓せられてゐるとか、その他様々な原因はありますが、不意に裂けて、切つた方の幹の根もとが飛び上り、根もとの方に逆に押され勝になつて墜落して來ます。

その他枝の一片が他の木に突當つて折れて飛んで來る場合もあり、風のために思はざる方に反對に倒れて來たり、豫期しないやうに倒れて根もとの方が躍つたり、兎に角避難する場所は最初から決めてかかつてゐても、是等の不意打のために身を轉ずる餘悠なく不覺をとることもあります。モトガエスには、豫め倒す方向を定めて、其方に鉞を入れて即ち「ウケ」を切つて置くのであるが、



兎もすると如上のやうなこともあるのであります。倒す方向に「ウケ」を入れ、一方からは口矢くさやで押し立てても、口矢が効を奏しないこともあるのであります。

## 六二一 アガリゴ

又伐り方の危険なものに「アガリゴ」といふのがあります。直立してゐる木の中段に攀つて伐ることです。非常に長く伸びてゐる木を伐る場合などこの方法を用ゐます。杉などは餘り長い木が倒れた際に、折れたり裂けたりして、折角の良材を損ずる憂もありますので、こんな場合適當な高さに攀つて、其上端を一先づ伐り落し、然る後に根もとを伐つて倒しませんと、完全を期し得ません。

更に太い樹を山の斜面などで伐ります際に、其儘で倒しては、後の作業に差支へるとか、思ふ方向に是非倒すの要ある場合など、支障を來す太枝を先づ切落すの必要に迫られることなどがあるので、矢張り攀つて切ることがあります。

アガリゴでは普通綱を持つて上りますが身を避難すべき範圍は極く限られてありますので、切落す瞬間の震動のため頗る危険であります。身を支へる場所、縛る場所に十分なる注意を要します。

## 六三三 山の毛の上

「ケの上」とは地上の産物の總稱で、草木のことをいふ言葉であります。「山のケの上を賣つた」といふことは、多くの場合、其土地の立林を賣つたこと、木を賣つたことであります。反對に「ケの下」とは土地の事で、山林の立木を稱して「ケ」と申してゐるのであります。毛の文字を使用してゐるやうであります。

是に依つて考へられることは、稻なども「ケ」と稱してゐたことでもあります。藩政時代地方役人は各村々を廻つて、其年の稻作情況、熟穂の具合を實査することを「ケミ」と稱してゐました。毛見とも檢見とも書いてゐますが毛見が正しいかと思はれます。是は獨り水田に限らず畑作をも見て廻つたのでありますから、地上のものは凡て「ケ」であつて、田も畑もその地上産物も亦「ケ」であつた事が知られます。其農作物を評定するのが毛見役であります。

米箱を「キスネバコ」・「キスネビツ」と言ふも、杵と臼とで米を搗くことを「キスネ搗く」と言ふも、其「キスネ」は又「ケスネ」であつたかと想像されます。塗畔の對語にケグロがあります。草を生えしめて置く畔のことです。



ケスネはケスネであつたとすれば、キスネ搗きは精米のことで、其精米を入れるものはキスネバコ・キスネピツでありました。

赤稻をアカスネと言ひ、早稻をワセといふも、赤キスネに關係がありませう。

山の「毛」は山林の立林、農作物もまた「毛」で、共に生えてゐるもの、地上産物の謂かと思ひます。

#### 六四 バイ・ボイのこと

總じて若い芽を「ワカボエ」と言ひ、「モエコ」とも言ひます。樹木の芽を「樹のボエ」とも言ひます。是と近い語で、樹の幹の根もとなどから發生する若い枝を「バエ」と言つてゐます。一旦切つた樹木の根株などに發生する二世の多くの若い小枝などは、其木のバエなのであります。藤のバエ、葛のバエ、桑のバエなどもその例であります。別に出増した、出て伸びた枝との意であります。モエ・ボエ・バエは何れも訛言からとのみは考へられません。

#### 六五 青 木

檜・アスナロ・杉・黒檜のやうな常緑喬木を指して「アヲキ」と言ひます。併し松の類はアヲキと稱してゐるを聞きません。アヲキは青木かと思ひます。「アヲキ伐り」と言へば杉や檜を伐ること、春木伐りとは違つて尋常でない仕事とされてゐます。アヲキは雑木の對立語ともなつてゐます。

#### 六六 ゴ ヅ キ

落葉喬木を指して言ふ總稱であつて、アヲキに對立する語であります。松林などの對立の語に雑木林と言ふことがあります。

併し木炭の場合は、檜の木の木炭だけ特に檜木炭と言ひ、他を雑木木炭と言ひますから本來は矢張り雑木の意味でありませう。

ソウキ山とは雑木林の山といふことで、落葉喬木の山であります。雑木は更に固い柔いの區別にアサギ・カタギとも言ひ或は里の方では雑木の薪を更にカナキ分と稱してゐます。語意は金鳴のするやうな乾燥した薪の事せう。

#### 六七 ア サ キ



アサギとはカタギに對立する語で、樺朴の木・やなぎ・さわくるみ・はのみやつば・などの柔かい樹種を總稱して言ひます。アサギ春木はカタギ春木よりも少しく下品とされてゐます。アサギとカタギとの區別は判然してゐないやうであります。木質の柔かい樹はアサギで、固い方はカタギと言つてゐて不都合ないやうであります。アサキ・カタキは春木薪はるぎんぎに於ける區別であつて、普通の薪には言ひません。

## 六八 カ タ キ

カタキは矢張り、ソネノキ・イタヤ・ハナノキ・カダスミ等の質の固い方を言ふやうであります。春木としてはこれらカタキの方は格段に賞用されてゐました。カタキはアサキの對立語であります。

## 六九 普通のたきぎ

春木は勿論薪なのでありますが、普通私達のタキギと言つてゐるのは、山から流して來ない方の薪をのみタキギと申してゐます。

里の山で棚に取る薪は決して春木と言ひません。春木とは山から流して來る薪の固有名詞であり

ました。里の薪は春木よりは少しく長尺に取るやうです。積み方に依つて五尺棚(幅五尺高さ五尺)六六の棚(幅六尺高さ六尺)五十この棚(幅十尺高さ五尺)等稱します。是等のタキギは多く用材を取つた後のウラキ(残木等)から取るので、春木薪のやうに賞用されず且つ下品とされてゐます。

## 七〇 カ ナ キ

この里のタキギは、栗・楡など質の固い樹種は、同じタキギの中でも「カナキ薪」等と言はれて上等視されてゐます。春木ではカナキと言はないやうですから、春木のカタキに當る譯であります。随つてカナキとカタキの區別は判然しません、里の薪の最上は「カナキ」で春木の最上はカタキと言つても宜しいでせう。

馬の背で盛岡の市中に運ばれる「カナキ薪木」は、市民の賞用する所のものであります。薪の中でも松薪は下品とされてゐます。

## 七一 タマといふこと

樹の丸太の一切れをタマと謂ふのは全國的だと言はれますが、伐り倒した樹木を根もとから、其



尺度に依つて切離し、これを算へるに、一ひとごろ、二ふたごろ、或は、一ひとたま、二ふたたま、と唱へます。タマの稱呼も面白いと思はれます。日本の古代人は玉を愛玩しましたが、管玉などを聯想して見ますと何かしら考へさせられます。

## 七二 木のウラ

ウレは古語であつて何でも物の上端を意味すると言はれますが、元木に對して枝や梢をキノウラと稱してゐます。ウラキとは樹梢の意味で、釣竿の先端の竹をもウラザヲと言ひますから、物の先端を意味する語で、地名のウラ（浦）も之に依つて聯想することが出来ます。「ウラ柴」「樹のもとウラ」「ウラダマ」の例語があります。梢の先端をウラとも言へば、シンコとも言ひます。シンコは心の意味で、眞中とか最上端のことを意味させよう。

## 七三 トツカ

總じて剥ぎ取つた樹木の皮のことではありますが、アヲキの類では「杉トツカ」「檜トツカ」などがあり屋根葺用となつてゐることは、明治神宮だけでも餘りに有名であります。

ゾウキトツカの方では、ヤス・マンダ・クルミ・カンバ・其他ありますが、山小舎では屋根用ともしますが、外垣即ち壁の代用として「からがき」付けます、トツカのカは無論皮であります、全體の意味は不明であります。

## 七四 カネツケ

青木の殊に杉などの木が、用材とする場合伐り倒して見ると木質の中身は黒く、外圍だけ白いところがあります。外圍の白い部分はアマと言ふことは他の木と同じであります、黒身の木質は是をカネツケと言つて下品として劣等扱ひにされます。濕地に近い所の杉などには多くこの黒いカネツケの木が多くあります。赤身の杉は良材とされてゐます。カネツケは鐵漿染の意味からと思ひます。

## 七五 春木

ハルキとは山から流し出して來る薪のことを言ひます。即ち「春木」であります。多くは「二月山」で之を伐り出します。伐つた春木は一旦川端に橋出しをして、夏を越して積んで置き、秋になつてから里へ流し出して來ます。そして薪の市場とも言ふべき春木場等と稱する所から銘々の手許







木などのやうに流して来て、春木場に陸上げするのです。スツポの意味は判りません。

## 七九 バツコ

バツコとは檜や黒檜などの枯れた伐株などを稱してゐます。「バツコ伐り」はこのエングエ株を伐ることです。檜や黒檜など雪の上で伐つた伐株は、猶ほ捨て難い部分がありますので、昔に伐つたその伐株を伐り出すことがあります。葦葎や板となつて使用されます。バツコの意味は分りません、近世の流行語でないかと考へられます。

## 八〇 丸太

マルダとは六尺とか十尺とか十三尺とかに伐つた木材で長めのものを言ひます。後には角材にもするが、未だ後先を伐つて枝を拂つた木材のことです。「マルダ伐り」・「マルダ出し」・「マルダ流し」・「マルダ筏」などそれでありませう。

## 八一 角材

私達の地方では、材木とは角材のことのやうに思はれてゐます。長さ六尺の角材は「シシロ」又は「ケンタ」とも稱され、其他「一間半もの」「一丈もの」「二間もの」等といふやうに言はれます。

## 八二 タルキ長木

「タルキ」も「長木」も同じものであります。「ホニヨタルキ」・「ハセダルキ」・「屋根ダルキ」など其例であります。多くは杉・檜・松・落葉松を使つてゐます。垂木の意味でありませう。

## 八三 エグイ

木の伐株をエグエ又はエングイと稱してゐます。バツコ伐りは即ちエグエ伐りであります。小柴を刈り取つた其跡の切り株をも「エングイカツバ」と申してゐます。この「カツバ」は「刈り端」の意味で、刈つた後に残つた刈株のことであつて、他のカツバの語と共通するものではありません。「蓬カツバ」(蓬の刈株)・「栗カツバ」(栗の刈株)其例であります。

エングイのクエは「櫃クエ」・「ハセグエ」などのクエとも関係があつて、突き刺す串をも考へさせられます。又「エングイ」は池や川の普請に土留めのために刺す串のことをも言つてゐます。「み



づたまるよさみのいけの章具比うち」(古事記應神(天皇大神歌)の章具比でもありませうか。

## 八四 ネ ポ ウ

薪春木など、その丸太の一切れを根元から算へるに一番タマとも言ふが、ばら／＼になつた一個々々を謂ふには、ネンポとかネポとも呼んでゐます。五寸ネポ、一尺ネンポなど其例であります。五六尺以上の太い丸太にはネンポと唱へるを聞きませんが、薪の類の一本を指しての時は、ネンポと言つてゐます。カナガレの場合にも「春木ネンポは流れて来た」と言ひ、其他「ネンポ擔<sup>たな</sup>てい來い」等とも言ひます。但しネンポは割木には使はないやうでありますから、最初は「握り棒」から出てゐるかとも思はれます。「ネンポ持つて叩いた」「ネンポを振り廻した」など握り太の木の意味の語例もありますから、手に握る木の意味、握り棒と見られないこともないやうです。

## 八五 ネ

ネギは寝木で、倒木など横倒しに伏してゐる枯木を言つてゐます。

## 八六 木の ア マ

アマとは、檜・杉・黒檜・或は其他に於ても外圍の部分、白い部分、濕氣水分の多量に含んでゐる所を謂ひます。檜及松杉などの切株は段々外圍の水分を多量に含んでゐる所から腐蝕して、中心の固い所だけを骨の如く残してゐますが、あれが即ちアマの腐れ去つたもので、アマは肉の部分で多く滋養分を含んでゐる所であります。キドリを割るにも此部分はソゲ(側にそれる)で割れませんで嫌はれます。

## 八七 木の アテ・オイ

檜などの日陰の方の生長の悪かつた部分などと言ひ、「アテだから割れない」「アテだから捨ててしまへ」など言ひ、悪い部分との意味に使はれてゐます。「アデクト」(悪口)と合考されます。オイとは木を板目に割ることを言ひます。弧になつてゐる木の一端を更に板目に割ることを「オイに割る」と稱します。

木の割り悪い部分は「アテ」でありますから、アテギ(爐椽木)のアテとは全く違ひます。



## 八八 薪「たな」のこと

里山などで、薪を伐り積むことに、「一枚二枚」といふやうに算へ、其の棚を作ること「張る」と言ひ、其棚を支へてゐる柱を「ホタテ」と言ひ、海の帆船を擬してゐることは面白いことです。薪の棚を作つた形は帆船に似てゐるので名の起りかとも考へられますが、海岸のそれと山間の地形名とは頗る共通してゐることは柳田先生など屢々注意されてあります通り、單なる轉用では無く、双方共に古いことと注意されますが、ホダテを二本突立て、其間に薪を積み、上の開かないやうにシバリを取つて棚を張ります。是等の棚を算へるには一枚二枚又は一棚二棚とも言ひます。

野原に浮島・茨島・松島があり、澤や谷間にイソビラがあつたり、山の村にソネがあつたり、流水にセトがあつたり、共通するものは少なくありません。山の奥をオギと言つてオクと言はないことも、沖奥は同一語源としても考へやうでは面白いと思ひます。

## 八九 樹木の冬眠り

山の樹木も、冬中と雪解頃では非常に變化があります。寒中では樹木は一般に堅くなつて冬眠りを経てゐます。樹木の冬眠りは一寸變に考へられますが、實際のこととあります。殊に山樺などを

になりますと、冬中の寒氣の激しい頃は全く堅く樹液が出ないのでありますが、春の彼岸過ぎになると、それが段々樹液が増して来て、伐り口から流れ出す始末であつて、寒中より容易に切り進みが出来るのであります。

松なども春の彼岸過ぎになると、段々脂がにじんで来て、鋸に附着するので伐るに困難を感じますから、山樺等とは反對に冬中の寒い頃、即ち未だ脂の多く出ない頃が伐りよいものであります。

斯のやうに樹木にも冬眠があつて、それが雪解頃になると猛烈に活動に入る時期と見えます。随つて雪解頃からの山の林相は、一段と美しく、日増にふくらみゆく雑木林の芽と、梢は男性的な清楚な美しさであります。

## 九〇 ク チ ヤ

「ヤ」といふことは楔のこととあります。私達は樹を鋸で伐り倒す時、其伐り口へ楔を入れて段々と口を押開かせ、鋸の出入を容易ならしめ、且つ豫定した方向へ押し倒すのであります。この楔を口矢と申してゐます。



この楔即「ヤ」には二種あつて、一方を割矢、一方を口矢と申します。割矢の方は木を割り又は裂くため其間隙に打込みますが、口矢は木の切断に鋸の出入を自由ならしめ且つ倒木の際向つた方向に押し倒す目的で作られてあります。使用には兩方とも鋸の頭で打ちます。

原材はクチャはイタヤ・サヒタを主とし、ワリヤはヤマガ・アマネ等を用ゐますが、山ではイタヤを多く用ゐます。

キドリを取つて来てヤに作ることを「ヤを削ぐ」と言ひます。矢矧の地名等は矢を削つた土地かも知れません。

ロヤは二個を一對として紐を結び、よく是を乾かしてから使ひます。アデギでこのヤを削り乾燥してから里に持つて歸ります。

### 九一 ツマエル

ツマエルは正しくはツメアルと發音します。装ひ結ぶの意味で、櫛にウデギを取付け結ぶことを「櫛をツマイル」「櫛をツマエロ」など言ひ、かんじきを結び合せることや、足に履くやうに準備する装置を同じやうにツマエルと申してゐます。語意はツマクで、包み巻くの意かとも考へられます。

併し猶ほ他にも類語があれば、別の意味かも知れません。

### 九二 鉞伐り・水揚げ

昔の春木伐りは今日と違つて鋸伐りではなく、鉞で伐り倒したと傳へてゐます。鋸の無かつた時代で止むなく鉞伐りとしたか、或は鋸があつても鉞の方が便利なので使つたのか明瞭ではありません。勿論古い時代には鋸は無かつたやうにも傳へてはゐますが、鋸は近世の流行とも思へませんし、頗る古い頃からしてあつたものと考へられますから、この傳承には別の意味が含まれてゐるものと思はれます。私達の時代には多くの古俗も不明瞭になつてゐることが多かつたので、この點も判然しません。是も別の話ではありますが、山から木を流し出して来て、最後のコマダ入れ、即ち春木場などと稱してゐる地點に到達する時は、「オツケ木流」と稱して慶び、一家總出で料理を拵へその場所で慶び祝ひます。綱を張り繞らしたタルキの「三木ワク」に來た木を順次鯨波陸に引きあげます。この所作を「水揚げ」と言つてゐます。加勢を加へた數十人の人達は居竝んで鬨の聲をあげながら水から木をあげ、揚げ終れば、其所の露天に火を焚いて一の祝宴を張るのであります。水揚げでは木は一先づ川沿ひのなりに積まれ、後に記號に依つて識別し各自が各自の場所に積む



のであります。春木は一間二間といふやうに算へます。一間とは幅五尺なれば十尺の高さで、經一尺の木は五十本で一間の譯であります。茲で市場としての相場が決定し各地方に販賣されて行くのであります。

## 第六山の樹目

〔一〕

### 九三 ブナ (山樺)

深山の中に最も多い木で、幹の太さも徑四五尺のものがさらにあります。角材や板にすることもありますが、餘り賞用されません。徑五六寸から一尺五六寸までのものが春木(薪)として伐り出されます。雜木木炭の原料となります。最近は鐵道の枕木として採用されてゐます。二三月の頃は一番切り易いやうです。雪解頃、若芽を包んだ、ふくらんだ鱗片が實に美しい林相を呈します。

### 九四 イ タ ヤ

口矢に作つたり、割木にしたり柄の類にしたり、角材にしたり樁にしたり、用途は頗る廣く山の木のうちで最も賞用されるものであります。春木としても、最も朽ち難く、従つて高價であります。



す。就中樅木の材としては最適でありまして、楢と共に馬樅にも用ゐられてゐますが、ブナ等のやうに群生してゐず、随つて數が多くありません。ブナの如く高く伸びる木ではありませんが、普通徑二尺以上の太い木は見かけませんから巨大木はないやうであります。

## 九五 カン バ

角材とも板ともしますが下品とされてゐます。樅の材になつて相當使用されます。春木としては厚い皮の爲め、乾燥の程度が低く、河を流れる時は常に沈み勝で厄介がられてゐますが、薪としての質はイタヤに亞ぐもので賞用されてゐます。用途頗る廣い木であります。外皮は樺皮細工で天下周知のこと、内皮の厚い皮では「カバ箕」や塵取の類をも農家では作ります。矢張り二尺位より太い木は滅多に見當りません。飛木であつて群落はありません。

## 九六 ナ ラ

五尺六尺の太い樹がザラにあります。厚い板は橋などに賞用されます。水に強く保つと共に堅質だからであります。角材や板としては下品とされますが、枕木などには重用されるやうであります。

樅の材としてはイタヤと並び稱される程で、用途は頗る廣くあります。流し春木としては少しく價が落ちますが、里の薪としては隨一でカナキと稱されます。木炭界では楢木炭と言はれ、斷然王者の觀があります。里山で既に群落を見せてゐますが、奥山に入つても亦巨木群を形成して附近を威壓する觀があります。

## 九七 ク リ

里山の王者となつて三尺位の巨木群をなしてゐることもありますが、奥山には稀にしか見當りません。赤松程度の山入りで、里近い山に美しい林相美を呈してゐます。角材として建築界に重きをなしてゐます。其他板ともなりますが、水及雨露に強いので枕木及普請材となります。用途廣く建築界では雑木類の王者の觀があります。木炭界では松と共に鍛冶炭の權威を持つてゐます。

## 九八 カ ッ ラ

山の巨木群の中に光つてゐます。板としての特質は愛玩用として、木目が美しいからであります。徑五六尺のものを見ることは稀ではありません。角材建築材ともなります。流し春木としても上等



の部であります。

九九 ト

チ

山の巨木の一つで六尺以上のものがあります。板材角材、白材ともなり、木目の美しいものはカツラと共に高價であります。農家の餅搗くウスは大抵このトチから取ります。流し春木としても、普通薪としても最も下品とされます。トチの群落はナラ・ブナ程ではないが数の多い木であります。風のナグ、山のオダマイに立つてゐる木であります。

一〇〇 マンダ

里の山から生へてゐて、山奥の頂上近い所には巨木群を形成してゐます。三四尺のものは普通にあります。カツラ等のやうに根元から若木を叢生してゐることもあります。この木の若木の皮は編物織物に利用され重用されてゐて、蓑やロープともなつてゐます。

この木は下駄材又は厚目の板としてサイパン（俎）としては柳と共に賞用されてゐます。

一〇一 コンゴウ

細い幹は鎌柄などに使はれます。太い木を見ることがなく二尺以下のものばかりでありました。流し春木としては上等の部であつてイタヤと並び稱せられてゐました。多少叢林を作る形勢があります。建築材も取るやうですが餘り賞用されません。

一〇二 センノキ

時には巨木の類に入るやうな二尺以上の太い木のあることもあります。流し春木としては沈み勝で流れないので「ヌシ」といふアダ名をつけたりします。水には非常に強く、地質的前世期の木の化石はこのセンノキだと村の人人は信じてゐます。この化石を私達は「キイシ」と呼んでゐますが、キイシ（木石）はセンノキの化したものと傳へてゐます。若い木のトゲは「骨を見たい」と言ふ譬があつて、間違つて刺すことがあると非常に痛いものであります。下駄材や建築材として用途は廣いやうです。



## 一〇三 ハンノギヤツバ

山の濕地に群生してゐます。アサキの類で流し春木として伐り出す以外は雑木木炭になる位で、他の用途はないやうであります。之も巨木にはなりません。春木としても下品で従つて價も安くあります。

## 一〇四 ヤ ツ バ

山の澤などにあります。雑木木炭及流し春木と致します。稀に角材として建築に用ゐますが下品とされてゐます。赤味を帯びた材であります。普通二尺以下で太い木はありません。

## 一〇五 カ ダ ス ミ

流し春木としては、イタヤに次いで上等の部であります。盛岡イタヤの名稱を以てゐます。盛岡ではイタヤの眞の區別を鑑別出来ないで、似通つた木質のものを皆イタヤと稱して高く賣込んでゐたと言ふ故事から斯く呼んでゐました。太い木はなく一尺内外の木が多いやうでした、筏棹はカ

タスミの棹と稱され、重寶がられてゐました。

## 一〇六 ミ ズ キ

之も盛岡イタヤの一種であります。梢の赤い樹でマユギとも言はれます。小正月の飾りに、この木の枝を取つて来てマユ玉を付けるからマユギとも言ひませう。夏分などは切つた切株から赤い液を流し出してゐます。餘り太い木を見かけません、二尺以下のやうです。この木は里の山から奥山までありますが叢林を作つては居りません。

## 一〇七 ソ ネ ノ キ

盛岡イタヤの一種であります。流し春木としてはイタヤに並ぶ立派な薪なのであります。他の用途は餘りないやうであります。里の薪のカナキの一種であります。巨木となつてゐるのを見かけませんが、里の山から奥山まで分布してゐます。群生を見ることはありません。此木のひだがソネの名を冠してゐる所かと思はれます。



一〇八 ハ ナ ノ キ

盛岡イタヤの一種であり、且つ春木としてはイタヤと區別が出来難い程立派なものであります。ハナノキは一名モミヂとも言ひます。巨木はありませんが少しく群生の性質を有してゐるやうであります。用途は愛玩用の床柱以外は薪材以外にないやうであります。

一〇九 タ モ

巨木と見られる程のものもあります。アテダモ・ヌベラタモなど多く區別があります。擔棒てんびんを探ると強いと言はれてゐます。薪以外の用途は餘りないやうであります。強靱な木の一種であります。

一一〇 ツ キ

ツキとケヤキは全く異なると老人は主張してゐますが私達には分りません。共に里山近くあつて深山にあるのを見かけません。巨木に數へられる樹種で、三四尺のものがよくあり、群生の性質があります。臼材や板材や細工用材となり使用範圍が頗る廣く、建築用としても柱などに重寶がら

てゐます。

一一一 ヤ マ ガ

木が堅く重いので槌などや、臺木とすることがあります。里山に多い木で、深山には稀であります。赤く熟した實は食用となります。木の用途は主として細工用に使はれます。群生の性質はありません。且つ餘り太い木を見ることはありません。

一一二 ヤ ナ ギ

里から山に至るまである木であります。巨木と思はれる太い木もあります。群生の性質があり、濕地に多い木であります。太くなる柳は「ボリ／＼柳」と稱する種類で、下駄材・板材角材・細工用等頗る廣い範圍に使用される樹で、更に建築用としても重要されるやうであります。農家にあつては柳のサイパンを賞用してゐます。柳にはこの他にイヌクソ柳が太くなります。其他種類が澤山ありますが、多くは灌木類であります。帽子に作るカナガラは柳から取ると言はれます。



## 一一三 ヤ ス

群生叢林の性質を有し、濕地を好んで澤目などに繁茂し、巨木となつてゐるのも珍らしくありません。角材・板材・下駄材・細工用・建築用等多方面に賞用されてゐます。里山にはなく深山の澤目などに多くあります。軽く柔かく撚れが來ないので其用途もまた頗る廣くなつてゐます。薪用材としては聲價のあがらないこと夥しいものがあります。

## 一一四 ホ ウ ノ キ

里山にも深山にもある木であります。巨木といふ程の樹を見ませんが、仲々太い樹があります。頗る貴重な木で、膳板・板材・ヘラ・シヤクシ・小細工用材・柄類等の細工材・其他建築用角材をも取ることがあります。春木薪としても軽くて朽ちないので上等とされてゐます。多少群生の性質があるやうであります。

## 一一五 シ ヤ ク シ ギ

餘り太い木を見ません。深山にだけあつて里には稀であります。盛岡イタヤの一種で、薪としては上等の方ですが、シヤクシを作る以外用途はないやうに思はれます。

## 一一六 シ ラ カ バ

里山にも少しはありますが、深山の峯近いあたりには一齊林を作つてゐて、美しい林相を見せてゐます。薪炭用以外には用途を見ません。著しく群生の性質を有してゐますが、巨木のあつたのを見たことがありません。

山中に居て火を焚くに困難な場合、即ち凡ゆる木は濕氣を含んで、火が容易に焚物に移らない場合でも、白樺の外皮なれば容易に火を移すことが出來ると老人達から訓へられてゐたものです。火を焚き初めるには松の根の脂木や、白樺の皮が容易であることを常に注意されたものであります。

## 一一七 カ シ ワ

里の山の方に多くある木であります。カシワノキ或はカシラギと呼んでゐます。殆ど薪炭にだけ



使はれてゐるやうです。葉は食料を包むのに今でも使はれます。臺地などに群生の性質があり巨木になつてゐるものもあります。古代民衆と交渉深い樹と言はれます。

## 一一八 ク ヌ ギ

クヌギは殆ど里山近くにあるやうです、建築材料としては橋等に使はれます。またコバに割つて土摺臼の齒と致します。相當堅い木なので諸種の臺木にもなり薪炭としては上等の部であります。高く伸びる木で有名であり、徑二尺位のものも見えます。

## 一一九 ク ル ミ

里山から相當奥山の濕地に生へてゐます。建築材・小細工用・板材、等諸種に使用され桐に次ぐ賞翫用材質であります。場所に依つては群生をしてゐます。

## 一二〇 シ ラ キ

里の山から奥山まで分布してゐるやうです。下駄材・建築材・細工用木となりますが、薪炭とし

ては歓迎されません。巨木もたまに見えますが群生はないやうです。此木を家の建築に使用すると使ひ方に依つて不吉としてゐるやうであります。

## 一二一 ニ ガ キ

ニガキも里から相當奥山に分布してゐます。太い木は見當りませんので、小細工以外は薪炭となり、薪ではカナキ・カタキの類であつて賞用されます。

## 一二二 ド ロ ノ キ

里山から裾野にかけて分布してゐて、群生の性質があります。下駄材・建築材・細工用木などで諸種のものに使用されてゐます。餘り太い木を見ることはありません。

## 一二三 附 記

檜・杉・黒檜・松の類は餘り周知のことでありますから説明を加へません。屋敷の木をスエギ（据樹か）と申してゐますが、枝垂柳・銀杏・クルミ・サイカチ・檜をスエギとすると不吉だと申して



屋敷に植ゑない人があります。其他小灌木類及餘り高く伸びない山の木が多くあります。「白ツサ」や「赤ツサ」は其強韌な性質が昔の「アツサ弓材」ではないかと思はれますが、雑木喬木類の他は省略致します。

## 一二四 サルヲガセのこと

サルオガセは深山にだけあります。イタヤ・カエデ・ブナ・ハナノキ・コンゴウなどの古木に垂れ下つてゐて實に美しいものです。白く房々として少しく黄緑色を呈し、普通七八寸位であります。

猿が是を機に織るとの譬があり、女の子供にこれをほどかすとテンドがよくなると申して、女の子の玩弄物として山から土産として持つて來るのであります。細かく節がついてゐて、中に織維が通じてゐますから、無理に引かなければ切れない程であります。節と節との區間は白味を帯びてゐて、恰度黄緑色の白玉を連ねたやうで美事なものです。是が古木に附いてゐる有様は眞に美麗でありまして、山の奥なればこそ見られるものなのです。

古代の人々の服飾に使つた心持が想像せられるやうで面白いと思はれます。近い話は、宮中の御

即位大嘗祭のやうな大儀とか大祭とかには必ず出でて宮門の寺衛に任ずる小忌の公卿……其昔は蝦夷に依つて編成された佐伯部であつたと言ふ……に遺存する冠の左右に垂れる十二節の糸、この糸こそは最初サルヲガセであつたと言ふことは、一面に於て山と民俗を雄辯に物語つてゐる古俗の一端であります。蝦夷族は又山に狩獵する種族でもあつたらしく、深山の僅かな平坦な場所にも彼等が桃源の夢を食つたであらう生活の痕跡を、古土器の遺蹟に残存してある事實が抑も何を意味してゐませうか。化外の民は皆蝦夷として取扱はれて來た日本の歴史を、私達は更に記録を離れて民俗上から振返つて見るの必要に迫られてゐることを痛切に感ぜざるを得なくなりました。石器時代の遺蹟は吾々が定住に適しない程の山奥で點々として發見されて來ました事は何を語ることでありませう。

勇敢な蝦夷族が、日本の武門に關係深いことは周知の事實であります。民俗と山の關係は未だく、闡明さる可き多くの問題を提供してをります。

サルヲガセのことを一つ見て考へましても、山林に深山に出入するもの、早く言へば山に生活するものに依つて發見され、珍重され、それが裝飾として冠に追加へられるに至つた古代の習俗であります。この植物は乾かしても色の變化とか硬化とかを來さないこともこの植物に對する古代民



衆の意向の一端が窺はれるかも知れません。彼等は或時は房々と頭をサルラガセで飾り、ヒカゲノカツラで體を裝飾してゐたものでありませう。

### 一二五 纖維を取るもの

山野に自生して其皮の纖維が衣服の材料になるものにマンガ(シナノキ)の皮・アイコ(イラクサ)の皮・カラムシの皮などあります。綿わたの代用としてはオクソワダやコマチワダなどを使用したと言はれます。古代の頃陸奥國から京へ租税として納められた「狭布」はどんなものであつたか分りませんが、私達の地方の百年位前までの衣服は殆ど麻布で、自家製出にかかる、六七寸位の狭い帯用の麻布もあつた事が注意されます。

## 第七 川下げ木流し

### 一二六 カナガシ

山から川を利用して木を流し出して來ることを「カナガシ」と總稱してゐます。木流しの謂であります。この木流かみながしは春の雪解水を利用するか、秋の出水を利用するかします。春の水で洗はれた春木は朽ちないので、秋流しの春木より質がよいとされてゐます。春の雪解水を利用して流し出す春木は、途中で一旦「コマダ」に入れて、其所に積置き、乾燥せしめて秋に里まで流して來ます。この方は秋の頃に流し出すに困難な場合等少し流し出して置くのであつて、凡て木流しは秋の頃であります。春木なれば「春木流し」・「春木のカナガシ」・「春木のツブ流し」とも言ひます。

### 一二七 ドバ拂ひ

木を川に入れることを「ド入れ」と言つてゐます。又「打込まてこむ」とも言ひます。「ドイレ」とは



「ドバイレ」の意味でもありませうか。木を全部川入れして流し出した事を「ドバ拂ひした」と言ひます。「ドバ」とは其場所、即ち一旦置いた位置の名稱であります。

## 一二八 キジリカキ

「キジリ」とは木尻のことでありませう。川を流し出して来る最後の部分を言ひます。是は「キバナ」の對語であります。流してゐる木の最後から来る木流しの人々を「キジリカキ」と申します。木をカグ、木をカイて来る（動詞）は、鳶口とびで引いたり押ししたりする動作で、木を流して来ることであります。カク漕ぐの語源を聯想されます。「キジリ」は木の後端を意味する「キノシリ」とはこの場合少しく異なるかと思ひます。

## 一二九 キバナ

「キバナ」とは其流れてゐる一群の先端に流れ出してゐる木の總稱であります。ハナは先端を意味する語であるから、「水の出バナ」とか、「ハナ水」とかに使はれてゐる古語であります。木流にはこのキバナ役が是非あつて、川のヨレを直して進むのであります。

## 一三〇 セドトリ

「セド」は日本の古い語の一つであります。木流しには、この「セド外し役」は一の重い仕事となつてゐます。流れてゐる木は重なり合つて、流路を塞ぐことを「セドをくつた」と言ひ、これを都合よく取外すことを「セド外し」又は「セド取り」と言つてゐます。是で見るとセド瀬戸は、流れを塞ぐ狭い所のこととも考へられます。瀬を塞ぐ謂のセドでもありませうか。

## 一三一 ツツミ出し

山の小澤など、水が不足で木を流すに困難な場合などは、ツツミと言ふものを作つて流し出します。木材の澤出しの方法であります。水を溜めては其水の力で木を流す作業であつて、是を「ツツミ使ひ」と言ひます。ツツミを作ることをハグと言ひます。

澤目の狭くして、懐のある所を利用し、頑丈なワクを作つて、釣木つりぎを架け、それに丸太や角材を立て並べ、中央に口を構へてその口に板を横にし、ボウズといふので之を支へ、水を溜めては一度にどつと放す装置で、水は凄じい鳴動をしながらこの口から吐き出されるのであります。水も恰も



津浪のやうな勢ひで澤を押し流れて来るので、時には危険を伴ふこともありますので、之を放す場合は、それを豫防する意味で下流に向つて高く二三度叫び、そして放します。慰安の少ない山の生活には變化のある男性的な仕事なので愉快なものであります、白い泡立つた迸る水が、兩岸の樹木を震へさせ、地響を立てて行く有様は壯觀であります。

木材をツツミの水で流し出すことを「ツツミ出し」と言ひますが、勿論カナガシの一方法であります。小さいツツミなれば一日に數回、少しく大きなツツミになると一日一二回放します。寒中の作業は頗る苦しいものであります。殆ど頭から水を浴びることも屢ありました。水田灌溉用のツツミとは語は同じであつても、其用途は全く異なるのであります。

此のツツミを作るには、第一に地形の撰擇と、それ／＼使用範圍に依つて材木の選定、及其組立に至るまで特殊の技術を必要としますので、熟練した人の指圖に依つて作ります。材木を立て立てた其隙間には、クゴ草などを土の儘掘つて來て詰合せ、一分の隙間もないやうに塞ぎますので、水は少しも漏らないやうにします。

口を塞ぐ板は一方に穴を明けて藤蔓を結んでゐるので減多に流失する憂はありません。この板は幅も同じ、長さも同じでありますが、厚さは一方を厚く一方を薄くします。之は横に立てた場合其所に土を入れて水の漏を防ぐためであります。ボーズ即ち支へ柱とも言ふべきものには、上部を梁に縛りつけて置き放水した時流れないやうにします。又小ボーズは長く綱をつけてゐて放水の時、之を引倒しますので、其所の支へ柱が倒れると同時に、板は一時に兩方へ開く仕懸けであります。

### 一三二一 カラ及コマダ

春木(薪)を山の方から、段々其川に依つて流し出して來ますが、時には「コマダ」に入れて一旦支へて置く事があります。是は同じ川を流して來る他の組の春木と混合してはならない場合とか、雨のため洪水の恐れがあつて春木が流失する憂のある場合、或は水が不足で降雨増水を待つ時、又は一旦乾燥を必要とする時、斯うした場合途中で、その流し來つた木を一旦支へて置く場所を「コマダ」と申します。

「コマダ」は本流から分流して、其所に頑丈な装置を施してゐて、木を流し込み置き、適當な時機に、又本流に直ちに流し出す設備のもので、水量の調節は自由であり、且つ此所に流し込めば直ちに水を斷つて乾燥するのが本旨なのであります。コマダは小股で、流れの分岐してゐることです。



流木をここに流し込むことを「コマダ入れ」と稱してゐます。「馬立場のコマダ」・「砥山コマダ」・「荒澤コマダ」・「奇嶽コマダ」など諸所にこの装置をする場所があります。

## 一三三 ヤ ラ イ

コマダ入れをした木は、コマダの「ヤライ」と言ふ頑丈な支へ装置に依つて支へられます。最初「ワグ」を作つて、其上に釣木を渡し、其ツルギに長木を結び、長木に更に横木をとりつけて、水之力と木の壓力を支へるのであります。この「ヤライ」の装置は支へ防ぐ設備で、昔の刑場や陣場の矢來とは別の語であつたかとも思はれます。

## 一三四 木流し加勢

秋になつて木材を流し始める頃になると、川や水の都合で期せずして他の山の組と一緒にすることもあり、随つて人手が不足を來すので、「木流加勢」を頼んで來ます。何十人の人々が一緒に流すことは珍らしくありませんでした。是非なく木を混じてならない場合等はコマダに木を一時押へて置き、他の組の木を通らしてから又其後に立つて流して行くこともあります。山から里への間は

多く野宿を續けて來ます。

## 一三五 春 木 場

盛岡には中津川ばたに、雫石では御明神村に春木場の地名が残つてゐます。春木とは山から流し出して來る薪のことです。この薪を流して來ることを「春木流し」と言ひ、凡て山から木を流して來る所作を「河流し」と申します。「河流し」は又の名を「粒流し」とも言つて、バラ／＼に流し出して來ることの謂であります。この春木を流して來て陸に揚げる場所は即ち春木場であります。流して來た春木は一旦この春木場に積まれて、此所で相場が決定し、各地へ買ひ運ばれて行くのであります。其土地の流して來る薪の集積地で、或は薪の市場とも見る可き要衝の地點であります。山と川と村との樞要地點で、多くは其土地の町の外れなどにあります。この春木場から、陸は薪や馬車、更に下流は筏となつて運ばれて行きます。「小又」及「カラ」の一層完備伸展したのは春木場であつて、春木場は又「カラ」でもあります。

## 一三六 筏カキの話



イカダは其木材の種類に依つて、「春木筏」「材木筏」「タルキ筏」「スツボ筏」などと稱します。春木やスツボのやうな短尺ものの筏は、「横ガキ」と言ふに作り材木や長木の類は「縦ガキ」と致します。この筏を數へるには「一房」「二房」「三房」といふやうに唱へ、之に乗込む人数は、一房二人となつてゐて、一房半組合せなれば三人、二房連繋の時は四人となります。

筏の先登に乗つてゐるものは「ハナ乗り」と呼びます。

筏師の舵を取る權を「ウチガイ」とも言ひますが、この他に棹をも用ゐます。

筏を編むことを「カク」と言ひ、補助用の「ヨコダ」「コワリ」などの細木を用ゐて、藤蔓や針金で締めます。今日は鐵製の銀といふものを使ひますが、往昔は三四寸の串を作つて用ゐてゐたと言はれます。タルミのやうな長いものや、角材などには其一端に穴を明けて藤蔓で縛つてゐました。「ワク潰し」と稱する鉞は其専用でありました。

筏師の頭目を棟梁と言つてゐるやうです。筏の上には少し位の品物を乗せて運ぶことが出来るので、之を「ワニ」と稱してゐます。上荷の謂でありませう。

筏師を「ヨガダカキ」と言つてゐますが、年中川に浸つてゐるので、災難に遭つた話、辛苦話、珍談等、川の民俗と相俟つて様々の傳承をも遺してゐます。雫石から北上へ、北上から石巻へも流

し運んでゐたと言ひますから彼等の其昔の姿は、一の旅行者で、川に依る通交から、山國と海岸とは、今日吾等が想像する以上に、密接な關係を有してゐた事をも考へられます。

山が川と取結ぶ民俗、川が村里と取結ぶ民俗、川が海邊と取交す民俗、聽ては山國と海岸との通交は、鹽の如き生活必需品や、其他山對海岸民衆との聯繫は、相互の生活の或條件で以て出來てゐるのであつて、物々交換の事象のみが特に目立つ譯ではないのであります。

### 一三七 トロのこと

河川は未だ山間の村を通過してゐる時に見る現象で、即ち中流地帯の流にあることであります。川は瀬を形成して奔流し、一段下ると勿ち淵を作り、其淵から次の瀬頭までは靜かな流れを見せてゐます。瀬から次の瀬の間のゆるい流れを「トロ」と言ひます。早瀬があつて必ず淵があり、それが「トロ」となつて次の瀬に至るので、私の郷里の雫石川も、雫石町の南で一瀬一淵を作つて流れてゐます。その一瀬一淵には皆それ／＼口誦傳説を傳へてあります。葛根田落合・竹花淵・赤澤川落合・釜淵・マルコノ淵・堰口下・明神舟場・川戸尻・大石洞・赤岩淵・是等は皆續いてゐる一例でありまして、其所は皆淵があると共に又「トロ」もあります。筏師など長いトロに這入ると、筏



は流がゆるいので静かになりますから損じた所を修繕したり腰を下して煙草をふかしたりします。トロは下流に出るに従つて其距離は長くなります。トロの發音はトウロと聞えます。

### 一三八 河 流 れ 木

「カナガレ」とは流失木のことです。「カナガレが流れて来た」「カナガレを留める」「カナガレを集める」等と言ひます。

洪水などの時、コマダのヤライが切れて木材は流失し出すと、既に木主の圈内から離れて誰のものでも無いと言ふ意味でカナガレと言ひます。随つて下流でそれを川沿ひの地主が拾ひ集めることがあると、自然其地主の所有とされてゐました。亦地主であらうが、地主であるまいが、洪水となると皆川沿ひの村の人達は長い竿に木の鍵を結へて出て、流れて来る木材を寄せ留める風がありました。洪水に流れて来る木は誰のものでもない、引寄せて陸に上げた者の所有であるといふ觀念があつたもので、各戸に長い棹の鍵が一二本準備用意されてありました。此の流失木を「カナガレキ」と申します。最近には木主が廻つて来て骨折賃を支拂ひ、その木材を引取つて行きます。地主が流失木を發見すると小石を載せて一種の所有權の表示とします。

## 第八 山の工<sup>て</sup>作<sup>さ</sup>品<sup>び</sup>

### 一三九 荒日の仕事

山が荒れたりしますと、どうしても外に出て働くことが出来なことがあります。又永い冬の夜の徒然に雑談を交しながら、爐の火の光りを頼りにアデギを細工板とも削り臺ともして、種々家庭に必要な調度品を細工し、家に歸る時、之等のものを「徒歩<sup>ちほ</sup>荷」として持つて歸ります。一面是は山の土産でもあります。

この荒日の用意として、それ／＼細工用の材料キドリを準備して置くのです。キドリにするやうな良質の木は稀にしかありません。一見の眼識で其良否を決定することは、どうしても經驗の深い老練の人に叶ひません。私達は不用意に真似て伐つて失敗することが多くあります。檜など節合と節合や、又はアテの部分を除けてキドリとして取つて來ますので老練の人程良材を識別するに達者なのであります。山の荒日には斯うして雑談を交し、種々の家の用具を作つてゐるのであります。



## 一四〇 山キドリ

キドリとは山で木材をほぼ各其用途に應じて、大體の形に切つて來ることあります。樫キドリ・白キドリのやうな長いキドリ太いキドリもあれば、箸や串のやうな小さい木取りもあります。或は粗材採取の意と譯しても宜しいでせうか、別に「山ドリ」とも稱します。「山採りの儘だ」と言ふこともあります。未成品は悉くキドリなのでありますから未成品と譯してもよいことがあります。一體に農家では生活の資源用具を山林に仰ぐ事が多く、それがまた山村民の自然の姿でもあり、一の古俗でもありますので、多くの場合この農閑期とも謂ふ可き冬の雪上で用意準備して置くのであります。

木摺きじろし白・白・杵・はんぞ・雪篋・へウ・杓子・柄類・くさだけ・はし・くし・櫛・歛臺・おひき  
 いだ・コバ類・楔・下駄・其他の多くの農家生活必需品の材料は悉くキドリとして山から運び出されてゐるのであります。今日は商賣人がありますので昔のやうではありません。

## 一四一 トギタラ

山小舎の夜仕事や、荒日の日などに、シラクチ蔓の握り太の良質のものを取つて來て、家庭用のトギタラ(今のタワシ)をも作りました。五六寸に切つて是を湯に入れて煮た後、一端を叩いて其纖維を細かく分けザンザラにしたものであります。一端は紐をつけて吊す様に一孔を明けてゐます。是を五六づつ編んで乾かし、里へ來る時の徒歩かちか荷としました。

シラクチは彌猴桃サルナシとも言ふさうです。

## 一四二 山の箒

山小舎ではまたこのシラクチで箒をも作つて小舎内で使用してゐました。作り方はトギタラと變りません、唯其毛の方を長く打出して、箒のやうに偏平に編むだけでありました。

## 一四三 シラクチヒキ

太指位の良質のシラクチを一旦煮て、それを適度に裂き、上手にしごくことをシラクチを引くと言ひます。是はカンジを縛る時など使ふ紐で、極めて強靱であり伸縮しないので貴重とされてゐました。これで以てカンジキを縛ることをツマイルと申してゐます。



## 一四四 へ ラ

篋は鍋に使ふものの方で飯へラのことです。是は多くイタヤで作ります。夜仕事や荒日の手細工に削り出します。小舎の中で乾燥したものを家に歸る時持つて歸ります。賣品とはしません。

へらキドリはイタヤの良質の材から取り、是を板に割つて段々に削つて仕上げます。鉤などは用ゐませんでした。

是と形は同じでも少しく大きく作つて、味噌搗きへらに使用したり、馬の煮物を掻き廻す用途のものもあります。

## 一四五 杓 子

厚朴や杓子木で作りますが、近來は種々の木を使用してゐます。山小舎では其目的も場所も篋と變りません。技術は少しく面倒でありまして仲々使ひ易いやうには出来ません。近年世上に有名だつた「雫石木杓子」は一職業として分離して行つた一例かと思ひます。

## 一四六 箸 及 串

箸や串は矢張り夜仕事としてか或は荒日に拵へます。材料は俗に言ふ南部檜で、香味の芳んばしい黄色味を帯びた木であります。キドリを七寸位に取つて板に割り、それを柁に割つて行きます。箸を作り出すことをカクと言ひます。串も同じく「串をカク」と申してゐました。一本／＼缺くからでありませうか。串は一尺位であります。俗に「箸は八寸串は九寸」と言つてゐますが、何の意味もない言葉の遊戯かと思はれます。

檜箸も檜串も「長生き」又は「無病息災」と傳へてゐまして大變に重寶がられてゐます。檜山から來る水を呑んでゐると色が白くなると言ひ、其村には美人が多いと傳へてゐます程で、檜に對して特別な氣持を懷いてゐるやうであります。檜は群生であつて、風當りの地に大叢林をなしてゐるやうであります。南部檜はその美麗な材質と、特異な芳香とは人氣を得るの原因になつてゐるかと思へます。

## 一四七 コ バ



屋根の葺桁を、コバとも言ひます。従つて桁割職をもコバワケとも稱してゐます。

亦、桶おけの類の桁目の板をもコバと申します。オケ擔ぎ桶・ハンギリ大小二三種あり・タメ二斗ため・米糠だめ・コガ漬物こが・酒こが・タライ馬たらひ・ハチ洗ひばち・てうづばち・フンゴロバシ五升ふんごろばし・タル味増こが・足たらひ・粉ばち・オカワ便器・スフロ掘えふ・タンガ大たん・一升・二升・三升・五升・キツすしぎつ・ドガエス三尺どがへす・小便たんが擔ぎたんが・是等は皆キドリとして取つて來たコバに依つて作られるユヒモノの名稱であります。

木の削り屑の木片をコッパともキコバとも言ひ、削りコッパ、鉞コッパなどと言ひますから、コバとコッパとは勿論聯繫してゐることでありませう。木端でありませうか。木屑切り屑の方なれば「キツマ」と稱して區別してゐます。鉞屑は「カナガラ」では是も別であります。

桶キドリと言へば材料となる板全體のことで、コバと言へばその一枚／＼の板を指して言つてゐることでもあります。

## 一四八 ハンゾ

ハンゾは又の名をホケアイとも稱します。木をくりぬいて造つた大きな木鉢で、臼をほる人はよく是を作ります。米の粉とか蕎麥粉をねる時、即ちハタキ餅などを作る時など主として使用致します。

ホケアイは帆立貝から得た帆貝か、それとも「掘カイ」かよく分りません。又皿形さらがたちの鉢であつて、皿は本來は貝から考案されたのでせうから、ホリ貝とも思へます。ハンゾの意味はよく分りません。原料は多く栃の木で、太い幹を二尺位の長さに伐り、厚板としてそれをくりとるか、弦に割つてそれを掘るかします。經は一尺五寸位から二尺位のものを使用してゐます。私の家などには五個もあります。

山で大體のキドリをして、里に持つて下り後で仕上げすることもあります。農家の生活用具炊事道具として相當貴重なものの一つとなつてゐます。ハンゾ細工は素人では使ひ易いやうに細工は出來ないと言はれてゐます。

## 一四九 カヨ

木鉢の小さいもの、手に持つて枡のやうに米とか粉を酌り上げる器を「カヨ」と言ひます。カヨウと聞えます。精米とか、粉を臼から取別けたりする時に使用する枡の如きものの代用するものがあります。カヨの語義は分りません。



## 一五〇 キジルス

キジルスは木摺臼であります。私達の地方に土摺臼の使用されましたのは多くは明治になつてからとのことであります。その前は悉くこのキジルスのみを使用してゐたのであります。土摺臼の使用は木摺臼からの一進歩したものでありませう。今も猶ほ使用しないこの木摺臼を保存してゐる家もあります。二人向ひ合つて互に引いて靱を摺ることも一人であることもあるとのことです。

現在使用してゐる所は南島の西表島や石垣島ださうですが、昔は一樣に日本全国で使つたものでありませう。南島では「前曳臼」と稱してゐるさうです。キジルスも亦山からキドリとしてとつて來ます。

木摺臼も今日から見れば、寔に幼稚な農具でありますけれども、比較的永い間農民と親んで來たものであります。随つて全く使用する事のない現在でも、昔懐かしい名残りとして農家の物置に轉つてゐる事と存じます。

溝目が磨滅すると、「目立て」と稱しまるのみ圓鑿をもつて目を立てた話を老人共はして居ります。材料は松などのやうであります。

## 一五一 臼のとり方

臼の種類には、「ドウシ」・「クビリウシ」の二種があります。材料はケヤキ・ツキ等が賞用されますが、栃・松・イタヤの臼もあります。臼キドリは一尺八寸にとり、仕上り一尺七寸と言はれます。之は高さで、經がクビリ臼なれば一尺四寸から二尺二三寸まで、ドウシの方は一尺七八寸から二尺五六寸まであります。

くり掘りの形は「卵ぼり」「みかん掘り」などその底部に向つてこの刻方ほりかたに依つて唱へてゐます。ウシキワリと稱するもので刻ほります。

クビリウシの方は主として餅など搗くとか精米に用ゐ、ドウシは精粉や、其他、力の入るものを搗くのに用ゐてゐたやうであります。

杵はキギと唱へ、材料はイタヤ・カンバ・等で製し、中央を持握つて使用する「テキギ」と柄を握つて振冠つて使用する「打うちキギ」とにわかれてゐます。

## 一五二 山 オ シ キ



ヤマオシキは膳の一種であります。神前の三寶の臺のないものと思へば間違ひありません。大敷や折敷の文字を宛ててゐます。檜や杉の枯れたエグイから薄板にとつて膳板と致します。之を「ゼンパン取り」と私達は稱んでゐました。

アヲキ山のエグイを擇んでこの膳板をとることは、アマは皆腐つて中身の強い所ばかり残つてゐるから丈夫でもあり、膳に仕上つてからも燃<sup>ホ</sup>の出来ない特質があり、木の目に縮目、又は玉目など板として愛玩する點が多く、形が變ぜず光澤が出来ることなど、又廢物利用の意味も含まれてゐたからであります。

斯うした膳板も上等の部は高價に他方へも出たことでせうし、普通ものは曲物の椽<sup>ウミ</sup>を入れてあの粗末なオシキ膳として吾々農家に入つてゐたことと思はれます。

藩政の頃橋場村指物師御禮錢、大宿村指物師御禮錢といふことが記録に見えてゐますが、實際の指物類はどんなものであつたか詳かではありませんが、或はオシキ膳の膳板木挽もその一だつたかも知れません。是も山林の歴史の一つに算へてもよろしいであります。

ヤマオシキには白木が多くありましたが、中には、澁柿や紅<sup>ベニ</sup>がらで粗末に塗つたものもありました。粗末にぬり立てることを「スパク」と申します。締りあらしめるための一種の防腐装置との意

味であります。

椽の曲物は樺の皮で縫ひ合はしたもので、竹釘で止めてあつたと記憶します。山小舎では、板を割つて粗末に削り、膳と稱して使用してゐますから、膳の發達の経路も考へさせられます。

### 一五三 鍬 臺 カ キ

鍬臺キドリは堅雪をわたつて伐りに歩いたものであります。此の鍬臺のキドリ取りのことを「クワンダニイ抜き」と申してゐたものです。材料は里山だと栗の木を枝を取ることありますが、多くは山奥なのでから厚朴の枝を取ります。雪の上の山出しが濟んだ頃、最早や里下りをしようとしてゐる頃に鍬臺を取りに山から山へ亘つて歩くこともありました。其頃は山の閑期ともなるからであります。

鍬臺キドリは仲々無いものであります。随つて老練の人は申分ないものを取つて來ますが、吾々若輩共はどうして缺點だらけのキドリより見付け得ないで笑はれたものです。幹と枝が共に眞直に伸び、正三角形のものを最良とされてゐます。



## 一五四 三本鋤ズリ

今でこそ馬耕ともなり随つて土を起すにも馬を使ひますが、最近まで三本鋤で私達は自ら耕耘してゐました。百姓仕事でもこの仕事は最も骨の折れる荒仕事とされ、午前中を働き午後は悉く休んでゐるのが一般の風習でありました。所謂「田打つ」のことで、何人役と言ふのはそれから起つてゐることです。

この一人役（一人打）を済ませば後は休むので、仕事は男性的で愉快でありました。私達の若年頃まで部落では「ユヒ田打つ」と申して今日は甲・明日は乙・次は丙と言つた具合に順々其家の田を耕して廻る習慣があり、弱い者や負けた者は皆の三本鋤を罰として洗ふと言ふやうなこともありました。一番先きに出かした者から段々次のものを助けて、最後のものの田には負けたものの標識として土丘を積むこともありました。「デアアア丘」と申します。

この三本鋤の柄を「三本鋤ズリ」と申し、山から冬に取つて來るのです。良質の厚朴の太くない經五六寸のものから割つて削つて取つて來ます。長さは五尺位のキドリであります。ユヒ田打をしては勝つたものから順序に並び濁酒を呑んでゐたのは古風でありました。

## 一五五 オヒキ板とり

オヒキダは緒引板でありませう。麻畠をオツボと言ひ、麻穀をオガラと言ひ、粗皮屑をオクソと言ひますから、オは、正しくは麻糸の意でありませう。麻糸の粗皮を取り臺をオヒキダと言ひます。

材料は南部檜の最良材で作ります。長さ一尺二三寸で普通四寸角位であります。

オヒキダに麻皮をのせ、左の手で引きながら右手のオヒコを少しく押して粗皮を取り去るので現在猶ほ旺んに使はれてゐます。婦人一人に一挺づつ持つてゐます。木の良質のもの程よい糸が引かれる譯で、五年に一度位大工に鉋をかけて貰ひます。婦人一生かかつて一寸とも減らないでせうから、一個のオヒキダの生命は母から娘へと傳つて驚く程の壽命があります。

嫁入道具ではありませんが、大抵實家から婚家へ持參してゐるやうです。山からオヒキダのキドリを吟味することは以上で分りませう。

## 一五六 クサ竹割り



撚つた麻糸をヲマキに巻き取る際、其の纏れを防ぐ意味から間々に「ものさし」のやうな細木を挟みます。是をクサダケと申します。

材料は南部檜で、良材を細く薄く割つて削つたものであります。幅は五六分。長さ一尺五寸位もありませんか。

クサダケは楔び竹でありませう、元來は竹であつた事が分ります。荒日とか夜の細工であつて、共に山から婦人への土産となる譯です。

### 一五七 下駄も手細工

下駄もまた山が荒れたり、永い夜の徒然な仕事として作つて來ました。下駄を作ることは櫛などと同じやうにウツと言ひ、「下駄うち」等と言ひます。材料はヤシ・樺朴・胡桃・栓木などでありました。

此の自家用下駄の製作も、藩政時代になると段々地方色が表はれて來て、其特産地が出現して來たやうであります。そして山林に近く、比較的良質のキドリを得られる地方では、技術も他の地方より勝れてゐて、次第に名聲を博し、武士町人の嗜好にも投じて多量製出するやうにもなつたやう

であります。雫石地方の小赤澤からは近年まで小赤澤下駄の名を以て下駄を産してゐました。元來は山仕事の副業でもあり、商品として産出したのではなかつたため、今は識るものが少なくなつたが、今日土俗界に一特徴ある「ハシバ下駄」も亦其名残りのやうであります。

此地方には技術者が多かつたと見え、曲物指物師があつて、曲物をもやり、彼の膳板どんばんの如きものも出たのであります。

最近迄下駄商は軒を並べて、下駄類を商品として販賣すると言ふことは無く、皆自家自給主義で、私達も手作の下駄に「巻緒まきすぢ」位が最上としてゐました。黒檜の柾目など特に選んで下駄に作り盛岡などに土産としてゐた風もあります。

マゲシの家號や地名の残つてゐるのは曲物師指物師の居住したものかも知れません。

### 一五八 キドリ割り

桶樽の類を總稱して「ユヒモノ」と稱しますが、このユヒモノのコバ即ち柾に割る板をとること

が、又キドリ割りでもあるのです。ユヒモノのキドリは悉く青木あをきを使用します。檜・杉・黒檜・ひば・などであります。年中季節を



擇ばず何時でもキドリを割つてゐるやうであります。専門とするのは桶屋の類であります。農民も亦自家用のものを餘暇のあつた場合取つて参ります。

## 一五九 く り 舟

くり舟は單に「フネ」とのみ言つてゐて正しい名稱は分りません。私の家にも二つあります。長さ五尺五六寸幅一尺七八寸深さ一尺四五寸許りのもので、一方に把手があります。材料は栃かと思ひます。このくり舟は蕨の根の澱粉を取る時使用したもので、矢張り山の中から良質の太い木を發見して作つたものであります。東北は饑饉が多くあつたので、山村の人々は葛や蕨の根から澱粉を取つて食料としたのです。

## 第九 雪の種々相

## 一六〇 雪 と 村

一頃美しかつた紅葉は、段々嶽から散り初めて、麓の村にも秋風が身にしむやうになると、薄紫色をした雲が、山を舐めるやうにわたつて來ます。村の人々は晩秋の空が日に七度變化すると傳へてゐる通り、この頃の天氣具合は眞に變調子で、時折りバラ／＼と雨が降つたり、雲を交へたりして、遠山の峯には白く雪が積つて來ます。里は「秋じまい」や冬籠りの仕度に忙しく山に入らうとするヤマド達は、それ／＼小舎がけを始めてゐる期節で、村の人の口々に、

「山は雪降だ」

「雪雲だから寒いナ」

の會話の聞かれる頃であります。

岩手山に三たび雪が降れば、其次には村まで降ると言ひ傳へられて來てゐる私達の里は、冬の装



ひをこらして雪を待つのであります。

幾度か嶽に降雪があつて、徐ろに村へ雪が襲ふて來ることもあれば、餘り前觸なしに一度にとつと里を埋めて人々を手甲づらかすこともありましたが。未だ萬山紅葉ならざるに、一面に雪を以て里を埋めることも稀にはありますので、之を「青山へ雪が降つた」と言ひ、秋早く青山を雪が襲ふことは、其後久しく雪の降らない前兆とされてゐました。こんな年は雪が薄く、年を越して春めき立つてから多く積雪を催すこともあります。

青山に雪が降つて根雪になつた例は昔からないと言はれてゐまして、ネユキは矢張り自然の季節に随つて、寒冷の候となり、地面が凍結してからでなければ出來ませんでした。ネユキとは降つた雪が地面に凍みついて、冬の積雪の層の土臺となる初雪を言ふことで、雪層の親雪のことを稱します。

○

俺もなりたい

オヤマの雪に

解けて流れる

色の水。

○

崇高な觀念を與へる雪は、矢張り秋の末に見る遠山峯に降つた雪であり、美觀をそそる雪は二月下りの陽光に映えて黄金色に光を反影する時であり、詩的の感興を起すのは大雪の後の鈍重な頃合ひであり、鋭利人を刺すやうな冴えた悪魔的な考へには月夜の雪景色が格構と考へられますのに、雪の國としての雪の民謡がないのは不思議の一つかも知れません。

吹雪の夜の凄じい光景には、爐邊の物語りとしての狼の話など雪國文學に相應しいものなどが傳へられてゐるにも拘らず、雪の民謡界は到つて寂しいものであります。

雪の多量に降つた年、積雪の多い歳、は概して豊年だと傳へられ、是に反して雪の少ない年、積雪の薄いときは豊年で無いと言はれ、寒中雪の上に雨が降ると夏に虫類(害虫)が少なく、冬暖かであれば夏に虫類が多いと言ひます。寒中の雨が降つて凍ればの意味でせう。斯様に、よしや雪の民謡は少なくとも、雪の傳承學は生活資源ともなつてゐますから自ら慰むべきでもありませうか。



顛落し道であります。雪路の悪いこと、即ち一步一步上つたり下つたりして顛を缺くやうな路、雪の山村の片足落しの路を形容した語であります。アグはおとがひのこと、あごのことでもあります。アギタマは其下部、咽喉に偏つた方、齒のつけ根をアグとも言ひますから下顎の落ちるやうな悪い雪路のことでもあります。私達山間の冬の雪路は、皆この悪い路で、郵便配達夫の難儀する顛落し路なのであります。

一六二一 雪で豫測すること

雪の多く降つた年は豊年である。

雪の少ない年は不作の恐れがある。

赤い雪が降ると其年は産が荒い。(難産の意)

寒中に雨が降ると其年は虫は少ない。

青山に雪が降ると一般に雪は晩く来る。

寒中暖いと虫が多い。

春早く雪は消えるとハテ雪が来る。

春ハテがすると苗立が悪い。

一六二二 雪層のこと

雪は、幾十回となく降りますから、其の積雪は勢ひ様々な層を成してゐます。然し積層を掘割つて見ますと、大雪で澤山降つた場合の雪層のみ著しく知られて、僅か降つた時の雪層は殆ど見分け難いことがあります。

この雪層を私達は、大體三つに區分してゐました。「サネ雪」、「シトリ雪」、「モロ雪」がそれぞれあります。今此の雪の種類を少し書いて見ます。

一六四 サネ雪

サネ雪とは蓋し核雪の謂でありませう。積雪の部分でも、最下層の地面に接した方は、著しく堅くなつてゐて、最早や雪としての原形を失ひ、小さい氷粒の凝集を形成してゐますが、是をサネ雪と申します。山の作業には餘り難有くない方の雪で、日光に當れば解け易く、其癖一旦碎くと締りがなく、ざく／＼してゐるので履物を傷め易く、爲に嫌はれるやうな傾向があります。



## 一六五 シトリ雪

シトリ雪とはサネ雪の上層にある雪層を言ひます。この中間層の雪は最も凝集力が強く、山の作業に適した雪とも言へませう。雪上の橇道を作るにも、切取りするにも締りがあつて使用に適つてゐるので喜ばれる雪であります。然しシトリ雪はこの中間層の占有名ではなく、日光の直射を受けて溶解した水分は積雪層に浸潤するとか、或は雨の爲に斯くなる現象とかで、しよ濕り氣のある雪の總稱と見て差支ないでせう。里で雪合戦をしたり、雪塊を押轉したりする雪は皆シトリ雪と見て差支ありません。「シトリ」とは滲透作用の浸み通る意であらうと思ひます。

## 一六六 モロ雪

モロ雪とは、普通最上層の降り立ての雪などを稱してゐます。降つて間も無い雪ですから、非常に脆く、山の作業に甚だ迷惑至極の雪であります。ワシとなつて滑走する雪もこの層であり、樹木の枝に附着してゐて時々飛び降りるのも是、風が立てばハシラギ雪となつて山を包み走るのも是、雪路を塞ぎ小舎を埋めるのもこの雪なのであります。モロ雪もまた締り氣が薄く、非常に脆いから

の名稱と思はれます。降り立ての雪を歩いて來ることを、「モロ雪を漕いで來た」などと言ひます。其他にも猶ほありませうが、只今氣のつく二三を書いて見ますと、次のものがあります。

## 一六七 アラネ雪

是は霰となつて降つた雪のことでもあり、又降る雪の一の名でもあります。大雪の際などは寧ろこの霰雪とも見える雪は、前に並んで歩いて行く人が見えぬ程降ることがあります。私達の地方ではアラネをアラネと言ひます。

## 一六八 ハシラギ雪

是は乾燥した雪、即ち濕氣が薄くて締りの無い雪を言ひます。最上層のモロ雪は風などに吹き立てられて、サク／＼となつてゐる現象又は寒氣厳しくして上層の雪のカサ／＼に軽く乾いてゐる有様を稱します。大自然を席捲してしまふかとさへ思はれる程の猛烈な吹雪には、一層の雪は皆悉くハシラいでゐるのでから始末におへません。ハシラギ雪の場合は雪は粉末状態になつてゐます。



## 一六九 ア ワ 雪

是は大雪降りの時などに言ひますから、降り方の形容とも思へますが、雪は細かいアラレ状となつて散々降り積る場合などに「アワ雪はおとし降りだ」とも言ひますから、粟粒状の雪との意味なのでせう。大雪降りて、一時に三尺も五尺も降り積る場合は大方このアワ雪であります。

## 一七〇 オ ト シ 降り

アワ雪などが、二日も三日も小止みなく降り続けることを「オトシ降りとも唱へます」是は落すやうに降り積るの意味かと思ひます。然しながら老人達は「年取り(年越の意)は来るからおとし降りなのだ」とも言つておました。或は「お年降り」かも知れません。只斯うした降り方は何時頃と決つてゐないにしても、オトシプリの名稱は年越行事と連鎖のあつた遺名であつたかを一應考へて見る必要があります。雪と天、里と山、人と神、何故年越近くになると御年降りがあるとするかを疑ひます。

## 一七一 ウ バ 雪

高い天から、ひらくと降りて来る大きな雪片、それをウバ雪と言つてゐます。是は里で子供達の唱詞ともなつてゐます。秋の終り、未だ里には雪の珍らしい頃、子供等はこの雪片を見て歡び騒ぐことは何處も同じでせう。ウバは目立つて大きい物に對して使はれることがあります。「ウバ杉」などがそれであります。

## 一七二 ハ テ 雪

ハテ雪とは、春晩く降る雪を稱して斯く呼びます。彼岸過ぎになつて、里には消え残りの雪も寡くなつた頃、再びどつと雪であたり一面を埋めてしまふ現象、これを「ハテがした」と言ひ、その雪を「ハテ雪」と呼ぶのです。大自然の氣象は春を喚び、季節は轉換して、樹木の芽が一樣にふくらみ始める頃になると、山の雪もどん／＼消えて行き、時には山の作業に思はざる支障を來すこともままあります。こんな時は春のハテ雪は意外の助力者となることもあれば、或は又、春の雪は雨を伴ひ易いので非常な失敗を招くこともあるので、悲喜交々の感慨に打たれることがあります。



この頃は好天が続いてゐるので、時に依つては急に氣壓の變化を起し、それは雪を齎すことがありますので、一般からはこの頃の積雪は厄介なものとされてゐます。

山では固い雪の上に、このハテがすると、「イレ崩れ」や「ワシ滑り」がありますので危険とされてゐます。山の雪の害はこの大ハテ雪とか、大雪に一番多く起りますので、ハテに對しては十分警戒しなければなりません。

雪の早く消えた年は春のハテ雪が來るとされてゐます。又雪の非常に薄い年もハテ雪が來ると言はれてゐます。そんな年は大體間違ひなく降ります。春のハテ雪は、半分霰になつてゐるので、衣服に浸み易く、氣持の悪いものです。

### 一七三 堅 雪

二月下り彼岸過ぎになつて、毎日々々御天氣が続きますと、所謂「カダ雪」が出來ます。この頃は一年中での好天氣続きですから、雪は日光の直射を受けて厚さを少なくし、段々氷粒の層を作つて行くので茲に堅雪の世界が現出するのです。この頃は雪の國の冬の黄金時代で、山小舎生活に於ても、その作業の最高潮期であります。雪は春の暖氣に觸れて融解し、上層も下層も一樣にサネ雪

の形狀を呈して來て、それが夜間の冷氣に依つて著しく固くなるので、この頃に見る嶽の山々は、太陽の光線をまばゆく反射して、實に美しい光景を呈することがあります。殊に夕陽の峯々に映へる美しさは、一齊林の雜木の梢に對照して、山國ならでは見られぬ現象であります。

里では、機織りの全盛で箆梭の音、子供等は凧揚に興する季節であります。

山ではこのカダ雪を利用して、伐採した木の小集めをしたり、斜面からそれ等の木材を落し運んだり、山樞に依つて木材を運搬したりします。兎に角普通なれば達し得られない遠距離の場所にも出向いてその作業に従事することも出來ます。

このカダ雪の全盛期には、朝の寒氣の烈しい時分では木のカンジキではその爪が立たない事もあります。杣山の生活にあつては、この機を外さず伐採してある木材のオドシを行ひます。又獵師など旺んに山に入り込む時期のやうでもあります。一年中の最も好日和の續く頃で、山の雪の上に生活してゐる私達は激烈な紫外光線と、雪から來る放射光線の爲に、十中の九人迄は、眼を傷めて苦しむ時期なのです。夜は小舎の煤煙りで目を使い、晝間は強烈な反射光線に晒されるので、さらになくとも悩んでゐる眼の苦しみは、一層苦しまねばなりません。カダ雪の表面は、キラ／＼と太陽の光線を享けて光を反射してゐる頃でも、里の方では元氣な兒童の世界となつてゐます。



かだ雪かんと

しも雪しんこ

しんこの寺サ

あづきばとは止つて

あづきアザクザク

豆コアコロコロ。

是は私達の郷里で歌ふ童謡で、雪國に相應しい少年民謡であります。

### 一七四 吹雪ダナ

強烈な凄じい大吹雪の現象は、雪の國ならではの見られぬ光景であります。それと共に山懐や、風の陰に當る部分には、大きな吹溜りが出来ますが、この雪の吹溜りを「フキダナ」と言つてゐます。このフキダナは大量の重積に耐え兼ねて、崩落することがあります。勿論かうした大きな吹溜りのある下方に小舎作りすることも、宿營地を取ること禁物とされてゐます。又其上を涉り歩くことも危険としなければなりません。時に依つては、イソ崩れ又は雪滑<sup>ハリス</sup>を起すこともあります。

### 一七五 イソつさ

大量の積雪は、其重量と壓力に耐え兼ねて下方に向つて轉落すること、これを「イソがつく」と申します。樹木も草も石も、地表の全てを大雪崩れと共に谷間に滑り墜るので、雪崩れ中の一番質の悪い、最も危険なものです。其音響を山合ひの谷間々々に反響させながら、實に凄じく、ゴウ／＼ドドド……と鳴り響くので、「又、何處かの山、イソはついたぞ」と私達は噂をしたものです。若し誤つてイソに押されると、あれ程頑丈な筈の山小舎も、一溜りもなく潰れてしまひます。人だつて助かりません、唯、私の記憶してゐる實話に、八人の小舎組のものが只一人奇蹟的に生きた事實があります。この大雪崩れは、土石や草木は却つて雪の上になり、雪は反對に下層となつて轉落するので、萬が一小舎が潰れず押流されたとしても、生命に別條なかつた人々も、二日三日と經る間に窒息して死ぬことがあります。

雷鳴のやうな音響と、地震のやうな地響を立てて崩落するこの大雪崩れは、多く春の雪解頃に起る現象で、雪の吹溜<sup>フキダナ</sup>は暖氣の雪解に依つて裂目を生じ、其重量と壓力で、弛緩してゐた斜面の表土を根こそぎ崩潰し去る最も質の悪い雪崩れなのであります。



場所は例年のイソピラに起ることもあれば、思ひがけない場所に起ることもあつて、彼岸過ぎの雪解頃の雨とか大雪の後に、時たま起る現象であつて油断がありません。

一七六

ワ

シ

ワシとは積雪の上を、降り立ての雪が崩れ墜ることなのです。上走かほしの意味でもありません。ワシの谷間へ滑り落ちる状態は、遠くから望んでみると、筏いかだが河を流れるやうで、極く静かに走つてゐる如く見えますが、實際側で見ると決して静かなものではなく、仲々速いものがあります。筆で實景を表現することは出来ませんが、シユウ／＼ドド……と谷間を響かせて轉落します。下の固い雪層の上を走りますから、樹木も草も石も交へることはないのですが、イソピラ等は雪のあつた度毎ワシが来るものと思へば間違ひありません。大雪の後は各所で屢々この雪崩がありまして、若い降立ての雪は、前からあつた堅緻な雪層と粘着することが出来ずにゐる所へ、上方から最初は僅かの雪塊を轉げ出しても、次第に太く擴くなつて、果ては柔かい新しい雪層をひた押しに押しこめとなるので、谷間に轉落する時は、白い雪煙を立ててゐる有様は一寸美しい壯觀であります。一度この斜面で、この流れて来る雪に襲はれると、忽ち足を捕はれて滑るので、随分危険でもあ

り生命に關する災難ともなります。ワシの起る時期も、一定はしてゐません。イソ崩れは二月以降に多く、ワシの起るのは冬の雪の降る時は何時もあると思つてをれば間違ひありません。降雪があつた後で天気であつたり、雨が降つたりするとよく起る現象であります。

上層の新らしい雪層は、下層の固着してゐる雪層と離落して走る有様、これを私達は「ワシは走る」と言ひ、この雪崩れで押し流される事を「ワシにさらわれる」と申してゐました。

この雪崩れに襲はれると、忽ち自分の立つてゐる雪諸共押流され、谷間に轉落して埋められる恐ろしい事から、こんな場合コナゲベラでもありませんと、このヘラを下の堅緻な雪層へ突刺して危険を除けます、又萬一雪に押されて埋もれても、この軽い木質は雪の上に容易に浮ぶとか、埋れた人間の手係りともなるのであります。この崩落の雪は高い所から滑走して來ますので、薄いやうに見えても非常に圧力が加つて來ますから、腰より下を埋められたとしても容易に出られないものなのです。

私なども時々小さいワシには襲はれましたが、私の知つてゐる範圍でも随分危険な目に逢つてゐる人々があります。ワシの走つた上部の方は扇のやうに下に擴つて墜ちた跡を示してゐます。



## 一七七 ユウギレ

春の二月下りの雪解け頃になつて、山の斜面が段々堅雪の徴候を呈して來ると、場所に依つては所々に龜裂を生じて來ます。殊に奥山の嶺近い積雪の厚い場所などは、暖氣の爲に其斜面に壓力の厚薄と、積雪重量の關係からして大きな深い龜裂が生ずるのであります。又吹雪の吹溜り、即ち私達の吹雪棚は、其重量と壓力に依つて深い裂目を生じて今にも離落しようとしてゐることがあります。この裂目は數尺の幅を爲し、幾十百間の長きに亘つて空隙を呈してゐることもあります。これを「ユウギレ」と申しますが、雪切れの意でもありませんか。深い溪谷などに生じたユウギレは、下は澤の水と地面の地温で底部から雪が消えるので、窓の形をなし、その内部は空洞になつてゐる事があります。このユウギレに墜落することは非常に危険で、一命を落す憂もありますので、高山の谷を渡る時は餘程の注意が肝腎であります。

## 一七八 大ザケの頃

今まで降つた山の雪は、春の暖い太陽の直射を受けて、一時に融解し出しますが、其頃になると、

澤の水は毎日量を増すと共に、次第に濁流となつて來ます。

山ではこの頃は「大ザケ」でありまして、雪は締りもなくこそ／＼と消えかかつて來て、始末に悪いこと夥しいのです。樹木の根側は段々圓く周圍の雪が消え、熊笹が所々から頭を擡げて參ります。今までの堅い雪も、日中になればゴソ／＼と脆く崩れて、雪上の歩行は困難を告げ、二尺も三尺も踏み通るので、とても長距離の歩行は覺束ないのであります。

この有様を、オウザケと言ひ、「春の大ザケ」「山の大ザケ」又は「雪ザケ」と呼びます。こんな折にはカンジキも殆どその用を爲さない有様で、實に厄介であります。サゲるとは蓋し脆くなつて締りのないこと、裂けて來る意、潰れて來るの意でもありませんか。山の作業の將に終了となる頃の多忙な時期であります。



## 第十 山がたの地名

## 一七九 カツチ山

奥山のことを「カツツ山」と言ひます。山の奥へ行つたと言ふことを「カツツ山へ行つた」と言ひます。澤の上流のことを指して呼ぶのに澤頭さわがしらとも言ひますが、「澤ガツツ」とも言ひます。カツツとはデトの對語で、奥の奥といふやうな意であります。カツツの語義はよく分りませんが、或は河内かわうちのやうに言つてゐる人もありますが、谷の上流ばかりでなしに奥を意味してゐて、山の深い奥をも意味してゐます。

## 一八〇 デト

デトとは、里近いといふ意味で、カツツの對語であります。「澤のデト」「デト山」は何れも澤の出口や、出口近い山のことでありますから、出口又は出所でところの約言でありませうか。澤の奥から、又

は山の奥から、下流の里に近い地方を指していふ言葉でもありますから、出どころの意でありませう。山の入口地方を山の方から言ひ始めた出所の義であります。

## 一八一 モダツラ

「モダ」とは山の蔓草の總稱と見ても宜しいでせう。灌木叢にこの蔓草類の繁茂してゐる所を「モダツラ」と言つてゐます。塵芥のことを「ゴンド」・「ゴンドモツ」・「ゴモツ」等と言ふから「モツ」と「モダ」とは、共に手の負へない厄介な始末の悪い意味のことから出てゐるのかと思はれます。蔓草を交へた灌木叢を「モダ原もだもとで行かれない」「モダで漕こがれない」「モダに引懸つた」などと言ひます。

## 一八二 山のオダ前

風のあたらない、日當りの濇い場所を指して「山のオダメア」と言ひます。穩かな前地との意味でもありませうか。此のオダマイは雪が深いと決つてゐます。「雉も兎も山のオダマイに居る」。「オダマイの樹木きは質たちはよい」・「オダマイだから濇い」・「葡萄は山のオダマイでなければあるもん



でない」など使はれます。

## 一八三 しつコゲ

「山の尻コゲ」・「澤の尻コゲ」のコゲは下つてゐる部分或は低い方、の意味で、コゲるの元來の意味は、低い、下る、削られてゐる、を意味してゐますから、鎌の柄や天びんを削ることを「コゲ」と言ふも、更に轉じて鎗の柄をシゴイてとなつてゐることも同一語源であつたかと思ひます。物の値段をねぎすることも「コギル」も共に關聯して考へてよい言葉と思はれます。

## 一八四 山のノラ

「山のノラ」と言へば、山の側面の傾斜地を指しての意味ではありますが、「ノラ山」と言へば野原などの丘陵性の緩い傾斜の山の總稱のやうにも使はれて、この語の本來の意味は不鮮明であります。或は野良の山で嶮しくない山の事でもありませうか。

## 一八五 嶮しいはキツイ

山の側面の傾斜地の嶮しいことを「ヒラがキツイ」と言ひ、裾野の寛い勾配を指して「爪先登り」とも言つてゐます。「キツイ山だ」と言へば峻嶮な山と言ふことで、登るに困難な山の意味であります。酒の「あまい」「きつゝ」のキツイは刺戟の強いことで是とは別の語かと思ひます。

## 一八六 イソピラ

山がたけり立つて、岩石の崩れてゐる場所を「イソピラ」(磯平)と申します。こんな場所は、高山殊に火山關係の山に多いやうです。幾百十尺の高いイソピラを横斷通過することは、危険を豫期して進まなければなりません。澤目に斯うした場所が続いてゐると、荒澤などと名がついてゐます。イソピラのイソは海岸の磯を聯想させます。ピラはヒラで斜面のこと「山のヒラ」「屋根ヒラ」と同一義であります。

イソピラは毎年の雪崩れの爲に、地肌が洗はれて、岩石を露出轉落させ、場所に依つては壯麗な美景を呈してゐます。

## 一八七 クラ



山中の谷間で、断崖絶壁の羚羊などの居る岩山を、岩手の諸地方では「クラ」と呼んでゐます。高倉・大倉・志賀倉・小松倉・葉ノ木倉・家寶倉・小倉・女倉・鎌倉・等、皆私達の地方の近くにある名であります。この岩石の崩れて斜面を形勢してゐる場所は所謂イソビラでありまして、「クラ」と、「イソビラ」とは多く一緒なのであります。アヲシシ(羚羊)やマス(猿)などが、よくこのクラからクラへと傳つて外敵の襲撃に備へてゐると傳えられます。

クラとは上部の断崖、岩石の節理などに附せられた古名であつたやうに考へられますが、確かなことは分りません。断崖絶壁をイワガンクラと言ふのもその一例であります。

この倉などには、岩石が剝落して岩脈が露出し、其間に奇形の樹木や草花類があつたり、或は蝙蝠や燕などが棲息してゐたり、天然の奇勝と學術的標本と相俟つて、一方には山の民俗として、山の生活群の尊い傳誦や記念を遺し、今猶ほ山嶽家旅客、又は地質學者の人々に膾炙されてゐるのであります。

## 一八八 ク ポ

クポとは一般に凹地を指して言つてゐます。併し山中では平地が尠ないので、その平地をクポと

稱してゐる事が多いのです。又低地を言つてゐることもあります。イタヤクポなどの名がありました。

## 一八九 ツ ポ

ツポとは山では場所の意に使はれてゐます。「あのツポに行けば黒檜がある」とか、「このあたりはキノコの有るツポだ」などであります。一廓をなすの意、又はそれに屬する意味合ひかと思はれます。併し轉じて下とか底とかの意に働くこともあるのか、山の上から澤の中即ち下方を呼ぶのに「澤ツポ云々」と言ふこともあります。岩手地方で庭園を「ツポマイ」と稱することも何か關係がありませう。

## 一九〇 ヒ ラ

ヒラとは斜面のことを言ひます。平地のことは言ひません。山ヒラは山の斜面、屋根ヒラは屋根の斜面であります。大平、片平、猫平、平場、等皆地名となつてゐます。山の斜面で轉倒することを「ヒラコロビ」と言ひ、又この「ヒラコロビ」を「タンコロビ」とも言ひます。山の斜面を登上



することを、山のヒラをあがると言ひ、ヒラコなどの屋號には斜面の地を説明してゐるものが往々あります。

## 一九一 ツル

ツルとは峯から峯に續く地脈、即ち兩者を繋ぐ脊梁のことです。「某々の地に行くには何のツルを渡つて行く」などで、寧ろ嶺渡り又は繋がり地脈を傳ふその連繋を言ふのであります。高地から高地へ行く聯絡する脊梁山脈渡り、それを「ツルを辿つて行く」と言ひ、それを横斷して越えることを、「ツルを越えて行く」と申します。語源的にはツル(釣)も、ツレ(伴)も、ツラナル(連)も、ツラ(蔓)も、ツル(弦)も皆關係あることかと思はれます。「十三保峠から、北のツルを渡つて、貝吹岳に出た」などと使ひます。

## 一九二 ズリ

ズリと聞えます。「御山ズリに蕨折りに行つた」などで、山麓とか裾野附近とかの意で下方といふことでありませう、尻のことであつて、この言葉は山の方から言つたのではなく、里から山の麓

の方を言ふ場合のものかと考へられます。沼尻・黒澤尻・川尻は水邊の下方の意味であります。

## 一九三 ホラ

ホラとは浅い谷のことで、山の凹地を言ひます。谷や澤の頭は皆この「ホラ」でありまして、澤頭を一樣にホラと申します。澤とか谷は細長い褶襞のことであるが、ホラはその最末端の地形に言ふ名で、勿論水などの無い澤目の奥のことです。三方は壁立して一方は展開してゐる地形のことです。大石洞、大犬洞、長洞などの地名のある所もあります。浅い谷、浅い澤と説明してよろしいであります。

## 一九四 馬タテ場

ウマタテバ(馬立場)の地名は山地の少し大きい澤目には必ず聞かれる地名で、其地點まで或時期に馬の出入してゐた事が分りますが、是は何の爲に斯る馬が出入してゐたかが、未だ説明されてゐません。鑛山の鑛石運搬としては山の入口に偏してゐますし、或はその山の奥に生活する人々の日用品を運んでゐたとすれば、鑛山のやうな事業以外に出ない筈でもありまして木炭焼きに關係が



あつて、日常その木炭を運搬してでもゐたでありませうか、又は何か信仰と関係があつて、山伏行者の類の山入に際して其所まで馬を使用したからの名残りでありませうか、或はその奥は神域とか通交困難の爲に引返す地點になつてゐたのか詳かではありません。兎に角其地點は里から来る馬の一時の足溜りであつて、其地點より奥へは馬が出入出来なかつたやうであります。

## 一九五 ウ マ 阪

ウマ阪も山の出入口によくある地名で、矢張り馬が山に出入するに關係があるやうです。西根村篠崎の馬阪、御所村九十九澤の馬阪も其例であります。前の馬立場と關聯して考へられます。それから放牧地の馬タチバと前條の馬タテバとは全然異なることを注意して置きます。馬を放牧することを「馬を山に上げる」と私達は申してゐますが、この放牧地の馬タチバは、馬の自然の習性でもありませうか、夜中など群を作つて山の上の平坦な地點などに密集し、夜明けを待つてゐるものです。即ち馬は自らの習性に應じて一定の場所に密集して仔馬を中に圍み、群立してゐます。これには外敵を豫防する意味のこともありませう。朝の曉方になるとこの地點から離れて、再び澤の方へ三三五と下つて來ます。放牧地の馬タチバはその夜のとばりの明るるを待つ間の集合地で、前條の

ウマタテバとは違ひます。漢字に依つて事實を混交する適例であります。

## 一九六 シ バ リ

矢櫃のシバリ、小柳のシバリ等と言ふやうに山中の澤目の非常に狭くなつて、川の屈曲してゐる場所などに附けられてゐる名であります。往々にして傳説を伴ひ、大聲を發すれば雨が降るとか、其淵の中にヌシがゐるとかの水神に關係した説話を保存してゐます。シバリはセマイ又はセバマルの語から出てゐるかと思ひます。

## 一九七 ヨ ド マ リ

ヨドマリとは魚溜とか魚止りの意からでもありませうか。私達の地方では鮭のことを「サケノヨ」と言ひ、河に上つて來る鮭を稱して「八月ヨ」或は、「ナカデ」、「十月ヨ」など其季節に應じて斯く呼んでゐますが、此の「ヨ」は蓋し「魚」であつたとすれば、ヨドマリは魚止り又は魚溜りとも考へられます。併し水が深くて流のゆるい所をヨドとも言ひますから、淀み止る意でもありませうか、兎も角ヨドマリの地名は山中に多く、「ヨドマリの淵」とか「ヨドマリの瀧」とかとなつてゐて、



時には傳説を絡んでゐることもままあるやうです。

## 一九八 ヘ グ リ

ヘグリも亦山中に多い名であります。是は山の突端を迂曲してゐる道路などに附けられてゐる名稱で、山の國の往來筋では珍らしくない地名であります。山麓の迂廻跡、丘の腰元の道などにこの「ヘグリ」の名が見えますのは、蓋し經繞へんぎょうの意でもありませんか。橋場のヘグリ、男助おとすけのヘグリなどその例であります。

## 一九九 ワ タ リ

一ノ渡り、二ノ渡り、三ノ渡り、など矢張り山中の川や澤目によくある名でありまして、之は人馬の往來の流れを横ぎり行く場所の地名であります。徒渉して向ふ岸へ渡る、その場所を「ワタリ」と言ふ總稱で言つてゐます。

舟で向ふ岸へ渡る場所はワタリ（自動）ではなくワタシ（他動）であつて、「某々のワタシ」、「何ワタシバ」、又は「某々舟場」の如く他動でありまして、「ワタシ」と「ワタリ」とは全く違ふの

であります。小渡こわた・平渡ひらわた・下澤渡しもさわわた・萬田渡まんだわたなどはワタリの地名の一例であります。

## 二〇〇 沓 か け

クチカケの名は、峠の麓や、山阪の入口にあります。之は馬の沓の取換場所、即ち是から峠に登りかからうとする準備場所で、馬の沓を新らしく取換へて、舊い沓を其場所に捨てて行く地點であります。本來は峠越えなどをする準備場所ではありますが、信仰觀念と一緒になつて沓掛大明神くわかけだいめいじんといふやうな神祠が其所に奉齋されてもゐます。この地點より向ふは神域で、穢れたものを持這入つては罰が當るなどと言はれて、沓など未だ丈夫であつても是非新らしいのに取換へて、舊い沓は其所に脱ぎ捨てて其所の木の枝などに掛けて行くのであります。山嶽信仰にも、垢離場こりばとか草鞋脱場わらじぬぎばが定つてゐて登山參詣家の信仰を得てゐるやうに、峠を上下往來する人馬の憩ふ場所なのでもあります。信仰の方から言へば、山の往來者の修祓の地點であります。

## 二〇一 ソ ネ

山村に多い地名のやうであります。御明神村上野の曾根田（地名及姓）、西山村長山の曾根田（地



名及姓) 雫石村下久保の曾根(地名)などその一例であつて、ソネに曾根の宛字をしてゐます。雫石川の上流志戸前に「上ソネボ」「下ソネボ」があります。喬木の一種に「ソネノキ」があつて、この木の肌が凹凸の烈しい木で著明であります。ソネの地名は、其凹凸の土地の地形を言つてゐるかと思はれます。即ち褶ひだの多い地形、高低の著しい土地の名ではないかと考へられます。ミネ(峯)ヤネ(屋根)クネ(櫃)ウネ(畝)ソネ等のネは同一語源から出て居りませう。

## 二〇二 タ イ

テアイ又はテァエと聞えるが、正しくは平クイのこととせう。川に近い場所の臺地、河段丘などに見える地名で、地形的には野原にも近いが、概して山の中の広い平地をタイと言ひますから、同じく山の中の川に近い臺地段丘的な廣地を言つてゐます。山の中では川に依つて作られた平地をカデ、イ又はカンダエと言ひますから、是は川床臺地とか、川床平地とか申すべき地であります。随つてタイは野原のやうに里近い平原、又は廣い草生地を意味するではなく、山の中の臺地及び平地をタイと稱するものと解してよろしいとせう。

オダイ(大平)・オヂタイ(大地平)・カツラタイ(桂平)・キダケタイ(喜嶽平)・タガタイ(高平)。

ヨシタイ(葦平)・八百平・五番タイ等の地名があります。山中のタイは平地又は平地に近い場所を意味しますが、村の方の臺地は本來は一段と高い平地を言つてゐて萩ノ臺・源臺等ダイと言つてゐても、矢張り兩者の區別の判然しない所もあります。

## 二〇三 ハ プ

斷崖絶壁を、「山のザンカケ」或は「ガンクラ」とも言ひますが、之と同じやうなもので、高くない崖などは「ハブ」又は「ハブカゲ」とも言つてゐます。高臺地の一端の切れ落ちてゐる地形に言はれ、「マガギハブ」などそれで、臺地の上の方から言つたことのやうにも思へます。端部、端部の意味で、「危なくハブから墜ちた」「其方へ行けばハブはあるぞ」「今ハブから攀おぼつた」等その語例であります。

二〇四 川カ 袋ポウ

山の中の川が地形的に一方が狭まつてゐて其反対の方が廣くなつてゐる所などを言ひます。水が作用して少しく河床を形成してゐる土地、一方が開けた小さな盆地のやうな所、又は單に水の邊り